

お断り

この巻は、3巻の数カ月後に発売する前提で書かれています。

あらすじと登場人物についてはこの後書いてありますが、1〜3巻の内容を覚えてないところよつとわかりづらと思います。

それでもいい、という方のみ読んでください。

マテリアルクライシス  
しっぽと基本的神権

## 登場人物

時野和宏

本編の主人公。十七年前の飛行機事故で人間を超越した魔術能力を持つようになる。

警視庁の魔術専門部署「魔術分室」に所属。競馬が趣味。収支は常にマイナス。万年金欠。

松永 こころ

ヒロイン。魔術分室の新人。無意識に魔術を使い、感情がポニーテールに連動している。ちなみにどう見ても中学生。

戸田弓子

十七年前和宏達を救った魔術医師戸田宗二の娘。和宏同様の力を持ち、警察のキャリア。和宏は姉と呼んでおり、頭が上がらない。

赤い風

裏社会の請負テロリスト。和宏達を数段上回る力を持つ。絶世の美貌の持ち主。

高原政人

弓子の父の恩師。ノーベル賞学者。数度の閣僚歴もある。

高原早苗

四十歳以上年が離れた高原の妻。和宏達と同等の魔術能力を持つ。

播磨美由

魔力物質「脈望」によって死から蘇生した少女。

神崎命

パンドラの箱に宿っていた災厄「運命」。今は人間となっている。

あらすじ

## 1巻 「じつぽとテロリスト」

物理学者戸田宗二により「総合魔術理論」が発表され、魔術が社会の一部になった時代。

人は「魔術製品」を身につけることで簡単な魔術を使えるようになってから数十年が経過した平正四〇年の四月、松永こころは魔術分室に配属された。

そして、来月開催される首脳会談での警備任務が初任務となる。その任務で、実は神話上の

奇跡をそのまま再現できるような天然魔術製品「魔力物質」が存在することが明らかになり、瞬間移動を可能にする魔力物質「スィームルグの羽」を利用したテロが企まれていることが判明した。

その捜査の過程で請負テロリスト赤い風と遭遇した和宏は、一度はスィームルグの羽を奪い返すことに成功するも、瀕死の重傷を負わされて姉まで人質に取られる。

姉の命と羽の交換を要求された和宏は、一旦は要求を飲みかけるも、一度は羽を奪われることすら織り込んだ赤い風の真の狙いを看破、それを逆手にとって、スィームルグの羽を使って赤い風を宇宙がいかに追放し、事なきを得た。

## 2巻 「じっぽとコンピュータウィルス」

その3か月後、国会図書館で巨大な虫が大量発生。蔵書データを大量に食いつくす。

それは脈望という魔力物質で、本の文字を食うことで大量の力を蓄え、人を神にするという道教の説話に基づく力を持っていた。

脈望の持ち主は、数日前交通事故で瀕死になった女子中学生で、彼女の命を救うために脈望は活動し、都内の様々なコンピュータデータを食らっていた。

事情を把握した和宏達は、女子中学生を魔力物質ごと東京湾に運び、意図的に暴走させて、核ミサイルをはるかに上回る威力の魔力物質で攻撃し、魔力物質の破壊に成功した。

## 3巻 「じっぽとパンドラの箱」

そしてさらに三か月後、和宏達は「ギリシア秘宝展」の警備につく。

はじめてギリシア国外に出た同国国宝「パンドラの箱」が異様な反応を示し、直後から異常な希望に取りつかれた人々による自爆に近い事件が続発。

それらは、魔力物質、パンドラの箱に宿る災厄「望」の仕業であると判明した。望は、災厄である自分達を嫌い、人間になる方法を求めている。その影響が、無謀な希望に囚われる人間を増やしているのだろう。そう語ったのは、同じくパンドラの箱に宿る災厄「命」だった。命は、「絶対に避けられない破壊の運命が見えてしまう」という力を持っており、命と同じくらい災厄としての自分を嫌っていたが、そのために周りを撒きこむことをよしとせず、望みの活動を止めようと和宏達に協力を求めた。

望は「本人が固く信じていることを現実に行える」という力を持っており、そのために、とある死刑囚を利用する。その死刑囚は、ある女優の狂信的なファンで、「一度死んで全てのしがらみを清算した彼女と結ばれる」と本気で信じて彼女を殺し、その後一切罪を否認せず死刑になった（本人はその後自分も生き返ると信じていた）。

それらの事情を調べた魔術分室は、死刑囚の実家である暴力団本部を襲撃し命を追跡、しかしあと一步のところを取り逃がしてしまう。そうしている間に、命はところが無数の銃撃で死

亡するという未来を見てしまう。

それを知った和宏達は、「こころが銃殺される前に他の方法で殺す」という方法で未来を変えようとする。そのためにこころに放たれるはずだった攻撃は、直前で方向を変え、こころとは正反対の方向に放たれる。その攻撃は見えない何かに命中。直後命の絶叫が響き渡る。

実は、命が見てきた『不可避の破滅の運命』は命の無意識の自作自演だった。

それを知って暴走する命を、和宏は魔力物質、パンドラの剣を使って何とか鎮静化させた。

その直後現れた望は、自分の全てを使って命を人間にすると、自分は消滅した。

一 姉が帰ってくる日

“とゆーわけで、お姉ちゃんは今少しろーどーしゃのけんりをしゅちよーすべきだと思っ  
“……どこでそんな言葉を覚えてきたのですか？”

予想しない弟の言葉に、思わず聞き返す。一部明らかに棒読みの箇所があるあたりからして、  
読みかじり見かじり聞きかじりの知識だろう。

“い、いろいろ勉強したんだよ。お姉ちゃんの大好きなあいつらは、『ろーどーは一日に八時間  
一週間に五日』って決めているんだってさ”

“それは原則ですよ。多少無視されることとてあります。絶対的なものではありません”

“今のお姉ちゃんのどこが多少なんだよ。ここしばらく全然休み無しでずっと働き通しじゃな  
いか。そんなことしてたらいつかお姉ちゃんがどうにかなっちゃうよ。どうしてお姉ちゃんが  
自分を削ってまで働かなきゃいけないんだよ!!”

後半は問い詰める口調になっている。いつものことだ。

“仕方ないでしょう。私が彼らにならって一日のうち三分の一しか働かず、七日に二日ずつ休  
憩など取ったら、彼らは絶滅する以外にできることはありません”

“別にそうなったっていいじゃないか!! あいつらがお姉ちゃんのために何をしてくれた  
っていうんだよ。あいつらが絶滅して僕たちが何に困るんだよ!?”

“何一つ困らないでしょうね。彼らが今この瞬間全責そろって自殺しようとも、私やあなたが  
私やあなたでいるために困ることは一切ありません”

否定することさえアホらしい事実だ。自分たちは、彼らがない時代から存在してきた。

“だったらもういいじゃないか!! あんな奴らのためにお姉ちゃんをこれ以上無理を続け  
て苦しむ姿なんて、僕は見てられないよ!!”

“そうして彼らを絶滅させてしまったら、私は以後ずっと自責の念にさいなまれるでしょう。  
そのときあなたはもっと苦しむことになります。それでいいのですか?”

“う……”

これで弟が半泣きになり終わる。今までそうだった。だが今回は違った。

“……もういやだ、もう我慢しない。あいつらの理屈に従えば、お姉ちゃんみたいな働きすぎ  
るしこちゅーどくのわーかほりつくは、力づくでも休ませることが正解なんだ!!”

“……まあ、いいですけどね”

突っ込む気力もうせる。「しこちゅーどくのわーかほりつく」、重複である。仕事中毒を別  
の言葉で言えばワーカホリックなのだから。

“ごめんね、お姉ちゃん、いたいのは一瞬だから我慢して!!”

“あ、こ、こ、ら、ま、待ちなさい!!”

こうして、史上最大の姉弟喧嘩の火蓋がきっておとされた。



意だが）いつものことだ。しかし今回はなんとか八千円に届かせる必要があった。

間近に控えた平正四十一年四月一日をもって、海外留学中だった戸田弓子が警視庁特務部特務捜査課魔術分室に復帰する。その弓子の歓迎会の会費および復帰記念プレゼントの代金が、ちよつと豪華に合計八千円と決定されたのだ。それがもう一つの特事情だ。

財布はもとより銀行の預金残高までひっくり返しても、自由になるのは三千六百四十三円。これを、どうにかして八千円以上にしなければならぬ。

当日のコンディションはかなり重要な要素だ。あらためて馬たちを注視する。

その額を伝う汗。ぬぐってもぬぐっても止まらない。

「しかし、何でこんなに熱いんだ？」

時野和宏は特に暑がりでもない。それでも三月末の今日汗がとまらない。今日の気温は、とても三月末と思えないからだ。天気予報では最高三十四℃といていた。近くに温度計はないが体感でわかる。その予報は裏切られていない。三ヶ月、下手すれば四ヶ月先の暑さだ。

苛立ち紛れに額の汗をまたぬぐう。そのとき隣に涼しいものがやってきた。

日差しは変わっていない。雲にさえぎられた様子もない。それなのに四十歳位の男性が隣にやってきただけで少し涼しくなった。彼の身体は、青い壁に包まれていた。

（へえ、とうとう出回り始めたのか）

その姿に内心で感心する。彼は、携帯クーラーを使用している。

今から約二十年前、「全物質と全現象と全現象の最小にして最終の構成単位」を「魔力」と名づけた一大物理学理論「総合魔力理論」が発表された。それによる進歩は大きく二つ。核融合原子力発電所の実用化など新技術の実用化。もう一つ特定の現象を起こすことに特化する機器を多数開発し、携帯電話の充電程度なら自分の魔力だけで行えるようにしたことだ。

後者の機器は広く一般に魔術製品と呼ばれ、生活の隅々に普及した。となりの彼が身に着けているのはやや高級品である。現在日本では警察官の中でも一部しか所有していない魔術製品、防壁。人間の目には見えない透明な壁を身体周囲に展開し、拳銃くらいなら簡単に防ぐ。その魔術のごく微弱なものを周囲に展開して、その中で涼気を循環させる。

通称「携帯クーラー」。値段が高いことと携帯電話の充電よりは数段に高い素質を必要とするため、使う人間は一握りと聞いていたが、彼は少数の例外に属するようだ。

なお色が青いのは技術上の制約ではなく、周囲にわかりやすくするための配慮である。

「うーんと、あのうまとあのうまかなあ」

携帯クーラーを使用する男性は和宏の左隣にいる。よってここは反対の右隣で、競馬新聞さえみずに、パドックの振る舞いだけで購入馬券を決めていた。

「警察手帳ではなく個人用の手帳に書かれた「あのうまとあのうま」の組み合わせは「①—⑧」。

「その①—⑧ってのはどういうことだ？」

「どういふことといわれましても、私にはあのうまたちががんばりそうかなあと思っただけで



す。なんとなくわかりませんか？ こう、『よーし、今日は絶好調！』とか『なんだか今日は身体が重いなあ』とかそういう感じの雰囲気」

後頭部のポニーテールが、手話でもするみたいにめまぐるしく動く。

その動きに、携帯クーラーを使用していた彼が少しぎよつとする。

無意識魔術。呼んで字のごとく、無意識に魔術を使うことだ。人によりさまざまな内容があるが、ポニーテールが勝手に色々動くというのは珍しい。彼の反応は標準的だ。

「お前みたいなネイティブねこスピーカーといっしょにすんな。……つてそうか、猫語と馬語は近いものがあるのか。スペイン語とポルトガル語はどっちかがわかればもう一方もおおよそ理解できるっいうけど、それと同じようなものかもな」

「何を言ってるんですか？ だいたいなんです、そのネイティブねこスピーカーって」

「にやお にやお にやにやお にやお うにやお」

「うなご ふなご なお なおなお ふなななななななな」

「……間髪いれずに返事をして、ネイティブねこスピーカーじゃないと？」

「こ、これは、その、と、とりあえず何か言われたら返事をするのが礼儀でしょう？」

「だったらなんでうろたえる？ まさか遺伝子レベルか？ 遺伝子レベルなのか？」

「……何かものすごく誤解されてるような気がするんですが」

そんなところの吹きは聞き流して、近くに設置された電光掲示板を見やる。そこに提示された①―⑧の掛け率、8.6倍。和宏が考えていた①―⑩と似たような数字だ。

(確かに、来てもおかしくみあわせじゃねえ)

和宏はこの最終レースに照準を合わせて予算の半分近くを残していた。読みが的中して①―⑩がくれば、歓迎会費とプレゼント代を引いても手元に二千円くらい残る。そこで帳尻を合わせられる自信があった。だから今まで外してもそれほどショックを受けていなかった。

だが、その自信がいよいよ目当てのレースになってかなり揺らいでいる。この第十一レースの前まで、全敗。この季節はずれの暑さは馬にも少なからず影響しているようで、かなりのレースが荒れたことも原因だろう。

そして、松永心は明らかに今日ツイている。単なるビギナーズラックなのか、あるいは本当に馬語がわかっているのかはわからない。だが、さっきの第十レース前までの中率八十%。

もちろん完璧ではない。外してもいる。だが、それはこの暑さでいどではありえない「こんなのがわかってたまるか」という大荒れレースである。あんなのを一点で読みきれたら、かつてこの第二東京競馬場で起きた事件、空から車が降ってくることさえ看破できるだろう。

いずれにせよ今日これまでの的中率0%の自分よりはあてになりそうだ。

予算を等しく分けたら、どちらが当たっても八千円に届かない。それでは意味がない。

(どうする？ ①―⑧か、①―⑩か？)

わあああああああああああああああああああああああ————————  
 今までも増して、歓声が遠かった。

「は、はは、はははははははははははははは……」

自分の笑い声も人生最高クラスに鬱ろもとい虚ろだった。

「うーん、残念。やっぱりちよつと外国の馬はわかりにくかったかな」

馬語がわかっているとは思えないこころの呟きも、右耳から左耳へ流れていくだけだった。

結局来たのは①―⑪、和宏の手元に握られた馬券は①―⑧。⑧はレース開始早々馬群の中に消えて、そのままトップ争いに加わることはなかった。

（なんでだ、どうして俺は自分を信じる事ができなかったんだ！？）

読みを変えること自体はいくらでもある。恥でもない。「ツイている奴に乗る」「ツイてないやつを逆をいく」、ギャンブル全般につうじる戦術だ。しかし、今は雑念が入った。「絶対八千円」という焦りから確率に逃げた。自分の頭と直感で考えることを止めてしまった。

（どうして、どうして俺は……）

一番悔しい負け方をした。情けなかった。哀しかった。

数日後、都内のある料理店で、戸田弓子の復帰歓迎会が行われた。その席上で鞆がプレゼントされた。本人の希望をふまえてのセレクションである。

そのプレゼント用の包装紙の記載はこうである。

「贈 魔術分室一同 但 約一名除外」

「——くしゅんっ!!」

目の前で、松永心は大きくくしゃみをした。

そのあと、自分の意思によらずぶるっと身体が震える。

四月初旬だということにかなり寒かった。警視庁特務部特務捜査課第一魔術分室の窓から見る空は思い灰色だ。そして細かく舞い散る季節はずれな雪。

「高度に政治的あるいは社会的に重要」な事件を扱ったため、素質を見込まれて特別な訓練を受けた、警視庁に三十人といない警察官。松永心はそんな通称魔術捜査官の一人である。

そしてその仕事場は常に二十四度になっているはずである。しかし、精神的なものまで空調でどうにかすることはできない。かなり寒いと感じてしまう。

「うう、お茶あゝ さむしんぐほつとおゝゝ」

給湯室に向かい、空になったマグカップに紅茶を入れて自分の机にもどる。

席に戻り、口をつける。芳香を漂わせる温かい液体が流れ込み、寒さを中和してくれる。

幸せな気分になりながら眼をつむると、頭に浮かぶものがある。

「こおおおたあああああああああああつうううううううううううううううううううう」  
今ここには自分だけという認識が、頭の中にとどめさせず口走らせた。

冬の風物詩、代名詞。日本が世界に誇る暖房器具、KOTATSU。二ヶ月ほど前、雪が降ってもおかしくない寒さの日、「こたつにはにやんていうか人をひきつけてやまにやいにやに

かがありますよね」と言ったら、「お前、人<sup>猫</sup>って言っただろ?」と聞きかえされた。にやぜ?

寒さのため、あつというまに紅茶を飲み干してしまう。

「お掃除でも、しようかな」

身体を動かすという意味も込めて、もう一度給湯室に向かうと、そこで雑巾を探しお湯でゆすいで軽く絞る。それを使って、自分や他人の机やロッカーなどを掃除していく。

今この部屋にあるロッカーや机も半分以上は、誰にも使われていないため何もない。その事実も、外でちらつく雪とあいまって寒さを強くする。

いくつかの机を掃除していくと、久しぶりにすでに使われている机にあたる。

整理整頓を心がけているからというよりは、もともと何もないので結果的に片付いているその机は、自分と同じくこの第二分室へ移動してきた時野和宏のもの。分室が一つのところは競馬雑誌やら関連グッズやらでやや雑然とした雰囲気だったが、移動を堺に様変わりした。

「私は葛西さんほど甘くないからね。覚悟しておきなさい」

先日 和宏は弓子の歓迎会で、「但し約一名を除く」という超屈辱的な記述がされたプレゼントを渡す役割を面白半分に与えられた。それを渡すとき、和宏が弓子に言われたセリフ。

その言葉の意味の半分は、机を見てもわかるとおり、今やることがないからと競馬予想など許さない。あたりだろう。だが、それだけではない。

時野和宏は、自分のしつぽなどおよびもつかない稀有な、人間の限界も超越した身体魔術能力を持っている。それほど力ゆえに、和宏はまず力を使うことより隠すことを意識して生活せざるを得なかった。だが、これからは多少なら弓子が食い止められる。

だから、これからは今まで以上にがんばって働きなさい。プレゼントを受け取る時、和宏だけでなくころをみて笑ったのはそういう意味があったからだろう。

あらかた掃除をおえて席にもどる。当面やることがなくなつて、何か落ち着かない。そんなおり、ドアがやおら開く。

そのあと、すぐに女性が大きな手提げ紙袋を持って入室してくる。服装はこころと違って背広姿。身長は百六十五センチほどでこころよりやや背が高い程度なのだが、背広をぴしっと着こなしている雰囲気などもろもろから、頭一つは背が高いような感じを受ける。

ハイレベルに均整がとれた目鼻の顔立ちが、後に流した黒髪や縁のない眼鏡とあいまって、見るものに警察官よりやり手の実業家という印象を与えるかもしれない。

戸田弓子。かつて時野和宏が、全てを犠牲にしても救おうとした相手。

一年前知り合った彼女は、数日前正式に帰国し分室に復帰した。現在の上司でもある。

「ただいま、松永さん、何かありましたか？」

「いいえ、特に何もありません」

「一時的なものかと思いきや、結構な勢いですよ。ひよつとしたらつもるかも知れませんが春物の背広につもった雪を払いながら、入ってきた弓子は言う。

その弓子に、こころは提案することにした。

「寒かったですか？ お茶でも入れましょうか？」

「ええ、そうですね。いただけますか？」

「はいっ、ちよつとまってくださいね」

すぐにまた給湯室に向かい、彼女のコップに紅茶を入れ、席にもどる。

戻った時、彼女はさっきころが掃除した座席の一つ、副室長席に座っていた。

「どうぞ」

「ありがとうございます」

弓子は差し出されたコップに一口つけ、満足そうに溜息をついた。

そうした何気ない所作すら、自分とは違つとつくづく思わされる。

どこがどう、と言葉にはできないが、自分にはない「おとなっぽさ」に満ちている。

松永心は、数日前の平正四十一年三月三十一日をもってそれまでの職場に別れをつげた。所属はそのままだが、仕事場が物理的に移動した。かつての分室の真下に当たる場所へ。

組織上大きな変化はない。魔術分室に副室長という地位ができ、留学帰りの戸田弓子警部(帰

国時に昇進) が就いたくらいだ。今こころがいるこの新しい仕事場は「第二分室」と呼ばれているが、これは部屋の名称で部署の名ではない。

——が、表向きの説明。約一年前、配属早々扱った大事件が決着した四月十九日、さまざまな魔力物質が世界中で覚醒あるいは半覚醒した。それはもはや疑う余地もない。副室長はその影響を受けて今後も増加する魔力物質関連事件の任務専門部署の責任者で、権限は室長と同等。しかし目的が極秘事項にかかるため表立った組織改変できず、「第二分室」は「表向きは部屋の名前だが、事実上部署名」という妙な扱いになっているのである。

「では、今日の戦利品を記録にかかりますか」

こころが入れた紅茶をあげたあと、大きな紙袋を机の上ののせ、中身を取り出す。

出てくるのは壺に皿、十字架や数珠や掛け軸と、地域も年代も多様な美術品や骨董品の数々。

自分のパソコンを起動させ、弓子は慣れた手つきでそれらの情報を入力していく。

それらの無造作に置かれた品々を、こころは深呼吸してから注視してみる。

それで伝わる。言い知れない迫力。

魔力物質、今までは「自然が作り出した天然の魔術製品。現行の魔術製品と同じでどの魔術を使った」という意味だった。だが、こころ達にとつては「全物質と全現象の最小にして最終の構成単位たる魔力が、複数の現象を同時に引き起こすことで、神話の中で描かれた奇跡さえそのまま再現することが可能な存在」という意味を持つようになっていた。

これらのすべては、「魔力物質かもしれない?」と判断されたものたちだ。

この新職場に移動してから十日ほど、こころたち通称「第二分室」のメンバーの仕事は、魔力感知の魔術製品を装備して都内を調べ、怪しい代物を可能であれば回収すること。

今日は留守番だが、昨日はこころも外回りをしていて。明日もまた外に出る予定である。

発足以後こんなことばかりしているので、第一分室の面々からは、「魔術分室じゃなくて美術分室だな」とか冗談半分に言われたりしている。

お茶を飲みほした後、また寒さに震えた心は、窓外の雪を見ながら

「ひよっとしたら、この季節はずれの天気も、ここに並ぶどれかのせいかもしれませんね」

こころの言葉に、弓子は微笑する。

「可能性はありますね。だとしたら、是非研究解析して実用化したいものです。なんだかんだ言つて夏にはしばしば水不足に悩まされる日本ですからね。天候さえ自由に操れるようになれば、そういう問題もたちどころに解決するでしょう」

弓子の口調はいつもとかわらない。こころの冗談を冗談として受け流したのだろう。

だが、言った当のこころは、弓子の返事を冗談として聞き流せない。

空間を超越し、死さえ取り戻し、部分的に人の精神さえ操る力を持っている魔力物質。

ならば、天候を操る力とて、持つていてもおかしいことはないのではなからうか。

「——ふにゅっ!」

そんな精神の内側からくる寒さが、こころに何度目かのくしゃみをさせた。

「——さあ、正解は!?!」

クイズ番組みたいなノリで質問しつつ、十歳位の男の子が両腕をある方へ伸ばすのばした先には白衣姿の女性がノートパソコン片手に佇んでいた。

ノートパソコンを持つ女性は、厳かな表情のまま、

「評価額は三五〇万円です」

その「回答」を聞いた瞬間、和宏は

(いよつしやあああああああああああああああ!!)

雄叫びを揚げつつ力一杯ガッツポーズ。

もちろんどちらも頭と心の中の話である。数分前頭と心にとどめず実行に移したら、周囲を思いつきりヒかせてしまったので、今回は自粛。

(よし、これでもう命は突き放した、あとは美由だけだ!!)

「では、次にこちらです」

そんなエキサイトする和宏とは裏腹に、ノートパソコンを持つ女性は事務的だ。

彼女の名前は高原早苗。四十歳以上も年上の夫と、和宏と同等の魔術能力を持つ女性である。

彼女の言葉に従って、同じような白衣姿の男性二人が台車をおして今日の前にある仏像をさげる。入れ替わりで、別の台車が日本刀をのせて入ってきた。

「うーん、特別な力はないかなあ。五〇万円」

「僕も由美お姉ちゃんと同じかな。力はないと思う。値段は三〇万円」

「五〇万円」

少年と少女が意見と金額を述べた後、和宏は金額だけと言う。

和宏は、同僚が見れば「美術分室」という印象を一層強めるだろうことをしていた。

飾りも何もない灰色の天井と壁と床に囲まれた様々な機械が設置されているここは、東京大  
学上のキャンパスの特別実験場である。

ここで矢継ぎ早に出入りする様々な美術品やら骨董品を見ては、少年と少女が意見を述べている。その場にいわせて、万一の危険に備えることが和宏の今の仕事だ。

和宏にとってはどちらも見知った顔である。名前も知っている。少女の方は播磨美由。少年は神崎命。美由の方は半年ほど前右手足を失って死亡後魔力物質の力で生き返った。命にいたってはそもそも人間でさえなかった。ほんの一ヶ月ほど前、災厄から人間になった。

「こちらは評価額二千五百万円です」

「ええええつ、これが? さっきのと全然変わらないじゃないか!?!」

「……三千万円だっていったら、一万円札三千万枚か五万円札七百枚、だよな？」  
命に続いて、和宏も気がついたらそんなことを呟いてしまう。

日本刀はこれも含めて三度登場した。前の二度はそれぞれ評価額十万円と三十万円。和宏の目にも、それら二振りとのこの一振りが特別違うようには思えない。

五十万と言った少女も、やや唾然としつつ呷く。

「……どー見ても同じよね。贗作が犯罪だってわかっているけども手を染めて一儲けしたくなる人の気持ち、何となくわかった気がするわ」

「だよねえ。うまくだまされれば何千万円が一日でかせげるんだもんねえ」

「……仕事中の警察官がいるんだぞ。そういうことは思っても口にしないでくれ」

「はい。口にするのはあとにしまーす」

「計画は頭の中で入念かつ完璧にねりあげまーす」

和宏が苦笑して注意すると、命と美由の順に素直に返事した。内容は素直にほど遠いが。この返事をふくめて、見た目は命も美由も遊んでいるようにしか見えない。

だが現在和宏が警察官としての職務中であるように、美由や命も遊びでこの特別実験場に來ているわけではない。

弓子やころや和宏が都内をかけずり回って探し当てた魔力物質候補の品々を、各種機械のあと、最後に調査ことが美由たちの仕事だ。

ほんの一ヶ月ほど前決着したパンドラの箱がらみの事件でも、美由は「何かある」と感知していた。現在の技術では不可能な感知能力を、鑑定のために借りているのである。

もう一人、八年前死んだにもかかわらず記憶ごと作りなおされた女性もいる。彼女も同等程度の力を持つ可能性は高い。だが、ここに彼女の姿はない。

彼女は自分自身が記憶ごと複製された存在であることはもとより、「婚約者」が殺されたことさえ受けいれることができていない。とても協力を要請できる状況ではなかった。

「こちらが最後です。現在の得点状況は神崎様が五点、播磨様と時野様が八点です」

評価額三千万円の日本刀が下げられた後、早苗が告げる。

（集中しろ。これで勝てば二千円の臨時収入だ！）

その言葉に反応して、もう一度気を引き締め直す。

ただ心配を探るだけもつまらないので、評価額をあてあつて競争しよう。漫然と当て会うだけでは緊張感がなくなるので、千円ずつ出し合って最多正解者が総取りにしよう。

これらを提案したのは、神崎という名字を持った元災厄の命である。

「では、最後にこちらです」

早苗の言葉とともに、今度は三十センチほどの古びた金属製の円盤が運ばれてきた。

「……これ、なに？」

「銅鏡だね。ギリシアで『古代日本の美術展』が開かれていた時に見たよ。まだ政治が神のお

告げを聞くことだった時代につかわれた道具だね」

「そういえば、歴史の教科書で見たことあるかも」

見た目は数歳年上に見える美由に命が説明する。外見こそ今年中学三年となった美由よりさらに二〜三歳年下に見える命だが、中身は最低二千歳の元災厄だ。災厄を捨て人間になろうとして集めた知識の量は並ならぬものがある。今普通に日本語で会話できているのも元災厄ゆえのお手軽能力ではなく、人間になるために勉強した賜物の一部だったりする。

人間になった経緯が無茶苦茶なうえ物的証拠がないから公表はされない。しかし歴史学者たちいわく、「本当なら第二次世界大戦が起きる」ような事実も多数知っているらしい。

「力は、特別すごいような感じはしないかな。値段の方は五万円」

「あたしは、そうね、力の方は普通ね。値段は……三万円」

命に続き、美由もすぐに宣言した。

（どうする、確実に五百円をとるか？ それとも勝負にでるか？）

それを聞いた後、和宏は考える。

現在美由と和宏は八点でイーブンだ。対して命は五点。よって美由と同じく三万円と言っておけば、正解の発表を聞くまでもなくその瞬間決着だ。命から五百円を獲得できる。

評価額ジャストでなくても、一番近い金額を言ったものがその勝負をとる。よって三万円以外の数字を言えば、二千円を得るか千円を失うか、だ。

もつとも「一番近い金額が正解と十倍以上はなれている場合は全員不正解」というルールなので、五百円入手の可能性も残りはする。

（どうする？ どうする？？ どうどうする？？？ 君ならどうする？）

思う。君って誰だろう。

「おまわりさん、そんなに勝負にこだわらなくてもいいんじゃない？ たかだか千円——」

「たかだかかっていうな！！ 千円失うか、五百円手に入れるか、二千円手に入れるかの瀬戸際なんだぞ。今千円失ったら、またしばらく人間のパンの耳がペット用に化けるんだぞ。パン屋のおばちゃんに『ペットを飼ってる割には不定期に買いに来ますよね？ ……まさか、まさかあつ？』っていいいたそーな視線を注がれる屈辱がお前にわかるか？」

「……わかるどころまで随ちたらもうおしまいだってことはよくわかったよ」

「同感ね、それ」

痛いところをつかれて、和宏は精神的に一歩うしろさった。

（い、今ある五百円を確実に取るか？ 乗るかそのかの勝負に出るか？）

諸々の屈辱から目を背けるため、思考に没頭する。

自分の目利きなどあてにならない。これまで和宏が獲得した八点も、あてずっぽうに言ったら三人の中で一番に正解に近かった、が積み重なった結果でしかない。

「——俺は、命と同じだ。五万」



腹を決めて、そう宣言した。

今までがそうであったように、五万という金額に深い意味や根拠などない。ただ、単純に勘で美由が言った三万よりは価値がありそうに思ったからそう言った。

「では、正解です」

早苗の言葉に、喉の奥で何か思い音がする。

「評価額は、二万円です。某博物館で販売されているレプリカの一つです」  
がつくりと、足から力が抜けた。その場で崩れ落ちる。

「……そうか、レプリカだったか」

敗北感はある。悔しさもある。だが二週間ほど前第二東京競馬場で感じたものはない。

あの時は「八千円を確保しなければならぬ」という直接勝負には関係ない事情で自分の予想を曲げた。だが今は違う。何の制約もなかった。五百円を確保で手を打つこともできた。勝負に出るとしたら運に頼るしかない。すべて承知のうえだったから。

「総合結果です。時野様、八点。神崎様、五点。播磨様、九点。勝者は播磨様となります」

「はい、お姉ちゃんおめでとう」

早苗の結果発表の後、命はすぐに財布から千円札をとりだして美由に渡す。

そのあと、命は振り向いて和宏のほうを見る。

悪意もないにもないまっすぐな瞳で、ほら、はやく、と促す。

「ああ、ほら。一点差だろうと勝ちだからな。おめでとさん」

そういって、和宏も財布から千円札を取り出す。中には千円札が一枚いる。

金自体がないわけではない。弓子への八千円を捻出するために一万円借りたその残額だ。

それを取り出して、美由に渡そうとする。

「？ おまわりさん、どうかしたの？」

それをうけとって自分の財布に入れようとした美由が聞いてくる。

聞きたくもなるだろう。おめでとさんといって差し出されたから、美由は千円札を受け取って財布の中に入れようとした。だが和宏が右手を千円札から離さないため実行できない。

「あ、悪い。ちょっと待ってくれ」

万力のごとく千円札をつまんではない右手の親指と人差し指を引き離そうとする。

だが、右手は別個の意思を持つかのように千円札をはさんで離さない。

「くそ、何してんだ。離せ。離せ！！」

「さっきもパンの耳がどうかいってたけど、まさかあれ、冗談じゃなかったの？」

「冗談なんかじゃねえよ。事实は冗談よりも壮絶だぞ。人間ってのは飢えれば口に入るものも何でも食う。色々教えてやろうか？」

「ほ、本当に今お金ないの？ だったら、別に無理しなくても……」

「そういう問題じゃねえ。俺は勝ったら遠慮なくもらうつもりだった。今手元に現金がなくて

も、キツチリ取り立てるつもりだった。いつまでも払わなかったら利子まで付けるつもりだった。俺は負けたんだ。ここで負けを有耶無耶にすることは、今まで俺が勝ってきたことも否定することなんだ!! それをやっちゃったら、この先俺はもうギャンブルをやれねえ!!」

「いっそ、止めるいいきっかけになるんじゃないかなあ」

命が目を細め冷たい口調で言うが、無視。

「とにかく受け取ってくれ。これはもう俺のものじゃない」

強引に右手を千円札から引き剥がすと、千円札は宙を舞い床に落ちた。それを拾おうとはしない。別に美由に対して含むところがあるからではない。自分で拾ってしまったら、また同じことの繰り返しだからだ。

「帰りの晩御飯、あたしがおごろっか? お金なら今日のお給料もあるし」

いまだきのローティーンの小遣い事情は知らないが、すくなくとも美由と命について、千円はそれほど大きい金額ではない。この鑑定作業一回協力するつど警視庁、つまり国から五千元(交通費は別途支給)もらっている。実作業約三時間で五千元。悪くない稼ぎだ。

「気持ちだけうけとっておく。半端にまともな人間の食い物の味を思い出しちゃうと、そのあとがまたしばらく辛いからな」

「人間って、あたしが思ってる以上にタフな生き物なのね」

何か青ざめた顔で、千円札を自分の財布に入れながら、美由。

(そうだ。もうあれは俺のものじゃない。現実を受け入れろ!!)

千円札が美由の財布に収まる瞬間を記憶に焼き付けるため数秒間目を閉じる。

競馬場で、敗北を受け入れるために何度となく繰り返し返してきた小さな儀式。

数秒後、目を開けたとき、目の前には大きく手を振りかぶっている命がいた。

(!?)

どうもよくわからない。それが反応を遅らせる。

確か時野和宏は命たちが魔力物質候補たちを鑑定する場で、万一の危険に備えていたはずだ。そのついでにちよつとゲームをやって、惜敗を喫したところだったはずだ。それがなぜ、今いきなり殴られようとしているのだろうか。

それらの疑問は目に飛び込んできた映像によって吹き飛ばされる。時野和宏の目は認識した。命の振りかぶられた右手に札束を。拳銃の弾丸さえ見ても反応することを可能にする動体視力は、五万円札が二十一枚とまではつきり認識した。

それが和宏の頬に触れる。

「ぶほおおおおおつ!?!」

紙切れ二十一枚。目にでもはいらない限り大事に至ることはありえない。しかし時野和宏の頭は砲丸が直撃したような衝撃を実感した。身体はそれを忠実に解釈して吹き飛んだ。

五メートルほど吹き飛んでから何とかゆっくりと起き上がる。

ようやく片膝をついたころ、身体に覆いかぶさる影があった。

頭を上げれば、そこにはさつき札束で一撃を加えた命がたたずんでいる。

「……『札束は一部の人には打撃武器になる』って、本当だったんだ」

自分でもまだ信じられない、という表情で呟いている。

「つ……だ、誰から聞いた、そんな話？」

「高原のおじさんだよ。『戸籍上十歳である以上、学校へ行かなければならん。だが今更読み書きや掛け算九九なぞ学ぶ必要はない。人間と社会生活を学ぶのじゃ』って言われたんだ。今日は『学校じゃ教えてくれない特別授業。大人への階段その①。金の力』だったさ」

「……確かに学校じゃ教えられるいわね。こんなこと」

少しのけぞりながら、美由。

「あんのクソジジイ、年端も行かない子供に何教えようとしてやがるんだ！！」

この場にはいない「高原のおじさん」、ノーベル賞学者をはじめとした豪華な肩書きを持つ男に罵声を叩きつける。

その直後、背後で何かが突如発生した。

(一?)

慌てて振り返る。そこにはさつきと変わらずノートパソコンを手にした早苗の姿がある。

しかし、すべてが同じままではない。

ず(づ)づ(づ)づ(づ)づ(づ)づ(づ)

目には見えない。だが肌で感じる。今の早苗の周辺には得体の知れない殺気が生まれ、それが和宏の身体にまとわりついている。というか、なんか、目が黒い。暗いつていうかCRY。

「な、なあ、どうしたんだ？」

『ジジイ』にも言いたいことは多々ありますが、政人様も自分でよく『ジジイ』というので、それは認めましょう。その点おじさんと表現した神崎様、あなたは中々優秀です」

和宏の問いかけを無視して、早苗は命にそういった。

「とりあえず、ありがとう。何が優秀なのかよくわからないけど」

言葉面は返礼だが、今命は明らかに緊急避難としてそういった。人間になって間もない命でさえ、下手に刺激することは死に直結すると察知できるほどの殺気だ。

「ですが時野様、その前の二文字は少々下品だとは思いませんか！？」

「そ、そういうあなたは少々大人げないと思いませんか？」

何故か言葉づかいが一部お嬢様チックになる。銃や魔術製品などで武装した数十名さえ一方的に叩きのめす時野和宏と同等の戦闘能力を持っているだろう高原早苗が、殺る気満々の表情をこちらにむけている。その事実がお嬢様言葉にさせた。

「大人げなどというものがあつたら、四十も離れた殿方に懸想などいたしません」

「むしろすごい大人げがあるから、財産狙いで老い先短い爺さんに近寄ったとかー」



まだ身体は前のめりに倒れこんだままだ。だから表情は見えない。だが確信できる。すでに鬼女はいない。今いるのは夫への愛だけに満ちた若妻だけだ。うつぶせに倒れている自分のそばに足音が近づいてきた。

「和宏。お前は何をしとる？ 一応職務中じゃろう？ そんなところで寝そべってたら、純粋無垢な少年少女が警察に対してもつ信頼を大幅に損なうことになるのは思わんのか？」

「誰のせいでこんなことになったと思ってるんだこのクソジジイ！！」  
と叫びかけて、すぐ口をふさぎ、内容を修正する。

「札束で大人の顔を張り倒すだなんて、むちゃくちゃなこと教えてるんじゃないか！ あんただって確かいろいろな教育協会の理事とかやってる身分だろうが！！」

倒れた身体を起こしながら、そう叫ぶ。

「そんなむちゃくちゃなことか？ お前が札束で頬を張り倒されたあと何メートルか吹っ飛んだりしない限り、『札束はある種の人間にとっては有効な武器』というワシの言葉は否定され、『人間は金に屈したりはしない』という事実だけがのこるはずなんじゃがな」

「ぐ……」

和宏をさも簡単にやりこめておいて、高原は早苗へ改めて問う。

「で、どうじゃ？ 鑑定の方は終わったのか？」

「はい、今しがた終了したところです。これといって目立った気配を持つものはない、というのがお二方の共通したご意見でした」

「そうか、それはなにより。今日もありがとうございます」

「どういたしまして」

「報酬はどっちもいつもどおりスイス銀行の秘密口座よろしくね」

命と美由が声を続けざまに答える。なかなか息があっている。

「では、そこまで贈ろうか」

高原は早苗や美由たちを促して特別実験場を出る。和宏もそれに従う。

特別実験場から出た東大上のキャンパスの敷地内は、ほぼ白一色になっていた。三時間ほど前特別実験場へ入るころは、まだうつつすらと積もり始めた程度だったのに。

特別実験場は窓がなかったので、三時間での変化がより克明に感じ取れた。

「四月だつてのに、結構つもりそうだな」

傘をさしながら、和宏。キャンパス内に設置された柱時計の示す時間は十七時五分すぎ。特別実験場に入る前から雪雲のため暗かったが、それに拍車がかかっていた。

「ひゃっ、不意打ちなんてずるい！！」

「ずるくなんてないよ。お姉ちゃんだって僕にぶつける気まんまんじゃないか」

「うるさい！！ 男なんだからかわい女のひ弱な一撃くらい黙っててくらないさい！！」

「言ってることがむちゃくちゃだよお」

そんなことを言い合いながら、美由と命はさっそく雪合戦をしている。

「会議中もたまに外をみたりしていたが、ずっとこの勢いじゃったよ。このまま振り続ければ、翌朝には結構つもっているかもしれないな」

「少し前は三ヶ月季節が進んだみたいなたったのに、極端な天気だな」

しみじみとしながら言う。ほんの二週間ほどまえ、和宏が八千円を稼ぐため第二東京競馬場にいたころは、「六月下旬ないし七月上旬の陽気」と言われるほどだったのに。

「……ひよつとしたら、これも魔力物質のせいなのか？」

「ありえないことではない、としかいえない」

高原も言葉を慎重に選んでいる。空間を超え、災厄を人間にし、死人を生き返らせ、部分的に多数の精神さえ操る魔力物質だ。天候くらい操れてもそれほど驚くには値しない。

一度でもその力に接したものであれば、誰もがそう考えることを止められない。

和宏は当然知らないが、数時間前松永心も、戸田弓子の前で同じことを言っている。

だからこそ、魔力物質の存在を公表できない。美由の右手足を復活させた魔力物質「脈望」は、彼女の母親が若い頃海外の露天商で土産に買った。

この事実を公表するのは、「地元土産を売る露店でお安く核ミサイルが買える」と発表するのと同じだ。今後テロリストたちの間では、露天商巡りが大ブームになるだろう。

軽く握った雪玉をぶつけあいつつ、美由たちも和宏に少し遅れてついてくる。

「では、また数がそろった頃に連絡する。そのときはよろしくな」

キャンパスの正門まで来たところで、高原が言った。

うなずいたあと、美由と命および和宏は正門を通りキャンパスを出たところで振り返る。

早苗と高原は正門を挟んだ場所で軽く手を振り、その場できびすを返す。

その背中を見送ってから和宏と美由は東大上野キャンパスを離れようとした。

だが、高原たちの背中を見送る姿勢のまま、動かないものが一人。

「？ どうしたの、命？」

美由がそれに気づいて声をかける。

「あ……あ……」

しかし命は答えない。ほうけたようなうめき声を繰り返すだけだ。

「命、ねえどうしたの？ まさか、さっきの鑑定でどこかー」

「うわあああああああああああああああああああああああああああつ……」

その場でひざを突き、両腕で自分を抱きしめながら絶叫した。ほんの一ヶ月ほど前、目の前で妹をなくしたときとは違う。悲哀ではない。恐怖の限りに絶叫する。

「どうしたの、しつかりして、何がー」

突然ひざを突いた命に駆け寄っていた美由の声も、いきなり途切れる。

「……命、あなた、これを？」

その「これ」が何であるか、和宏もすぐに理解した。  
空が、すべて覆われる。巨大な、途方もなく巨大な力を帯びた、目には見えない何かに。

「……！！！」

最後に命が身体をのけぞらせる、それとともに、命の内側から光がほとばしり出た。  
音はなく、もちろん出血などもなく、ただ光だけ。

光がおさまったとき、命はその場で倒れていた。

「おい、大丈夫か!？」

和宏は駆け寄り、声をかける。揺さぶりはしない。それすら危険かもしれない。

命は答えない。特にどこか外傷などはない。だが、光の前とあとで、命は一変していた。もはや生命力のすべてを吐き出して、死の直前だと、否応なくわかってしまう。

「こいつの、せいなのか？」

なぜいきなり命がこんなことになったのか。その答えはこれなのだろうか。

これまででもいくつかの魔力物質をその目で見た。何度かは自分で使ってもいる。

だが、これはそれらのすべてを超えている。あまりにも巨大で、巨大すぎて、ただ「在る」としか表現できない。どこにというならば、すでにここにある。とてつもなく巨大な力の塊が存在していること自体が、元災厄の命には耐え難い負担となったのだろう。

「どうした和宏、なにかあったのか？ こいつのせいなのか？」

高原が、顔をこわばらせて言う。普通の人間の高原にもすでに感じ取れているようだ。

高原だけではない。雪空の下キャンパス内を歩いていた学生や関係者たちも、全員が「何か」の出現を感じ取っている。その証拠にもはやいきなり絶叫した命のことなど見ていない。この巨大な何かの出現に、ただうろたえている。

「多分な、命は元災厄の分だけ、俺や美由以上にその辺は敏感なんだろう」

各種検査で命の身体は普通の人間となんらの変わりもないことが確認されている。しかし、それは現在人が持つ技術では相違点を確認できない、という意味以上ではない。

「そうか、早苗、命を大至急四号棟五階の特別検査室に運んでくれ!!」

「かしこまりました!! 飛ばせ給え!!」

すぐに返事をする、早苗は命の身体を担いですぐにこの場から消える。

「ワシだ、高原だ。例の少年が突然体調を崩した。すぐに早苗がそちらへ連れて行く。大至急第一種検査と特別集中治療の準備してくれ。うむ、頼むぞ」

手早く要件だけを告げると、高原は携帯電話をズボンのポケットにねじ込んだ。

「お嬢ちゃん、力をかしてくれんか？ 命が倒れたのは間違いないく魔力物質がらみじゃ。お嬢ちゃんなら、ただ側にいるだけでも何かわかるかもしれない」

「わかりました。行きます。どっちですか？」

「ありがとうよ、こっちじゃ」

そういうと、高原も美由もはや和宏には何も言わずに走っていく。

二人の背中を一瞬だけ見送った後、和宏も季節はずれな冬物ジャンパーの左袖をまくる。

そこには、つけなれた黒を基調とした腕輪があった。

魔力銃。総数五万二千といわれる警視庁にあっても、三十人いない特別な警察官だけが所持使用することを許される、四つの魔術の行使を可能にする特殊な魔術製品。

「力よ、空を欠ける翼となれ!!!」

詠唱を終えると、和宏はまずにその場で浮上する。そのあといくつかの建物を目印として方向を特定し、そちらへ急進を開始した。

医学にも物理学にも明るくない自分がこの場においても、何かの役に立つことはない。

今すべきことは、一刻も早く警視庁に帰還すること。



### 三 魔力時代の労働基本権

『発見場所 中野区の古美術品店「睦月古物店」。購入価格 二万七〇〇〇円』

弓子は、入力した後、区切りをつけるようにエンターキーを少し強く叩く。

エンターキーを押下した終了後、一瞬パソコンのハードディスクが作動して画面がごく短い間だけ固まる。そのあと、入力情報が正式にデータベースへ登録された。

「~~~~~」

そのあと伸び。これで今日探してきた美術品二八点の情報入力はすべて完了。

「お疲れ様でした」

こちらの作業が終わるのを見計らっていたのだろう。ちょうど欲しいと思っていたそのタイミングで、最近自分の部下になった松永心が紅茶を差し出してくれた。

「ありがとうございます。ちょうど欲しいと思つていました」

今は職務中なので、上司としての言葉遣い。そのあと戸田弓子が自宅から持ってきたティーカップに注がれた紅色の湯気を立ち上らせる液体にくちをつけて、ほう、と一息。

「今まであまりお茶の味など意識してませんでした。淹れる人によつて変わるものですね」

お世辞ではない。自分で淹れた紅茶よりも、こころが淹れた紅茶のほうが美味だ。おそらくお湯の温度とかティーバッグを入れるタイミングとかいろいろあるのだろう。

「そうですか、ありがとうございます」

「ばたばたばたばた」

こころ自身としても少なからず意識しているようだ。それを褒められて喜んでいる。

無意識魔術のしつぽの揺れ幅がいつもよりも少しだけ大きくなって、喜びを表現している。

時計を見やれば一六時四十五分。定時まで少し時間が残っている。

自分もどってきかたころには電話番号のこころしかいなかったが、今は自分と同様外を歩いて怪しい品物を探していた面々も戻ってきている。自分とこころを含めて合計五人。これに時野和宏を含めた合計六人が、現時点での第二分室所属のメンバーだ。

「xjsh、と」

最後に机の上に散らかっている美術品たちを袋につめ、「魔捜研行き」とかかれたラベルを貼り付ける。これを帰り際に総務部へもっていけば、弓子がすべきことはすべて終わりだ。

魔捜研へ送られた美術品たちはそこで調査された後、東京大学高原研究室へ送られさらに徹底的に検査される。その「徹底的な検査」の一つに、「魔力物質と一体化した少女や、魔力物質によつて災厄から人間になった少年による鑑定」がある。

その場には第二分室から一人立ち会わせる決まりになっている。これは弓子も含めた第二分室のメンバー全体で持ち回りとなつており、今日は和宏が当番だ。

「時野さん、勝つてるかなあ」

「魔捜研行き」というラベルに触発されたのか、こころがそんなことを呟く。

何について勝ってるのかは、聞くまでもない。弓子も以前東京大学上野キャンパスへいったとき、金額当て勝負を持ちかけられた。和宏の性格および財政状況なら受けるだろう。

「勝っていて欲しいものですね。負けた場合は純真な少年少女たちに、『……大人って、汚い』とか深刻な不信をあたえてしまうかもしれませんから」

「そんなことないですよ、…多分、きっと、そう、だと、いい、ですね。はH Aははは」  
妙にかさついた笑いを返すこころ。

そんなことを言っていると、分室内に定時をつげるチャイムが鳴り響いた。それに反応して、こころや和宏とともにこの第二分室へ移動してきた魔術捜査官たちがすぐに腰を上げる。

「お疲れ様です」

彼らは口々にそういうと、さつさと退室する。ひとたび事件が起きれば夜も昼もなくなる。帰れるときに帰って休養することは、権利以上に義務でもあるのだ。

十分もすると、第二分室にいるのはこころと弓子だけになってしまった。

「では、私たちもひきあげますか」

「そうですね」

ちよつとだけ残念そうなこころ。鑑定の立会いに出向いた時野和宏は、長引けば直帰、早めに終われば一旦こころにもどってくることになっていた。今この段階で姿を見せていないとなると、もう今日はそのまま帰宅したと考えるべきだろう。

「そういえば、お互い色々あって差し向かいでゆつくり話をする機会はなかったわね。今日、このあと時間があるようなら、食事でもしていかない？」

勤務時間が終わったので、口調を切り替える。

「あ、いいですね。行きましょう」

「色々聞かせてもらうわよ。あの後一年間で和宏とどれくらい進展したか、とかね」

「し、進展なんて、私はそんなこと何も……」

「あら、そうなの？ 教授とかから聞く話だと、和宏も悪くない感じに思えたんだけど」  
どちらかというところからかうつもりが強かった言葉に、こころの表情は暗くなった。

「私も、そんな気がするんです。最近だって私が絶対死ぬって確定したときも、助けるためがんばってくれましたし。けど、なんか大変な状況が終わっちゃうといつもと同じような態度にもどっちゃうんです。これって、『劇的な状況で出会った男女は、劇的な状況が終わるとともに恋愛感情も冷める』っていうやつなんでしょうか？」

「それもないとはいわないけど。メインじゃないわね。本当の理由は――」

「り、理由は？」

ぐぐつと身体をかがめ、こちらの言葉の続きを待つ。後頭部ではポニーテールが何度もせつちかな子供みたいにその場でジャンプしてはやくはやくとせかしている。

「その辺は食事でもしながらこのあとゆっくり聞かせてもらいましょか」

「あ、そうですね」

肩透かしを食らってちょっと不意そうだったが、すぐに了承する。ここは定時を過ぎてく私的な会話をするのにふさわしい場ではないと考えたからだろう。

そうして弓子もロッカーからコートを取り出して羽織る。ここ数日の数ヶ月さかのぼったかのような天気によってタンスの奥から引きずり出したものだ。

「じゃあ、電気消しますね」

夜の当番は第一分室と共有なので、夜間第二分室に誰もいなくなることも、なくはない。

堅いものが動く乾いた音が聞こえた。それと同時に、第二分室の明かりも消える。

そして、どちらともなく歩き出したそのときだった。

↑——!??

何かが、ここに来た。この瞬間に。

(これが魔力物質の存在感?)

弓子自身は突然仙人やらポセイドンやら希望やら運命やらが出現した現場にいわせたことはない。だが、そうした現場に居合わせた人間の証言に多く接している。

それらに共通することは、「無視しようとしてもできない巨大な存在感」。

「松永さん、これが魔力物質が力を発揮したときに感じられる存在感なの?」

「雰囲気はおなじです。でも、こんな、こんな、今までに比べて大きすぎます!」

信じられない。信じたくない、といったげにこころは何度も頭を振る。頭を振っただけではありえないくらいにポニーテールも激しくばさばさと揺れている。それくらいありえないということか。

「とにかく一旦外に出しましょう。ここからなら屋上のほうが速そうね」

そういうと、弓子はこころをうながして階段で屋上へと向かう。

屋上にたどりついて、弓子は自分が感じたものがただの錯覚ではないと確信した。

そこにはいた。異変を察知して駆けつけてきた警察官たちに囲まれて一人の女性が。

服装はブラウスとベストにフレアースカート。この季節はずれの寒ささえなければ、どこにでもいそうなごくありふれた格好だ。

しかし、それを身に着けるモノは絶対にどこにもありふれていなかった。

身長は自分と同じで百六十五以上、百七十以下。つやのある黒髪は相当に長い。地面につきはしないものの、ひざ辺りまであるそれを、首の付け根あたりと先端で束ねている。

それも普通の人間ならばかなり目立つ特徴になっただろう。だが、そんなものはごく些細なことではない。この巨大な存在感に比べれば。

一度見たら絶対に忘れられない。見間違えなどしようがない。なぜそう思うのか、そうなるのかなどわからない。それでも確信してしまうものを、この女性(?)は持っている。

「松永さん。今まであなたが接してきた魔力物質とくらべてどう？」

「……どうなんてとてもいえません。これは桁外れです。大きすぎます」

青ざめた顔のまま、それだけを答えた。

時間とともに多くの異変を察知した警察官があつまりはじめ。屋上に民間人らしき女性が、別に銃器などで武装しているわけでもなくたたずんでいる。それだけ。しかし包囲を解くことができない。かといってあなたは何者かと声をかけることもできない。

魔力物質と対峙したことはないとしても、凶悪犯罪者と対決するときえ珍しい警察官たちが、野次馬のように包囲すること以外に何もできない。

「姉さん、どうしたんだ？ 一体何が起こってるんだ？」

血の繋がらない弟、和宏の声。身体に雪が付着しているあたりからして、たった今東大上野キャンパスから飛行でこの場に駆けつけてきたのだろう。

「わからないわ。ほんの五分くらい前、何かが現れた。そのあととりあえず屋上にきたら、あの女性がいた。私にわかっていることはそれだけよ」

「……あれか、とんでもない化け物だな」

和宏も一目見てそれだけ言った。顔からは血の気がうせている。これまで魔力物質がらみの事件を数度見知ってきているからこそ、その恐ろしさが詳細にわかってしまうのだろう。

それから十分ほどして、さらに人の数は増えていた。

しかし、誰一人として近寄ろうとするものはおろか声をかけるものさえいない。

やおら、その女性がこちらを見た。

「……！」

誰もがその視線の圧力にあとずさる。

向こうとしてはこちらを見ただけだろう。威圧の意思などなにもない。だが人間が何気なく足を踏み出す先に蟻がいれば、人間には殺意皆無だろうと蟻は死ぬしかない。それと同じ。

そして、彼女はゆっくりと宣言した。

「私はアマテラス。皆さんの言葉をお借りすれば、太陽の化身です。現在皆様にとってただならぬ状況が発生しています。ぜひお力をお借りしたいのですが、よろしいでしょうか？」

彼女の言葉は、雪が舞い散る空に静かに消えていった。

それと同時に弓子たちの間に広がる空気。それは、安心と納得によるもの。

「そっかあ、太陽の化身さんなんだあ」

ところが隣でうんうんと安心したようにうなずいている。気持ちわかる。とことん現実離れた言葉のほうに、彼女にはふさわしい。弓子もそう思った。

「——くしゅんっ……！」

ひとしきりうなずいた後、ところがくしゅんをする。安心したことでも心身が他のこと気にする余裕を取り戻し、この季節はずれの寒さを思い出したのだろう。

それは瞬く間に周囲の数名に伝播した。あるものは「こころと同じようにくしゃみをし、またあるものは両腕で自分の身体を抱きしめたりする。

「ああ、もうしわけありません。少々お待ちください」

丁寧な言葉遣いとともに、アマテラスは空を見上げる。

その数秒後、雪が降り止んだ。

つづいて、夜空から雲が消える。足元を含め周囲を覆っていた雪たちさえ、そもそもはじめから存在しなかったといったげに解けて消えた。

偶然などではない。この女性が今空を見上げたことで、雪はやみ、溶けて消えた。

雪の消失を確認した後、アマテラスは軽くうつむいた。それだけで、すべてが消える。

あの莫大きわるまる存在感が、その欠片すら残さず完璧に消えうせてなくなってしまう。

「責任者の方はいらっしゃいますか？ いないなら呼んでいただきたいのですが」

丁寧な口調で彼女は誰へともなく問いかける。

しかし誰も答えない。ただ彼女の声を聞き、向かい合うだけで精一杯なのだろう。

あの存在感のすべてが忽然と消えたからすべてトリック、などと考えるものはいない。

むしろあそこまで意のままに操れるからには、さっきまで感じていたものなど、彼女の力のほんのごく一部にすぎない。その確信を深めただけ。

「さて、どうしたものでしょう。あまり時間はないのですが」

別に怒った様子もなく、アマテラスはちよつと困ったような表情になる。

何かを決断したかのように、アマテラスは小さくうなずいた。

「ま、まっってください。ともかくまずは今何がどのような状況になっているのか話をお伺いします。それで必要であれば上に話を通しましょう!!」

あわてて叫ぶ。危険だ。何を決断したかなどわかるはずもないが、実行させてはならない。

このアマテラスにとっては、呼吸や瞬きなどといったほとんど無意識に行う動作でさえ、人間にとつては一國を消し飛ばす破壊力を持つだろうから。

それが、小学校の理科で習う、地球と太陽の差。

「そうですか、では、どこでお話しましょうか？ ここがよろしいですか？」

「下の会議室で。」

「わかりました。お願いします」

ごく自然に、うやうやしくアマテラスは頭を下げる。

松永心はアマテラスに来客用湯飲みを置いた。

「粗粗粗粗粗粗粗粗粗粗粗粗粗粗粗粗粗粗粗粗……そ、そっ……………ぶはっ!」



「お待ちせしました。早速お話を伺います」

「え？ あ、あの、ちよっと、戸田さん、と、あ、その、そうじゃなくて戸田副室長、関係者を呼びにいったのではなかったんですか？」

「そのつもりでした。ですが、よく考えれば話を聞くだけなら数人で十分です。それどころか、多くの警察幹部が一気に行動不能となったら、都内の治安維持にも少なからぬ影響が出ます。要するにあなたに殺される警察官の数は極力少なくしようということですよ」

臆面もなく弓子ははっきりと言いつつ切った。

「え、ちよ……」

あまりにもストレートなもの言いに、こころが絶句する。

「結構ですよ。そちらの意見はもつともです」

しかし、警戒されている当のアマテラスは、平然としたもの。怒った様子もない。

丁寧なアマテラスの言葉に、弓子も同じく丁寧に頭を下げる。そして咳払いし、

「早速話に移らせて頂きたいのですが、よろしいでしょうか？」

「お伺いしましょう」

今の言葉で、弓子は自分が話の聞き手になることを宣言した。こころとしても問題はない。

この場にいる三人の中では、弓子は階級年齢ともに最も高い。

「繰り返しになりますが、自己紹介をさせていただきます。私の名前はアマテラス。太陽の化身というのが、皆様には一番わかりやすいかと思えます」

はじめて名乗ったときと同じく、あまりにも簡単に、あっさりと言った。

ためらいも照れもない。人が我が名を口にすると同じくらい当然と。

「いきなりそんなことを言ったところで信じていただけないでしょう。そこで、あのような方法を使わせていただきました。まだ納得できないということであれば、さらに幾つか証拠をお見することもできますが、いかがいたしますか？」

「ややややややややややめてくださいいいいいいっ！！」

「結構です！！ 大丈夫です！！」

「頼むから何もするな！！ じっとしてろ！！」

自分とほぼ同時に、和宏と弓子も叫んだ。あの途方もない、これまで接してきた魔力物質さへ子供だましと思える力をもう一度使うなど、あらゆる意味で危険すぎる。

「では、話を進めさせていただきます。屋上でも少しお話ししましたが、現在皆さんはかなり危機的な状況にいます。これを打破するために、少々協力していただきたいのです」

「どういう経緯で危機的な状況になったのですか？」

「まずはそこからお話いたします。私には弟が二名います。彼らは私が働きすぎることを見るに見かねて、力づくでも休養させようとしているのです」

人の技術で望みうる限りの防諜対策を施された部屋を、冷たい沈黙が支配した。

「……あの、それがどうして危機的状況になるんですか？」

ややして、やっところろは声を絞り出した。まだ和宏と弓子は呆然としている。目と口がそれぞれ〇になっている。ポーズをとればはにわそのものだ。結構可愛いかもしれない。

ともあれ惚けている二人は、どちらも人間の枠を超えた魔術能力の持ち主だ。アマテラスの放つ力のすさまじさもこころよりずっと鮮明に感じているだろう。それだけに肩透かし感も強かったにちがいない。

「約五百万年前、この星は核の熱および質量のバランスが崩れ、爆発消滅することが確定しました。それを私はずっと防いできたのです。その負担と疲労を見かね、弟たちは力づくで私を休ませようとしています。一日八時間労働を原則とし、一週間に二日は強制的に休ませようとしているのです。私や弟たちが行動を開始した影響は、わずかですがすでに出ています」

「それって、まさか……」

「はい、ここしばらくの季節はずれな暑さや寒さはその影響の一つです」

「しかし、いまだかつてそのような兆候が観測されたことはありません。あなたが地球の消滅を防いでいるという証拠はあるのですか？ 地球がそうなった理由は？」

やっつと、搾り出すように弓子が聞いた。

「理由は私にも分かりません。観測できないのは当然でしょう。観測できないように処置してきましたから。証明が必要な事実をもってお答えしましょう。ただし最低でも世界の半分がマグニチュード9以上の地震に襲われることは覚悟してください」

弓子は沈黙する。表情に警戒の色が深くなる。危険をでっちあげ、「少しでも今の状況を崩したら危険」だといひ、「そのためには」と金品をせびる。詐欺の常套手段だ。

アマテラスは何かを要求してはいない。だが「証明するのはいいが被害は覚悟しろ」とかいかえすあたりが、疑い出せばすごく怪しい。

しかし、それは、あくまでも相手が人間ならの話。アマテラスはそんな考えは持っていない。嘘などついていない。すべて事実だ。理由はない。でも確信する。あれだけのとてつもない力が、そんなみみっちい詐欺行為とどうしても結びつかない。

「で、それを防ぐために、俺たちはなにをすればいいんだ？ 何ができるんだ？ 俺たちに協力を求めるくらいだから、あんたは弟たちの実力行使に自分だけじゃさからえないんだろう？ 現在人類最高の攻撃力でさえ、核ミサイルの千倍にとどかない。あんたたちが本当に太陽の化身なら、こんなもん蚊にさされた程度にも感じないだろ？」

今度はたまりかねたように、和宏。

「でしょうね。あなた方が実用化した核融合技術は、私たちが行っている核融合に比べればまだまだ不完全です。極大魔力弾でさえ、私たちにしてみれば攻撃されたことさえ気がつかない程度のものでしかありません」

「え、極大魔力弾のこと、知ってるんですか？」



あまりにもあつさりと、アマテラスは国家機密中の国家機密たる名前を口にした。

「ええ、知っています。ついさつきも使おうとしたでしょう。この星での出来事は、たいてい理解しているつもりです」

『ついでに』

「ああ、去年の八月頃、三宅島沖での話です。以後はそちらの感覚にあわせましょう」

「八ヶ月前がついさつき、なんですか」

何気ない言葉からも、相手は億という年月を輝き続けた恒星の化身だと思い知らされる。

「で、その偉大なる太陽様に、俺たち人間ごときが何を協力できるってんだ？」

和宏の言葉は何かとげが多い。なぜだろう。もともと優雅とか丁寧な言葉遣いをするほうではない。だが、初対面の相手にはそれなりに礼儀を守るはずなのに。

「申し訳ありません。神崎さんには本当に悪いことをしたと思っています。しかしこのまま座して待てば皆さん全体が破滅するしかないので。被害を最小限にいとめるためには私の言葉を一刻も早く信じていただく必要があります。そのためにはあれが一番確実な方法だと思います。後日改めて償いはさせていただきます。ですから、今はご容赦ください」

「……」

苦々しげな顔のまま、和宏はアマテラスから視線をそらし、頭をかきむしった。

今の言葉で、和宏が不機嫌な理由が想像できた。アマテラスの出現は、災厄から人間となった命に、深刻な影響をもたらしたのだろう。

しばらく和宏のほうをみていてから、またアマテラスはつづける。

「弟たちは私のことを気遣って、まだ強硬手段にでていません。私がこうして姿を消した今も、必死に探しているでしょう。仮に私を発見しても、いきなり強硬手段にはせず、言葉で説得しようとするはず。その隙を突いてどちらか一方でも倒すことができはなんとかなり。その際できるだけ被害は抑えるつもりですが、完全にやりとおせる自信はありません。そのときパニックを引き起こさないようにしていただきたいのです」

「倒すって、そんなこととして本当にいいんですか？」

「殺すわけではありません。一時的に無力化するだけです」

「でも……」

アマテラスの言葉を信じれば、倒さないと地球が減ぶ。だがすぐには納得できない。アマテラスがやるうとしてるのは、姉を気遣う弟たちの思いにつけこんで踏みに行ることだ。

「私としてもこんなことはしたくありません。弟たちが私を大事に思ってくれるのはうれしいことです。ですが特にソルは、私のことばかり考えていて周りが見えなくなってしまいます。そうした点は矯正するのが年長者の果たすべき務めでしょう」

そこまで言って、アマテラスは一度こちらたちを見回した。

「ご協力いただけますでしょうか？ できるだけ速めに〇〇回答いただければと思います。ご協

力していただけるのであれば、当然謝礼はさせていただくつもりです」

「謝礼って、あんたが一回くらい戦争に手を貸してくだりするのか？」

「お望みならばそれでも構いません。どうしても消したい国があるなら、三秒以内にあとかたもなく消滅させて御覧に入れましょう。国自体を物理的に消滅させることから、その地にすむ人々のみを一人残さず消し去ることまで、細部はご要望に従います」

「……………」

当たり前のように、にこやかなまま即答されて和宏は絶句する。

(アマテラスさんには、「ユーモアのセンスがない」とは別の次元で、冗談が通じない)なあ心はそう思う。人を相手に言えばできるはずもないから冗談で終わる言葉さえ、アマテラスはいとも簡単に実行に移せてしまうから、冗談として成立しない。

アマテラスはこころたちを軽く見回して、言う。

「今の話の中で不明に感じたことはありませんか？」

問われても、和宏は無言。相変わらず不機嫌そうな顔を崩さない。

こころとしても、質問どころか今までの話をまとめるだけで精一杯だ。後頭部で、尻尾があまりしない動きをしている。それが伝わってくる。ちよつと見てみたい。

アマテラスの視線は、和宏、こころと流れていき、最後に弓子へむかう。

「では、二つほどよろしいでしょうか？」

視線が交差したタイミングで、弓子。

「なんなりと」

「二つ目です。あなたの言葉を信じると、あなたは自分の身体をすり減らし、弟たちを踏みこじってまで地球を守りつづけている。そこまでしてあなたは何を手に入れるのですか？ 地球やその上に住む私たちを守らないこととどうむる不利益があるのですか？」

「もつともな疑問ですね。はっきりさせておきましょう。私が皆さんを守る理由に、

『人間の活力が私の重要なエネルギー』だとか、

『地球人こそは宇宙の行く末を占う鍵』だとか、

『宇宙を破滅に追いやる悪の力との戦いには人間の希望が絶対不可欠』だとか、

『人間の数を増やせば給料が増える』だとか、

『逆に数が減るとより高位の存在からペナルティを受ける』だとか、

『崇拜されればされるほど力が強くなる』だとか、

『地球は私が暇つぶしに作った箱庭にすぎない』だとか、

『他の恒星と何かを競い合っている』だとか、

『地球そのものに失うことのできない重要な物質がある』だとか、

そういうことは一切毛頭かけらもこれっぽっちもありません」

「……………ないんですか、そういうの。本当に、これっぽっちも？」

神話とかではありがちな、ありそうな理由は、ことごとく潰されてしまった。

「はい、ほんとうに、これっぽっちもありません」

「みじんこほども？」

「ええ、みじんこほどもありません」

「み、みじんこですよ！？ 本当にないんですか？ みじみじなんですよ！？」

「非常に残念ですが、非みじみじにして反みじみじです」

アマテラスまで、なぜか、訃報に接したみたいにも悲しげ。

最後の希望を込めて、こころは聞く。

「……みじ？」

「No, I do not みじ」

ががーん という音を、こころは頭の中で、今確かに聞いた。

「おーのー、そんな、みじみじが、みじみじがあ……」

そんなことありえるだろうか。みじんこなのに、みじんこなのに。

「……ショックを受けるのはまあいいとして、何でそこまでみじんこにこだわる？ 『みじ』

とか『みじみじ』ってのはなんだ？ というか『みじ』って動詞なのか？」

「小学校の理科のはじめて顕微鏡で見た生き物です。すごく小さいんですよ？ それなのに生きてるんですよ？ そのへんがなんかこー、みじみじっ、って感じ、しません？」

後頭部でしっぽが細かく揺れている。こころには見えないが、きつとどうにかして「みじみじ」を表現しているのだろう。ちよつと自分でも気になる。

「あー、まー、去年までランドセル背負ってたんだもんな。感動もリアルに覚えてるか」

「むっ」

むくれながらちよつとにらむが、和宏は無視してアマテラスの方に視線を戻してしまった。

そのそぶりからも何となく見て取れる。やはり今和宏は機嫌が悪い。

話が脇へそれたことに怒るでもなく、自称太陽の化身はつづける。

「話を戻します。皆さんが誰一人残らず幸福を極めようと、逆に地球そのものが消滅しようと、私の存在に影響は何もありません。私にしてみれば、地球上に皆様人類がいた時間より、いなかった時間のほうがずっとながいのですから当たり前です。私が皆さんを救おうと思ったのは、私が救いたいと思うから、皆さんのことを大切に思っているから、それだけです」

地球全体の歴史としてみれば、人間がいた時間よりいかなかった時間の方がずっと長い。

中学校の理科の教科書にも書かれている。しかし、人間にとって絶対欠かせない光熱の源である太陽の口からはっきり断言されるのは、何かもの寂しい。

天照の説明を聞いていた弓子の表情が、一層険しくなる。

「それだけで、ずっと地球が減ばないようにしてきてくれたのですか？」

「はい、他にも不定期に干渉はしています。皆さんの手に負えないと思った危機のみ、対処さ

せていただきました。地球を完全に破壊する巨大隕石の接近とかです。恐竜が絶滅する原因となった隕石の衝突は悩みましたが、地球が消滅する危険はなかったので放置しました」

弓子の表情が、さらに厳しくなる。

「それらすべて、アマテラスさんに見れば、救わなくても一切問題なかったのですね？」

「はい、くりかえしになります。地球が消えようと皆様人類が絶滅しようとして、私は何も困りません。皆様のような知能をもつ生命が誕生してからは、私の存在を公表すべきかと考えたこともあります。しかし結局は思いとどまりました。私と皆様では存在が違いすぎます。皆様にとつて私は生存のために必要不可欠でしょうが、私にとつて皆様の存在は一切必要ありません。そんな私が存在しているということなど、知らないほうがいいと思いましたが」

アマテラスは、どこまでも淡々と語る。

「……神様って、いたんだなあ」

「こころは、気がついたら、そう呟いていた。」

「いえ、私はあえていうなら太陽の化身であつて、神ではありませんよ」

「だから神様なんですよ。どの神話だつて太陽を無視できるはずないんですから」

日本神話にカンガルーやコアラは出てこない。当時の日本人々は知らないから出しようがない。対して太陽は知るなど言っても知ってしまう。無視できない。

「こころはそれほど神話に詳しいわけではない。しかし太陽に神が全く関与していない神話なんて絶対ないと断言できる。科学が未発達時代に、身の回りの出来事を説明するのが神話の役目だ。太陽を無視する神話は、神話としての存在価値を自分で否定している。」

「だいたいアマテラスって名前からして日本の神様じゃないですか」

「それは逆です。失礼ですが、歴史という点で皆様が私に勝ることはありません。私たちの会話は通常皆様には聞き取ることができません。ですがまれに一部聞き取ることができた方がいました。彼らはそれぞれ私たちの言葉を異なった形で聞き取り、それを発展させてさまざまな言葉を作り上げたのです。私の名前がこの国における太陽神の名前として使用されるようになった、というのが正しい経緯です」

アマテラスは、ただただ淡々と語る。嘘をついているようには、こころには見えない。

「……いよいよ神様だなあ。ほんと、馬券をはずすつど『この世に神なんていねえ！』って叫んでる誰かさんに教えてあげたいですね。こんな風にまったく見返りも求めず自分の身を削つても地球のために働き続けてくれている神様がいるんだよ、って」

最初ただ感心していた声が、後半は自分でも驚くほど冷たい。

「そうですね。珍しく馬券が当たったときだけ『神様ありがとう』とか涙を流して言う、言うだけでお賽銭はびた一文払わない誰かにも教えてあげたいですね」

「必ずよねえ」

弓子と二人して、和宏へ白く細い視線を注ぐ。今まで不機嫌そうだった和宏はいきなり矛先

を向けられてちよつととまどつたあと、わざとらしく頭をかいてあらぬほうへと目を向けた。意図したとおりの反応を取らせることができ、ちよつとところはうれしい。後頭部の動きが普段よりちよつとリズムカルになっているのがわかる。はねてるはねてる。

だが、いつまでも笑ってばかりはいられない。今は、会議中だから、以外の理由で。和宏を笑った理由は、少なからず心自身にも跳ね返る言葉だったから。笑えない。

こころも警察官として、一般人よりずっと多く凶悪な犯罪に接してきた。人間だったかどうかさえわからないほど徹底的に傷つけて殺された死体を見たことも一度や二度ではない。

その理由も、「なんとなくムシヤクシヤしていたから」なんて話も往々にしてある。

そんな話に接したりするつど、どこかで「本当に神様がいるんなら、こんなひどい事件を見過ぐすはずがない。だから神様なんていない。祈っても頼っても何も変わらない。自分たちで何とかしなきゃだめなんだ」と思ったりしていた。

だが、そんな考えすら、ひどくいびつで自分勝手なものでしかなかった。

今この世界を維持するために誰がどれだけ苦労しているか、どれだけの犠牲が払われているかなど考えもしない。自分さえ辛ければ、誰も何もしていないと決めつける。

実のところ「こんなに酷い現実を放置しているんだから、神などいるはずはない」は、「自分さえよければ周りがどうなろうと知ったことか」と同レベルの放言だったと証明された。

そんな人間のわがままなど遙かに超越した次元に神はいる。

全能ではない。だが、自分の身を削つてでも、今もこの世界を守り続けている。なのに見返りを一切もとめない。「すごい大変なんだ。感謝しろ」とさえいわない。あげくこころのように「本当に神様がいるなら」なんて身の程知らずきわまる考えさえ許してくれる。

アマテラスの無償の慈愛を偽善だと罵りたければやればいい。その結果アマテラスが考えを修正し自分のことしか考えなくなり、人類が地球ごと完全に破滅することも覚悟して。

あまりに深く広い、人には持ち得ない慈愛。人が自身を投影したため、嫉妬深かったり一々試験を課さずにはいられないまがいものとは、根本から違う。

神は人ではない。だから人と違い無限に優しくなれる。

あたりまえの、当たり前前すぎる現実。

(「絶対者」って、こころいうものなんだあ)

そう思った。絶対者とは、文字通り「対が絶たれた者」なのだ。

人にとって太陽は絶対欠かせない光熱の源。しかし太陽にとって人はいてもいなくても同じ。代わりが他に要るからではない。人そのものを一切必要としない。

一方的に与えられるだけで、こちらが相手のためにしてやれることは何も無い。

支配とか奴隷扱いする必要もない。捕食の対象ですらない。こちらから見たつながりは全くない。絶たれている。だから全知全能でなくとも、アマテラスは人にとって絶対者だ。

「質問は二つとお伺いしましたが、もう一つはなんでしょう？」

そんなところの視線に気づいている様子もなく、アマテラスは弓子に聞く。

由美子は、再度表情を引き締めて、答える。

「今この時期弟の二人が行動をおこしたのは、ただあなたの疲労を見かねたからでしょうか？  
四月十九日ごろ、何か行動を起こすきっかけのようなものはありませんでしたか？」

「こころは少し心身を引き締める。二ヶ月ほど前、時野和宏がまだ災厄だった命に対して行った質問でもある。

アマテラスは少し考え込んでから、

「……いいえ、そういうことは特になかったと思います。私の疲労を見るに見かねたのがたまにたまだったというだけです。ただし私が皆さんの協力を得ようと決断した背景には、去年の四月十九日以降の、魔力物質がらみの事件があるのは確かです。今なら『私は太陽の化身です』と言っても信じてもらえるだろう、と考えました」

「そうですね、わかりました」

「他には？ 何か今の話で気になったところがありますか？」

「では、もう一つよろしいですか？」

「どうぞ、なんなりと」

「アマテラスさんは強硬手段に出た弟たちに、どのような感情を持っていますか？」

「むもにゅ？」

「なんだその声は？」

和宏には突っ込まれたが、こころ的にはそんな声が出さずにはいられない。

この質問が、事態の解決に結びつくとも思えない。

「嫌悪感などは一切ありません。困ったな、とは思っています。そういう手のかかるところもひっくるめて可愛い弟たちです。特にソルが最近一度私のことを『お姉ちゃん』から『姉さん』呼び変えたあと、自分だけで勝手に気まづくなってまた元に戻したときなど、可愛さ大爆発でしたね。『二度で二度おいしい』とはまさにこのことでしょう」

「ああ、わかりますよ。私も和ちゃんが『僕』から『俺』に変えたときのことを思い出すと言いきれない感動と興奮につつまれます。当時はどうということもなかったのですが」

「なかなか良い趣味をお持ちですね」

「いえいえ、そちらこそ」

やおら弓子が立ち上がって、アマテラスの前まで歩いていく。  
がっし

握手。すんごく力強く。

「……なんかみよーに恐い雰囲気をするのは私だけでしょーか」

「お前だけであってほしーが、どーもそういうわけにもいかなそーだな」

和宏も否定してくれない。こころは確かに聞いた。聞いてしまった。二人が測ったかのよう

にそろえて笑みを浮かべた瞬間、にやりという音がしたのを。

写真で見るとかぎり、幼稚園や小学校低学年のせんせーでもやれば、男子生徒や園児の九割以上の初恋の相手になること確実な人間と非人間が、にこやかにほほえみをうかべたまま手を取り合っている現場以外にはあり得ない。しかし、この場に居合わせて「にやり」を聞いたころたちにとっては、もはやこの場は魔界そのものだ。

ただ、当の魔界作成者の一方である弓子は平然としたまま、言う。

「では、私たちはさっそく緊急時の避難などについて準備にかかろうと思います。その間、アマテラスさん、あなたは何をされるつもりですか？」

「弟たちの気配を追跡してみようと思います。あの子たちは私ほど気配を絶つ術にたけていません。ある程度ぐらいまでなら居場所を絞り込むこともできるー」

と、そこでアマテラスが何か言葉をとめる。

「そういえばさつきから少し気になっていたのですが、現在皆様は魔力物質を積極的に回収されているのですか？ 弱い気配を複数、近くに感じます」

問われた弓子は、一瞬、返事に悩んだ。だが、本当に一瞬。

「ええ、それほど大々的にはありませんが、現在回収を行っています」

弓子の返事に、アマテラスは頷く。

「そうですか。よければ見せていただけませんか？ 使えるものがあるかもしれません。使い切りの癒しの石のような形に加工できる可能性があります」

癒しの石、現在日本国が保有する、神話級の力を持った魔力物質の一つ。

「……私の一存では決定できません。確認してのちほど回答させていただきます」

「お手数ですが、よろしく願います」

これまでと同じように丁寧な言葉で謝礼をしつつ、アマテラスは頭を下げた。

彼女の言葉を信じれば、そもそも救う必要もない人類に対して、深々と。

ゆっくりと、目の前の扉が開く。

見逃さなかった、見逃せなかった。播磨美由は突き動かされたように立ち上がり、ドアの前に移動して、数秒後現れるだろう医師の姿を待ちかまえる。

ややして予想通り姿を見た医師は、疲れたような表情で防止を脱ぎ、マスクをはずす。

その間に、身構える。最悪の事態に備えて。

「まだ気は抜けませんが、峠は越えたでしょう」

医師は宣言で、美由の目の前が、一気に明るくなる。きっと自分が表向きは瀕死の重傷から回復したとき、その知らせに触れた母の気持ちも同じようなものだったのだろう。

「ですが、死はとりあえず避けられただけです。全身の神経が著しく傷ついています。完全に回復する見込みはかなり低い。覚悟してください」

それでも、いつこうに構わなかった。ごく当然のように、美由は聞き流した。

現代医学は絶対ではないことを知っている。自分がその証拠。

「それから、手術中麻酔がかかっているにもかかわらず、何度も繰り返しつつぶやいていたことがありました。詳しいことはこれから記録カメラを再生して唇の動きを解析しますが、確実に聞き取れた言葉があります。『嘘』と繰り返し言っていました」

その言葉で、喜びが幾らかかげりを帯びる。

かつての母の喜びと今の自分の喜びは何から何まで同じではない。

母は日本人らしく特定の宗教を信仰したりはしていない。だが、きつと母は、娘が峠を越えたと聞いたとき、人ならざる、人以上の何者かに対して感謝の念をもっただろう。

だが、美由はそれを持つことができなかった。腕時計の示す時間は午前二時十五分。十七時過ぎに東大上野キャンパスの正門前で突然命が倒れてからずっとここにいた。

その間に高原の妻早苗から聞いた。命が倒れた時間、警視庁屋上に太陽の化身を自称する女性が出現した、と。そして彼女は「神崎さんには悪いことをした」と言ったらしい。

だから感謝などできるはずもない。たとえどんな差し迫った理由があろうと、命をこんな目に遭わせたのは、他ならぬ太陽の化身、神そのものなのだから。



“……本気か？”

“もちろん本気さ。お姉ちゃんがそういったんだから”

“我々が何度いっても聞こうとしなかった姉上が、そうそう簡単に自分の考えを捨てると思っているのか？ 我々が実力行使に出た直後の変心。怪しいとは思わないのか？”

“う、そ、それは……”

兄の言葉は正しい。こちらが姉に休息を取らせるため、結託して実力行使に出た直後、時おかずして「あなたたちの気持ちにはわかりました。私は地球を見捨てます。その前に、あなたたちともう一度差し向かいで話をしたいのです。もしあなたたちが連れ立ってきた場合は、私は最後まで抵抗するでしょう」といつてきたのだ。

今自分と兄が手を組んでいることで、姉は劣勢に立たされている。しかし、どういう方法かで兄と自分を分断することができれば、姉にも勝機は十分にある。

そういう状況での申し出。あからさまに怪しい。怪しすぎる。信じるほうがおかしい。罠を疑うのが正常だ。信じようとしている自分に対して兄が「本気か？」と聞くのももつともだと思ふ。あるいは「正気か？」と聞きたかったのかもしれない。

“それでも、信じたいんだ。疑いたくないんだ！”

愚かしいことはわかっている。ほぼ確実にこれは罠。

だが、それでも、罠だと疑って、もし本当に姉が変心していたらどうするのか？

今まで姉は一度もうそなどついたことはない。どんなときでも優しかった。

それをこの期に及んで疑ったら、今まで慕ってきた時間すべても否定してしまう。

“疑って目的を達成するくらいなら、僕は信じて潰れるよ”

“そうか、好きにしろ。まあ姉上もお前と同様徹底はするまい。ぎりぎりのところで必ず攻撃の手が緩む。そこをつけば、逃げ帰ってくることくらいはできるだろう”

“そうだよ、お姉ちゃんはきつとそうなるよ”

兄の言葉で、いくらか救われたような気がした。

とてとてとてとてとて

じー

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

じー

とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

じー

「……なあ、一つ、聞いていいか？」

とて

足が止まり、そのあと声をかけた相手はすぐに振り返った。

「はい、何でしょう。お答えできることであればいいのですが」

「あんたはまじめに弟たちの気配を追いかけてるんだよな？」

「はい、これ以上なくまじめにやっております」

『まもなく、駅前東口にて、俳優小宮清治さんのトークライブを開催致します。お時間のある片は是非ともご参加ください』

宣伝カーがそばを通り過ぎていった。

「大いに惹かれますが、断念しましょう」

すごく残念そうに、自分に言い聞かせるように、言った。そして、また歩き出す。

とてとてとてとて

ぐわし

「おい、今なんて言った？」

そちらへ向かおうとするアマテラスの肩をつかむ。

『大いに惹かれますが、断念しましょう』と

結構乱暴につかんだにもかかわらず、アマテラスはにこやかな表情を崩さない。

「……ほんとーに、まじめに弟たちをさがしてるんだらうな？」

「これ以上なく真面目にさがしております。ただし、コツがつかめてきたこともあるので、少々見物する余裕が生まれてきたことも事実です」

「……小脇に『三日で遊び尽くす！ 東京特選ガイドマップ 平正四十一年版』をしつかり抱えてても少々、なのか？ ほんとか？ そこだけ太陽の化身語になってないか？」

「なっています。これは調査を円滑に行うための小道具です。あちこちをぶらぶら歩いたかと思ったら不意に立ち止まるなど、かなり不審な振る舞いでしょう。その不審さを少しでも和らげようと思ったら、おのぼりさんに扮するのが一番簡単かと思えました」

「……すんごい読み込んだみたいにガイドがくたびれてて、しかも『要チェック！』『超チェック！』『絶対チェック！』って書かれた付箋だらけになってるように見えるんだけど、ほんとーに扮してるのか？ 東京観光楽しんでるだけじゃないか？」

「おのぼりさんが真新しいガイドブックなど持っている方が逆に不自然でしょう。あこがれの大都会東京を思っただけでも読み返しているはずですよ」

「……」

いちいち反論がもつともらしい根拠を伴っているのが気に入らない。

ここ数日、和宏はアマテラスの都内案内兼監視を行っていた。

弟たちに協力されると勝てない(らしい)アマテラスとしては、なんとか相手の所在を探り出し、個別に叩くしかない。だが「そうなんですか、じゃあお任せしますから、後は頑張ってください」などは、都内の治安を預かる警視庁としては絶対に言えない。

そもそもアマテラスの言葉が全面的に信用できるかさ怪しい。和宏より美由より先にアマテラスの存在を感じできてしまったがために意識不明の重体となった命は、うわごとのように繰り返している。『隠す』『だけ』『嘘』『何か』。そんな感じの言葉を。

「隠す」とか「嘘」とか、いかにも怪しい。ゆえにアマテラスの監視は必須。その役目が和宏に回ってきたので、ここ三日ほど一緒に行動している。

「というわけで、次は和菓子屋『水月庵』です。ここのだら焼きは絶品だそうですよ」

そう言うと、アマテラスは和宏に背を向けて歩み進んでいく。

とて

おとといと昨日は、東京と渋谷でまじめに探索をやっているように見えた。実際何をしているのかなどはわからないのだが、すくなくとも新宿にいる今日みたいに『三日で遊び尽くす！東京特選ガイドマップ 平正四十一年版』を持っていたりしなかった。

すでに警察を通して日本という国家組織自体に自分の存在と目的を話し、一応受け入れさせた今となっては、あの強烈な存在感を放つ必要はなくなったのだろう。ものめずらしそうに歩いては足を止め辺りを見回す様はおのぼりさん、しかも田舎の地主に蝶よ花よと育てられた箱入り娘が、初めて東京に一人でやってきたようにしか見えない。

「……って、わ、ちよっと、すいません!!」

都内、JR新宿駅前の雑踏に人ごみを、アマテラスは当たり前のように進んでいく。

平日の昼間とはいえ東京の都心、人通りがすくなくはないはずはない。なのにアマテラスの歩みに滞りはまったくない。それこそモーゼの十戒で裂ける海のごとく、アマテラスが歩く先の人々は、自分から道をあけていく。たった一人の女性のために雑踏が開け自動的に道が作られることを、誰もおかしいと感じてさえない。当然だと 誰もが受け入れてしまっている。

あの存在感がなくても、皆その巨大さを理解しているのだろうか。人間も動物である以上もっているはずの、相手が自分より強いか弱いかを察知する本能で。

小さいながらこれも太陽の、神の格というものか。

「すいません、ちよっと、通してください!!」

圧倒されながらも、遅れまいとして何とかついていこうとする。

だが武装した人間数十人を相手にすることが精一杯、核ミサイルどころか戦車や戦闘機を束で使われたらお手上げの時野和宏では、自然に道を開かせることなど不可能だった。

アマテラスは特に急いでいるわけでもない。とてとてと少し歩いては足を止め、立ち止まっておのぼりさんそのものの振る舞いで新宿の町並みを眺めたりしている。

「東京見物楽しむのいいけど、ソーブランドをものめずらしそうに見るなあっ!!」

周囲に多くの人がいることを考えて、大声で叫ぶことだけはとりあえず自制する。そうこうしているあいだにも距離はどんどん広がって、とうとうその姿を見失ってしまった。

「くそ……飛行で空から探すか？」

それとも応援をと考えてから、その前に少し考える。

額に伝う汗をぬぐう。別に緊張したり極度にあせったりしているわけでもない。まだ四月中旬日だというのに、日差しは八月中旬だから。

「……そういえば、『和菓子屋水月庵』とかいつてたな」

電子警察手帳を取り出して、新宿西口駅前近辺の地図を表示させる。

「あっちか」

アマテラスはどこどころで足を止めながら和菓子屋水月庵に向かっているはずだ。ならばこちらが足を止めずにおいかければ、まず確実に先回りできるだろう。

雑踏を進みながら、目的地に向かうと、果たせるかなアマテラスの姿があった。

服装はありふれていても、ひざに届くほど長い髪のため一発で区別がつく。

そのアマテラスの周りに、誰かがいる。囲むようにたっている。

知人・友人の類ではない。太陽の化身であるアマテラスには「人」の知り合いや友などない。という意味ではない。まわりにいる連中の放つ軽薄な雰囲気、アマテラスの落ち着いたものごしとはあまりにもそぐわないからだ。

ここ数日のまた季節が三ヶ月ほど進んだかのような熱気にあわせて、タンクトップやジーンズ姿だ。ラフな印象を演出しているのかもしれない。ただし、肌は急激な気候の変化についていけない。春相応の相応の生白さを持ったまま。褐色の肌とあわせていればそれなりに見栄えをする服装も、どこかこっけいな感じがある。

「どうした、彼女。そんなガイドブックもって、一人で東京見物か？」

「俺たちみたいに優しいやつに先に声をかけられてよかったな。案内してやるよ」

「いえ、あくまでも観光はついでですので。お気持ちだけいただいております」

「怖がらなくていい。俺たちはやさしいって言ってるだろ？」

アマテラスの手を引き、どこかへ連れて行くこととする。道案内するつもりなどどこにもない。

「おいおい、そのへんに——」

相手がアマテラスだからではない、警察官として制止しようとする。この手の小物は警察手帳をみせてやれば、すぐみあがって、「家には連絡しないでくれ」となきつくともザラだ。

準備をしながら駆け寄ろうとする間に、アマテラスの手を乱暴に引っ張ろうとしていた男がさらには夏にふさわしい空気も、一瞬にして凍りついた。その理由が和宏にもすぐに理解。アマテラスが、太陽の化身としての力をほんのほんのほんのほんのほんのほんのほんのほんのほんのほんのほんのごく一部を、この場で解放させた。

人間よりはるかに危機に対して敏感な野生動物、この場では主にカラスや雀などが、そこらじゅうで一斉に飛び立ち、この場から緊急離脱する。

数秒前まで季節はずれの暑さにつつまれただけだった昼間の新宿の街並みは、いまや人と比較することさえあほらしい巨大な力をもった存在が降臨する場。

「なー？」

男たちも、今手を引いている女性の形をしたモノがこの異変を起こしていることは理解できているようだ。手を引こうとしたまま、動けなくなってしまうている。

「おい、ちょっとまってー」

今度は、別の意味でアマテラスのそばに駆け寄ろうとする。確かにもし連れられようとしているのがアマテラスではなく普通の女性で、また和宏がこの場にいなかったら、その女性はどうな目に遭わされたかわかったものではない。心身に深い傷を負ったかもしれない。

だが、だからといって、殺されるほどひどいこともやってもいない。

「な、な……」

右手首は男に掴ませたまま、アマテラスは左手をゆつくりと男の顔にむける。

普通の人間と変わらないサイズの、何も持たない手。だが、それは確かに神の手。

地球にふりそぐすべての光熱の源として、あらゆる命を生かすも殺すも思いのまま。

アマテラス自身は以前こころの言葉を否定した。だが紛れもなくアマテラスは神だ。

動けない。下手なことをすれば自分以下この場にいる人々すべてが一瞬で灰になる。

アマテラスは男の鼻先にてをつきつけたまま、言った。

「こうして手を伸ばせば、その中には多くのものが収まっているように見えます。夜空に輝く星々さえ、いくつも自分の手の中にあるようにも思えるでしょう。ですが、それはあくまでもみえるだけのことです。それを忘れないほうがよろしいかと」

感心する。「身の程を知れ」は、極めるところまで詩的で荘重になるものらしい。

もつとも、ここまで詩的で荘重にしているのは、言葉そのものよりも発言者の格だが。

「あ、ああ……」

アマテラスが右手を軽く振ると、アマテラスを掴んでいた男はその場にへたり込んでしまう。それと同時に、アマテラスは存在感を封じ込めた。そして、もはや振り返ることさえせず、とて、とすでに和宏の視界にもはいっている和菓子屋「水月庵」へとむかっていく。

再び歩き出してから少しして、アマテラスは振り返ってこちらを見た。

そうしてこちらを見る姿は、もはやどこにでもいそうな温和な雰囲気的女性でしかない。

「もうしわけありません。少々私だけで先に進みすぎたようですね」

「……見失ったのは確かに俺の責任だ。それは謝る。けど、ああいう方法で連中を黙らせるのは今後止めてくれ。何かあったらすぐに大声を出せばいい。あとは俺のこの身分だけで、たいていことは収められる。かわいそうに、あんなもんみせつけられたら、あいつらもう哲学者

か宗教家にでもなるしかないんじゃないのか？」

太陽に手が届く場所まで近づいたら、本当なら人間など燃え尽きるしかない。それでもなぜか助かってしまった。以後の人生が一変するくらいの衝撃をうけてもおかしくない。

「フッフフ、何を大げさな。私など恒星の中では下から数えた方が早い小物ですよ。人生を一変させる影響力などとてもとても」

「こやかに、アマテラスは言う。」

「……バトル漫画で、先鋒を倒された敵チームの次鋒以降が言いそうなそのセリフが、事実だけになおさらタチがわるいな」

苦笑とともにぼやく。今の「私など恒星の中では下から数えた方が早い小物」とは、小学校の理科の知識だ。

宇宙には、太陽と同じように輝き続ける恒星が、それこそ星の数ほどある。その中でも太陽がひときわ大きく、しかも地球に絶大な影響を与えているのは、単純に距離が近いから。

全ての恒星の、地球との距離を同じにしたら、太陽は大きさも輝きも下から数えた方が早い。

それは、この化け物じみた力を持つアマテラスよりはるかに強大な存在が、まさに星の数ほどいるということ。人間のちっぽけさを痛感できる天文学的事実だ。

和宏のぼやきには、微笑みだけを返すと、またもととととと、目的地だった和菓子屋水月庵に入っていく。そして数分で右腕に紙袋を抱えてもどってきた。

左手では、さっそく購入したであろうどら焼きを、もう食べている。はもはもと。

外で軽く休憩できるように店側が用意したベンチにすわると、自販機から真夏日だというのにあったかくらい日本茶を買ってきて、おいしそうにどら焼き（2枚目）を味わっている。

「さすがガイドブックに載る品ですね。見事な味です。時野さんはいかがですか？」

紙袋から、どらやきが一つ差し出される。

「……悪いが遠慮する。まともな収入のみこみもないうちに、まともな人間の食べ物を口にすると、かえって辛くなるからな」

数日前東大上のキャンパスの特別実験場で言った言葉と同じことを言う。

「そうですか」

別に勧めを拒否されたことに気を悪くしてはいない。それに軽く安心した後、和宏は、

「……そういえばあなた、食べたり飲んだりできるのか？」

今更ながらに気がついた。かつて災厄たる命は実体もなく、ゆえに飲食も一切必要としない存在だったのだ。おそらく呼吸も不要だったろう。

「恒星たる私は、食べなくても自分の存在を維持していく上で不都合はありません。ですがこの身体は皆様とお話するために、とりあえず皆様と同じような機能をすべて備えてつくりました。ですから、体を維持するためには食事や休息も必要です」

「災厄ごとと同じにするな、ってことか」

命は和宏たちと話をするためにとりあえず人と同じような姿を表示した。それと同じ感覚で、とりあえずアマテラスは人間の身体を一つ作った。命の妹は、命を人間にするためにすべてをなげだそうとした。その最終目的が、アマテラスには「とりあえず」でしかない。

「なるほどな。じゃあついでにもう一つ質問だ。どら焼きを買う金はどこから用意した？」  
太陽の化身であり、そもそも人間自体が絶滅したところで何も困らないと明言したアマテラスが、人間社会の金を持っているとはちょっと思えない。

「大気中に漂う二酸化炭素を分解して炭素を抽出し、それを圧縮して三千カラットのダイヤをつくりました。某大手宝石商に、五百億円ほど引き取っていただけました」

「……ほんとか？」

「冗談です。このお金は、いろいろな場所に踏み込むときのことと考えて、警視庁に用意していただいたものです」

「そういう冗談はやめてくれ。あんたがいうと、どんなばかげた内容も、冗談に聞こえない」  
「わかりました。心がけます」

止めるとは、アマテラスは言わない。

「ちなみに、実際のところ二酸化炭素からダイヤを作ることとはできるのか？」

「ええ、できますよ。お近づきのしるしにプレゼントしましょうか？」

「遠慮する。換金できないなら意味ねえよ」

ある程度以上の大きさのダイヤは、鑑定書がないと正規のルートでは売れない。そしてアマテラスが二酸化炭素から作ったダイヤにももちろん鑑定書なんてあるわけではない。

「確かに換金は不可能でしょうが、女性へのプレゼントとしては悪くないと思いますよ。気が変わってほしくなったらいつでもどうぞ」

アマテラスはそういうと、はもはもとうれしそうにどら焼きを食べる。

ここだけを見れば、世間に慣れない良家のご令嬢でしかない。

しかしさつきギネスブック級どころか人類史上でもぶつちぎりの身の程知らずをやらかした男たちに一瞬見せたほうこそが、アマテラスの本当の姿だ。

それを意識すると、とたんに胸ポケットに入っている十字架が存在感を増した。

この十字架は、和宏たち第二分室の面々が、「美術分室」とからかい混じりによべれたりしながら都内を駆け回ってあつめた魔力物質候補の品の一つ。

アマテラスの「集めた魔力物質を見せてほしい」という要求は、警察上層部だけでなく政治家の議論も経て承認され、弓子や和宏たちたちあいのもと、アマテラスが鑑定した。

アマテラスは和宏たちが集めたさまざまな美術品や骨董品の中から十個ほどを選び出し、それぞれを一つずつ両手で包み込むようにもち、深呼吸。

それだけで、この十字架を含む十個の美術品や工芸品は、「使いきりの癒しの石」になった。魔力を流し込むことで一度だけ極大魔力弾、極大防壁、極大飛行を使えるらしい。

実際一度一つを使って極大防壁を展開したら、本当にできた。

それも、これまで和宏たちが使ってきたものより桁外れに強力なものが、である。

現在、和宏をふくむ魔術捜査官数名が、このアマテラス作成の「使いすて極大魔力銃」とも言うべき元美術品を所持して歩いている。

アマテラスいわく「私がソルやラーと戦いを始めたら、その被害を完全に抑えきる自信がありません。その時はなんとかそれで被害の拡大を防いでください」とのこと。

「ごちそうさまでした。食べるということは、本当に素晴らしいことですね。食べるものがすばらしければなおさらです。さっき『もう美食を続けられないから』といって服毒自殺した美学家の方がいらっしやいましたが、その気持ちが一少しかる気がします」

「……ちなみにその『以前』ってのは具体的にいつのことだ？」

「皆様の歴史で言えば、古代ローマ帝国時代ですね。約二千年前となります」

「それが『以前』か」

人間はしばしば「永遠の理想郷」の意味で「千年王国」という。だが億という時間存在し続けたアマテラス<sup>星</sup>にとっては、その二倍すら「以前」で片付く。

今の口ぶりは、せいぜい今日中のことを話すときのそれだ。

(まあ、それが当然の反応でもあるのか)

アマテラスの本体、今も頭上に輝く太陽は、今から約五十億年前に生まれ、そしてこの先もほぼ同じ時間輝くといわれている。つまり太陽の寿命は合計百億年。

人間の寿命を百歳と考えるなら、恒星と人間の時間の感覚はちょうど一億倍違う。

人間にとっての一億秒、がアマテラスにとっての一秒。

(二億秒を六十割れば分、さらに六〇で割れば時間。さらにそれを二十四で割れば日……)

そうして計算していった結果「一億秒<sup>星</sup>約七十五年」。

アマテラスにとっては人類一万年の歴史すら、2分ちよつとの出来事でしかない。

二千年前の出来事を「さっき」というのは、異常でも何でもなかった。

と、頭の中で計算していく間に、和宏はふと気付く。それをそのまま口にする。

「アマテラスにとって、俺達の行動はせつかちすぎるんじゃないのか？」

「そうならないように、いくつか手を打っています。だから今お話しできています」

「( )もつとも」

和宏が考えたようなことは、アマテラスも考えて、対策済みだったようだ。

アマテラスは立ち上がると、お茶の空き缶と紙袋を近くのゴミ箱に放り込んで、またあてどもない探索をはじめ。

(やっぱり、ただ見物してるんじゃないのか)

アマテラスの行動は相変わらずおのぼりさんだ。だが、見る側の和宏に変化があった。



ナンパ男たちを追い払うため、一瞬ほんのわずかだけ恒星としての力を解放した。それを感じることでわかるようになった。アマテラスは立ち止まって何かをぼんやりと見つめるような素振りを見せるつど、極限までしばらくこんな形で自分の力を解放している。これにより、弟達をおびき出すつもりなのだろう。

今も相変わらず熱い。四月中旬とは思えない、真夏の盛りとしか思えない熱気の中を、和宏もアマテラスも無言で歩いては止まり、止まっては歩くをくりかえす。

今度こそはぐれないように、周囲が勝手に作ってくれる道を一緒に歩く。

一緒に歩く間に、何度かアマテラスの肩が和宏の腕にぶつかる。

夏場にふさわしい薄手のワンピースから伸びた肩が、和宏にぶつかる。

温かくて、柔らかくて、ほんのちよつとだけ、せつけんの香りがする。

(それにしても、人間そのものだな)

その感触は人間以外のものではありえないように、和宏には思える。

そんなことを考えていたら、アマテラスの腕が、和宏の腕全体にからみつく。

まるで、恋人同士がするみたいに、腕をからませている。

「……って、なにやってんだ、あんた!？」

「何かと言われれば、あなたの腕に私の腕と身体を預けているのですが」

「そんなことを聞いているんじゃない。なんでそんなことをしてるんだ、って聞いてんだ!？」

「幸い私とあなたは外見的にもほぼ同世代です。腕を組んでいておかしいことはないでしょう。というかこんな熱気の中身体がくっつくほど近づいているのは、周囲の目をはばからずにいちゃつくバカップルくらいなものだと思いますので」

『バカップル』ねえ

太陽の化身としての品位を著しく損なう言葉のような気が、しないでもない。

「もちろん無理にとはいいませんが、こういうのはお嫌ですか?」

といいながら、アマテラスはさりげなく身体を和宏の右腕におしつけてくる。

これまで勢いで何度か抱きつかれて知ったところはちがう。姉と似た、でも確固として違う丸さと柔らかさと暖かさをもった女性の身体だ。

(いいじゃねえか、相手が勝手にやってきてるんだ。役得だと思っつけ)

時野和宏の中のある部分が、そうささやいてくる。

確かに、真夏日の暑さの下であつても、不愉快なことはまったくない。

「遠慮しとく。俺は太陽の化身様と腕を組むほど高級な存在じゃない」

それでも、和宏はそう答えた。未練はむろん大量にある。それでも。

「わかりました。そういうことにおきましよう。気が変わりましたらいつでもどうぞ」

「おい、『やっ、やっ、やっ』してておきましよう。『やっ、やっ、やっ』ってのはどうもだ。」

「言っってほしいですか?」

「すいません頼むから黙っててください。お願いします。頼みます」

負けを認める。情けないことではあるが、時野和宏は年上の女性に弱い。原因は明らかだ。幼いころから支えてくれていた戸田弓子の影響はあまりにも大きい。だから自分よりやや歳上の女性は、よほど大きな違いがない限り、皆弓子に重なって見えてしまうのである。シスコンだと笑わば笑え。しかし、それはごまかしようのない事実だ。

まして相手は太陽の化身。人でなしといわれて、「そうですが何か？」と平然と聞き返せる存在だ。まさに人とは思えない包容力もっている。虚勢など通じようがない。

「誰かに義理立てする融通の利かなさは、私もきらいではありませんよ」

それこそすべてお見通しといわんばかりにそういうと、アマテラスは腕を離した。

そして、そのまま折肩をぶついたりしながら、新宿の街を歩き続ける。

五時半ごろ、空は藍色になりはじめていた。本来これだけ暑い時期なら、五時半の空はまだ茜色のはずだ。しかし現実には藍色。それもちよつとした違和感を引き起こす。

会社帰りの人々もちらほら見え始め、いよいよ新宿の街は混雑し始めたていた。

その表情は皆一様に疲れている。服は皆急遽タンスから引っ張り出せばすぐかわる。だが、体はそんな簡単に切り替えがきかない。本来春であるはずの時期なぜかやってきた暑さに、すぐ対応できず、疲労や消耗の原因になっているようだった。

「さて、そろそろ切り上げるか？」

昨日もその前も、大体日暮れを境に搜索を打ち切っていた。もし不幸にして戦いとなり被害が周囲に及んだとき、夜では救助活動に支障がでる、という判断から。

「いえ、今からが本番です」

アマテラスの声と表情から、和宏をからかっていたときの柔和さと余裕が微塵もない。足を止める。そしてその先を凝視する。

これまで何度も歩いてきて、あちこち行くあいだに何度も通過した歩道の先を凝視する。

そこに、なにか、目をそらしてはならないものがあると言いたげに。

何があるのかは、和宏もすぐに理解できた。いや、理解せずにはいられない。

老若男女さまさまな人々が、家路に着くため、これから働きにでるため、和宏たちを追い抜いたり、すれ違ったりしている。そうした人の波が、和宏たちの前方でも裂けていた。

いかにも「スジモノ」ですといわんばかりな巨漢ではない。百五十センチにも届かない小柄な少年が、たった一人で、ごく当然のように周囲に道を譲らせている。

道を譲る側は眉をひそめ顔をしかめもしていない。当然のこととして受け入れている。皆それが当然だと思っている。アマテラスに対して道を譲るのと同じように。

「おい、まさか、こいつが――」

「はい、私の弟の一方、ソルです。連絡をお願いします」

きわめて短縮された返事で、アマテラスも認める。

すでに日が暮れつつある時間帯、警察官に見つかつたら、すぐ家に帰りなさいといわれそうなタンクトップにジーンズ姿の十二〜三歳の少年が、ソル。アマテラスが身を削つても人間と地球を守ろうとすることを不服とし、力づくでも休息を取らせようとしている弟の一方。つまり、人類を地球ごと滅ぼそうとしている太陽の化身。

まだこちらに気がついていないのか、そういう素振りをしているだけなのか、ともかく両手をジーンズのポケットに突っ込んだまま、ややうつむき加減にこちらへと歩いてくる。

「もしもし、こちら時野。アマテラスが、新宿で標的を見つけた!」

それだけを小型無線機で連絡する間も、その少年から目を離せない。

すでに、その外見からして、ある意味普通の弟らしくなかった。和風な顔立ちのアマテラスに対して、ソルはかなりいわゆる西欧風の顔立ちだからだ。目や頬の彫りが深く鼻が高い。そして髪は見事なブロード。同じ親から生まれたとは考えにくい。

実際そうだろう。アマテラス達の言う「姉弟」は、人間のそれとちがうのだ。

互いの距離が五メートルを切つたところで、少年は足を止めた。そのまま、何かに感づいたかのように、ややうつむき加減だった頭をあげる。

「……おねえちゃん、どうして、なんで? どうしてそんな気配を放つんだよ!？」

声と言葉だけでなく表情でも、はつきりとソルは狼狽をうかべている。和宏の目には、演技をしているようには見えない。何か予定外の出来事に遭遇したようにみえる。

(……アマテラスは「弟たちが結託したら勝てない。だが、一対一ならば勝てる」って言っていた。だったら今この状況は、アマテラスが何らかの方法で、多分弟を騙して、この場所に引っ張り出したんだ。だからソルは驚いてるんだ)

和宏が考えている間に、ソルが両腕を広げながら叫ぶ。

「なんでだよ。なんで、戦う気満々なんだよ。僕たちと一緒に帰るんじゃないか? 僕を、僕たちをだましたかよ!？」 嘘ついてたのかよ!？」

悲痛なソルの絶叫。それを契機に、道を譲っていた面々の一部が足を止める。

事情を知らないものたちにとっては、ソルが被害者でアマテラスが何も知らない少年を騙した女性詐欺師で、ソルは騙された純真な少年あたりにみえたことだろう。

和宏にはそんな風には全然見えないが、ソルによればアマテラスは戦う気マンマンらしい。

「ねえ、嘘でしょ。冗談でしょ? おねえちゃん、僕をからかかってるんだろ?」

その言葉に、アマテラスの表情がいくらか歪んだ。

「……騙したことは謝ります。ですが、やはり私は見捨てられません」

「なんでだよ。どうしてだよ。どうしてそこまでするんだよ。こいつらが絶滅したって、この星がなくなつたって、僕たちは何も困らないじゃないか!？」

あまりにも簡単に行われた、人間を含む地球そのものの全否定。

太陽とて宇宙の一部である以上、多くのものに支えられている。太陽は太陽だけで存在でき

ない。だがその多くの中に、「地球という惑星」は含まれていない。

人類全体が抗議して自殺しようと、地球がこの瞬間に爆発して消滅しようとも、太陽は何一つ困らない。変わることもなく輝いていける。労働者が団結したら破滅するしかない資本家や、国民が団結して自殺したら結局自分も失脚する独裁者、ごときとは根本的に違う。

それなのに、アマテラスは自分を削ってでも、地球を守ってくれている。

「彼らに生命を、生まれる余地を与えた責任がある。私はそう思います」

アマテラスは、神は、自らが作ったとは言わない。

生まれる余地を与えた。神が人間にしたことは、そこまで。

だから、アマテラスは人間の愚かさや出来の悪さに、何の責任も負う必要がない。

どれだけ人間が愚かでみじめな破滅を迎えようと、それによってアマテラスの品位や格が損なわれることは全くない。ただそれを救うアマテラスの気高さだけが残る。

「いやだ、僕にはこんな星よりおねえちゃんのほうが大事だ!!」

はつきりと、ソルは宣言した。

「俺がやろうとしたことは、ここまではた迷惑だったわけか」

ソルの何のためらいもない宣言に、思わずひとりごちた。

一年ほど前、時野和宏も同じように、たった一人の姉の命を救うために世界を破滅、とまではいかないにせよ、歴史の進歩を数十年にわたって遅らせる決断をしている。

他人が言うのを聞いてはじめてわかる。これほどはた迷惑なせりふはそうそうない。

アマテラスも、悲しげな表情のまま、一歩進み出る。

「わかつては、くれませんか？」

「いやだ、僕はお姉ちゃんがこれ以上苦しむのを見てられない」

「では、仕方がありませんね。少しの間、眠ってもらいます」

「させない!!」

「な、ソル!!」

何かに驚いたようにアマテラスが声をあげる。その直後、あたりが白一色につつまれる。

「な、なんだ、これ？」

「停電……っついても外だよな、ここ？」

そんな声がそこかしこから聞こえる。

アマテラスがやや強い声をあげるまで、ここは夕暮れ時の新宿だった。

だが、今はもはや周囲は、厚さも重みも何もない「白」によって覆い尽くされている。

見えるのは自分の体だけ。それも完全ではない。手足の先となるともう見えない。

そんな、白一色の世界の中で、アマテラスとソルの姿だけははつきりと見える。

この突然の白色化がアマテラスかソル、あるいは両方の仕業であることは確実だろう。

両者の状況は同じままだ。五メートルほどの姿勢で向かい合っている。戦ったための構えなど

もとっていない。しかしわかる。両者の戦いはすでに始まっている。とてつもない次元で。

「……そんなことができるのかよ」

信じたくない。しかし、信じるしかない。この白色化は、単にあたりの色が変わっただけではない。おそらくはアマテラスがあることをしている。その結果として、あたかもあたりが白一色に染まっているだけにとどまっているのだ。

「やめなさい。ソル……」

「いやだ、お姉ちゃんが自分を削りつづけるなら、僕はその理由を消し去ってやる……」

「これが、恒星同士の戦いか……」

ソルの叫びで、和宏の予感は一時的に確定的になった。

太陽は五十億年以上、現在の原子力発電所よりはるかに強力だといわれている核融合を続けてきた。そして、さらに五十億年以上同じように輝き続けていくといわれている。

ソルとて個体ではアマテラスには及ばないものの、そんな太陽の化身。

その力を一部でも使えば、地球そのものを消しさせることもそう難しいことではない。

実際、ソルは自分自身で宣言したとおり、そのつもりでほとんどでたために、全方向に核攻撃を続けている。だが、あらゆる方向へほとんどでたために放たれる攻撃のすべてを、アマテラスが熱や放射能や衝撃波など、生物にとって有害なものはすべて中和無効化させている。具体的な方法はわからないが、おそらく重力を使って。

巨大な質量を持つ太陽は、巨大な重力の塊でもある。その重力で戦いの余波が周囲を焼き尽くすよりはやく押しつぶすか何かしているのだ。その結果周囲が一面真っ白になっている。信じられない。しかし他に何も考え付かない。

これが、人間には手も足も出ない決定的な破滅を、気付かせもせず救い続けてきた太陽の力。

「……………」

アマテラスが小さくうめく。ソルに向かって「騙していた」と認めたときは別の、身体的な疲労による辛さがはつきりと見える。

「一対一なら弟相手に勝てる」といつっておきながら、先にへばったのか。口ほどにもない。などとは思わない。自分には当たらない攻撃まですべて無効化する。もともとの地力で相当に勝っているからこそできる芸当だ。

右手が胸ポケットに伸びる。そして、アマテラスからもらった十字架を取り出す、まえにまぎらず左手で右手首の袖をまくる。右手首にはめた魔術製品を準備する。

「……通じる、のか？」

わからない。だが十字架を使う前に試してみても損はない。もし通じるとすれば、アマテラスに魔力物質候補の品を加工してもらわなくてもそれなりに戦えるということだ。

転移魔力弾。いわゆる瞬間移動を可能にする魔力物質を組み込み、いきなり敵の中に攻撃を打ちこむ武器。かつては実体を持たない災厄にもダメージを与え退かせた。

「力よ、新たな門を今ここに開け!!」

意識を投影させて、即座発動させる。

これで何度目だろうか。和宏はいつもと同じ闇の世界に飛び込んで、こない。

「え？」

さっきまでは視界が白一色に染まっていても、足場の感覚はしっかりとあった。

対して今はそれもない。前後上下左右の感覚さえあやふやになった。これは転移魔力弾を撃つ事前準備として、距離とか方向の概念がない世界に入り込んだ証しであるはずだ。

「……まさか……」

ある可能性に思い当たり、とりあえずその場で腕を伸ばす。

そして、意識を集中させてみる。撃つべきソルの力を。

「!!」

その瞬間、流れ込んできた。膨大な、莫大な、強大な、圧倒的な力の波濤。

(逃げる、ここから離れろ!!)

意識のすべてに命令する。ここは距離の概念が存在しない世界。和宏がそう望めば、人間の枠を超えた和宏の身体能力さえ更に超えて、どこまででも移動できるはずだ。

しかし、離れられない。どこまでいっても、白い光は和宏を包んでいる。

逃げられない。太陽の存在から人が逃げようなど、そもそも無理なことなのだ。

飛び込んだ世界がこれまでと違うのではない。すべてが太陽の化身たるソルとアマテラスの力によって覆われている。ただそれだけだ。ゆえに逃げての意味などない。

「力よ、光弾となりー」

詠唱しながら探るとすぐに光の質を区別できるようになった。この場には二つの力が存在する。優しい光と激しい光。撃つべき敵は、無論激しい光だ。

「――彼方を貫け!!」

転移魔力弾を放った。当たった。それだけだった。

「ま、そうだよな」

ある程度予想していたので、特に落胆はしない。和宏の転移魔力弾は確かに当たった。だが効かなかった。空間を超越して敵を内部から破壊する攻撃。防御も回避も不能。

よって効かない理由は一つ。当たったがそれをものとしなかった。

「それなら、こいつはどうだ？」

当たるのなら、あとは威力の問題だ。胸ポケットから十字架を取り出し、強く握る。

祈るためではない。人間が想像の中で作った神ごときに、実在する神同士の戦いをどうかできるはずもない。十字架のはたまたまだ。アマテラスが魔力物質候補の品物に何かをして作った、使いきりの極大魔力銃を使うタイミングは、今において他はない。

“時野さん、まってください!!” その方法でソルを内部から攻撃したら、ソルの力すべてが

一気に解放されてしまいます!! 防ぎきれません!! 地球が吹き飛びます!!”

頭の中に直接響くアマテラスの声。突然聞こえたことに驚きはしたが、それだけ。災厄にさえできたこと。太陽の化身ならできないほうがおかしい。

“使うタイミングは私が指示します。決して悪いようにはしません。まっってください!!”

「わかった。信じるぞ」

和宏は意識を解放する。白一色なのは同じだが、足に何かを踏む感触がもどってくる。相変わらず、アマテラスもソルもほとんど身じろぎさえしていない。

「……だったら、これはどう? これから完璧に地球を守りきることができるかな?」

そんなお互いに棒立ちのままだった対決に変化が生じた。これまで棒立ちだったソルが両腕を前に突き出し、さらに左足をやや後へひいて、しっかりと腰を落とす。

「我が名はソル。天空に君臨せし大なる光よ。古の契約の履行を我は求む!!」

アマテラスの制止も聞かない。ソルはさらに全身に力を入れる。

ソルの突き出した両腕の先に、白を超えた白が集中し始める。

伝わる。アマテラスの中和無効化処理さえ超えて、その迫力が伝わる。

文字通りすべてを焼き尽くす力が、ソルの意思を受けてソルの両手に生成される。

巨大な姿が、サッカーボール大の光の塊から、ゆっくりと姿を現し始める。

ドラゴン。全身に白い炎をまとわせた巨大なドラゴンが、自分の体を通過させるにはあまり小さいはずの光の塊の中から、まず頭を、つづいて胴体を出現させていく。

今までも嘘みたいなのが現実として起こっていたが、これはさらに桁違いだ。

紅蓮の炎という言葉があるように、炎といえは多くの人は赤を思い浮かべるだろう。だが、

これはそんな次元ではない超高温。鉄をも焼ききるガスバーナーの炎は涼しげな青色となるように、炎は地球上で自然に発生しうる温度の限界を超えた最後に、白へいきつく。

雪のように白い炎を纏うこの竜こそ、本当の、最強のファイア・ドラゴン。

「くっ!!」

恐怖に駆られて、思わず十字架を使いそうになってしまう。

“まっってください。まだ今はそのときではありません!!”

再び制止された。その言葉を受け入れて右手から力を抜く。

この冗談みたいな攻撃を完璧に防ぎ続けたアマテラスの言葉だ。信じるしかない。

竜がほぼ全身をこの場に見せる。いつか英雄に殺されるための存在はなく、人には絶対に殺すことのできない超越種としての竜が降臨する。

「第一の使い、荒れ狂う紅蓮の炎を纏いしの猛々しき竜よ、われは告げる汝が名を。ここに來たりて敵を討て。フレア!!」

すべてが、白に染まった。今までは見えていた自分の体さえ、完全に見えなくなった。かと思ったら、すぐに白は薄まっていって、時おかず色彩が回復する。

そこは、アマテラスとソルがはじめに対峙していた新宿西口の大通りだった。  
「う……」

さつきから疲労を見せていたアマテラスが、とうとうひざまでついた。  
最後の長つたらしい一撃の防御は、さらなる消耗をアマテラスに強いている。

「ソル……一つだけ、聞きたいことがあります」

かなり辛そうだ。ひざを突いただけでなく肩で息をしている。

「……なにさ？」

聞き返すソルも、アマテラスのように膝をついてこそいなものの、肩で息をしている。あの一撃は、撃つほうにとっても相当負担だったようだ。

「その長つたらしい前フリ、言っていて恥ずかしくないですか？」

「はい？」

疲れさえ忘れ、素っ頓狂な声で聞き返すソル。

「ですから、その長つたらしい前フリをこんな大勢の前で高らかに唱え上げたりして、恥ずかしくないものか、と。前フリなどなしで、念じれば即座に発動させられるはずでしょう？ 攻撃を竜の形することも意味などないはずです」

「……ないんかい」

和宏も一気に脱力感を覚えた。地球さえ簡単に吹き飛ばす次元の戦いが、単なるごっこ遊びにまで一瞬で落ちたような気がした。

「それに『紅蓮の炎』と言っている割には、赤くなかったではないですか。他はまあ個人の趣味だとしても、明らかにこれは不正表示です。公共広告機構あたりに指導されますよ」

「い、いいんだよ。僕がかっこいいと思ってるんだから！！ 赤は三倍なんだよ！！」

「それに、古の契約というのは誰といつどんな形でかわしたのですか？ 契約書はのこってますか？ もし契約不履行があったときはどこの誰に訴えるつもりなのです？ そもそも『天空に君臨せし大いなる光』とは自分のことではないですか」

やれやれ、と言いたげに首を横に何度か振る。そのあと、

「まあ、いーですけどね。あなたがそれでいーとおもっているのならば、私は何もいーませんよ、えーいーませんとも。そーですとも」

言ってる。言葉ではなく態度で思いつき。「うわ、はっずかしい。中二全開」と。

「い、いいんだよ！！ ぼ、僕にはかっこいいんだよ！！」

顔を真っ赤にしたまま、ソルが再び両腕を伸ばす。

さつきは二つの手が重なるように伸ばしていたが、今度は右手が左手首をつかんでいる。

「我が名はソル。天空の最奥に住まいし星星の祖よ、古の契約の履行を我は求む！！」

そして十二〜三歳の少年の体から、とてつもない迫力が発散される。

この攻撃がさつきの「フレア」とやらよりもさらに強力な証しか、あるいは消耗のためアマ



テラスの中和無効化処理が追いつかなくなったのか。

「やめなさい、ソル！」

制止する声も力がない。すでにそこまでアマテラスの力が失われているのか。

「死と破壊の雨を降らせたまえ、この契約の名の下に。メテオストラー！」

「ソルっ！！ 本気で怒りますよ！！ いつからそんな悪い子になったのです!?!」  
びくうっ！！

その音が聞こえてくるくらい、ソルの全身が激しく上下した。

特にこれまでと違う点があったように思えない。あえて言えば、「怒る」という表現を使っただけで、今までに比べて少々感情的になっていたことくらいだろうか。

「だって、だって……」

もはやここに人間と地球を全否定していた太陽の化身はいない。

ただ、大好きな姉に怒られて泣きそうになっている少年がいるだけだ。

（わかる、わかるぞ、ソル！ そうだよな、そうだよな。理屈じゃないよな!）

声に出さず全力で同意する。ああいう態度を取られたら、理非に関係なくこちらの負けだ。

相手が「1+1=3」とか完璧に間違っていることをいっていても負けだ。同じ弱点（属性）を持つ身として、和宏はソルの気持ちが痛いほど分かった。味方したくなるくらいだった。

「……あなたの気持ちはわかります、それでも……っ……」

といいかけて、アマテラスは前のめりに倒れこむ。片膝をついている姿勢すら維持することができなくなったようだ。

「!!! おねえちゃん!!!」

姉の急変を目の当たりにして、ソルはそのそばに駆け寄ろうとした。そのあとすぐ、ソルは何か思い当たったような表情を作り、足に力を入れて踏みとどまる。

一分ほどうつむいていたあと、ソルはやっと頭をあげる。

「……お姉ちゃんは、やっぱり……優しすぎる。少しの犠牲に眼をつむって……僕を倒していれば……この星のほとんどを救えた。……でも……お姉ちゃんは……全部を救おうとして、結局……僕より先にへばりかけてる……」

さっき怒られて泣きかけた余韻がまだ残っているのだろう。ソルは所々つかえる。

「やっぱり僕は間違っていない。お姉ちゃんは自分からは絶対に休もうとしない。だから乱暴なことになっても、力づくでも、誰かが休ませなきゃいけないんだ!!! そのために、この星がどうなるかと知ったことか!!!」

ソルは叫ぶ。それこそ迷子になってしまった子供のような顔で。

だが、その場で泣き喚き、親や大人の救助を求めるだけの無力な子供の顔ではない。

本当は泣き叫びたい。だが、そばには自分より無力な弟（か妹）がいる。だから、ないてなぞいられない。そんな決意がこもっている顔。

一度は踏みとどめた足を、再び前へと運び始める。

「ごめんね。あとでいくらでも怒られるから!!」

そういうと同時に、ソルが地面を蹴り、一気に間合いをつめる。

「っ!!」

アマテラスは慌てて身体を引く、しかし、今までの消耗が響いているのか、反応速度が明らかに遅い。アマテラスはソルが自分の懐へ踏み込むのを許してしまう。

「ふっ!!」

地面をしっかりと踏みしめて体重と速度を乗せた掌打が、アマテラスの脇腹にヒットする。

「っ……く!!」

アマテラスは打撃をまともに食らってしまっただけで後ろへ吹き飛ぶ。

「お願いだよ。抵抗しないで!!」

むしろソルのほうが攻撃されているかのような声をあげながら、攻撃を続けていく。

「……これが本当の神か」

わかる。アマテラスはまだ人間を守り続けている。人間と同じように五体を使って攻撃しているように見えるソルの攻撃の一発一発は、やはり極大魔力弾以上の力を持っている。

ただよけるだけなら簡単だ。しかし、それをやったらこの場の人間が一人残らず消し飛ぶ、だからアマテラスはまず先にその攻撃の無効化処理をやっている。そのせいで、すべての攻撃をさばききることができなくなっているのだ。

「もう眠ってよ。それ以上がんばらないでよ!!」

左のジャブ二発で丁寧な距離を測った後の右ストレート。それらもすべてかわすことができず、アマテラスはストレートを右肩に受けてしまった。

「っ……」

いよいよアマテラスの身体から力が抜ける。動きが鈍くなる。

今度こそ十字架を使うときではないか。十字架を強く握り締めてみる。だが、アマテラスは何も言っていない。

もう和宏の挙動を意識する余裕さえなくなったからではないか？

(やるしかねえ!)

十字架をしっかりと握りしめ、魔力を込める。すると即座跳ね返ってくる。莫大な力の感触。その間にソルが、もはや動くこともできなくなった姉との距離を一気につめる。

動きそのものは特別速いというほどでもない。普通の人間の動態視力ならば目にもとまらなほどの速度なのだろうが、和宏の目には十分捕捉できていた。

すべきことを即座に頭の中でシミュレーションする。

間合いをつめ、ソルの真下にもぐりこむ形で踏み込んだ後、倒れ込みながら身体をひねって仰向けにしつつ、空めがけて攻撃。これならば、被害は最小限に抑えられるはずだ。

(よし、いくぞ！！)

地面を蹴り、ソルとの間合をつめる。ソルは大好きな姉に意識のすべてを集中させているようだ。和宏の接近はもとより姉以外の何にもまったく注意を払っていない。

ソルとの間にあつた二十メートルほどの距離が、一気に短縮される。

(よく見る、チャンスは一度きりだ！！)

ソルは和宏のことなど警戒していない。というか姉以外は眼中にない。だから一度に限り最高のタイミングで攻撃できる。そのチャンスを確実に活かさなければならぬ。一度失敗したらさすがソルも警戒する。またこちらの攻撃手段はこの十字架だけなのだ。

相手との間合い、タイミングを計る。せまりくるソルの動き、和宏の目には十分捕捉できる。何の格闘技の訓練をしたわけでもないのだから。動きそのものは大雑把だ。

(よし、いける！！)

確信を手に入れた状態で待つ、数瞬後ソルは和宏のそばを通り過ぎる。

その一瞬真下にもぐりこんで十字架の力を解放させる。

十字架は一度しか使えない。当たる当たらないに関係なく、一度きりの勝負。

近づけば近づくほどわかる。ソルにとって人間など、何億人束になろうとももの数ではない。

まして和宏一人など意識することさえアホらしい存在だ。

(その人間の意地つてやつを、見せてやるぜ！！)

その意地を見せるための手段が同じく太陽の化身に用意してもらったものだというのが少々情けなくもあるが、まあそこは気にしない。

残り五メートル。

(まだだ、もっとひきつけれ！！)

“まっつくだやうー！！”

「！？」

これからまさに動こうとする直前、頭の中に制止の声がかかった。

“あと三十秒待ってください。今そのまま十字架を使えば、ソルを倒すことはできません。”

ですが、ソルも防御に全力を振り絞ることになります。今の状態ではその余波を防ぐことができます。最低でも半径数十キロが消し飛んでしまいます！！”

(じゃあ、どうする？)

“近接戦闘の技術ならあなたのほうが上のはずです。力の無効化は私がやります。三十秒で結構です。足止めしてください！！ あなたならできます。あなたにしかできません！！”

その語尾と同時に、前方に見えていたアマテラスの姿が消えた。

そして背後で、少しだけ空気の動く気配。その直後、ソルが和宏の方を、いや、和宏の後ろにいる誰かを見ながら、こちらにつき進んでくる。

おそらく、アマテラスが和宏の背後に移動したのだろう。

和宏が時間を稼ぎやすい位置に、移動してくれたのだ。

「わかったよ。三十秒だからな！」

そういうと、和宏は腹をくくってソルとの間合いをつめにいく。

“ 少しでもお借りします!!! ”

頭の中で、その声が響くと同時に、和宏の身体が淡く光る。

「な!？」

それとともに、身体の内側からわきあがってくる力。

以前も身体が意図せず光ったことはある。だがそのときは、身体の中に入り込んだ災厄が、

和宏が二十年近く前から持っている力をおおっぴらに使えるようにするために光らせただけだ。

和宏の内面がどうになったわけではない。対して今は内側からあふれ出している。

十七年前から持つようになった力さえかすんで見えるほどの膨大な力が。

(でも、確かに言った)

だが、聞き間違いなどではない。そんなことあるはずなのに、確かに言った。

彼我、二メートル。

(細かいことは後だ!!!)

雑念を振り払うと、大きく振りかぶって、まずは右ストレートを顔面にぶち込む。

「!?! つ!?!」

拳が頬に直撃するまで、ソルはアマテラスだけを見ていた。その結果として、和宏の攻撃を

もろにもらってしまったソルは、吹き飛ばされて倒れこむ。

五メートルほど吹き飛ばされた勢いをそのまま利用して回転し、たちあがる。

立ち上がったところには、さすがに和宏を自分の行く手を阻む敵と認識していた。

「ふうん、役割分担、と」

それだけで、「なぜ?」とも「誰?」とも聞かずに、再度間合いをつめてくる。

今度は障害物ではなく、和宏個人を敵として認識している。

(速い!!!)

さつきアマテラスに掌打を打ち込んだように、小柄な身体を利用して接近戦を挑んでくる。

和宏の脇腹に掌打を打ち込もうとするソルの右手は、かすかに光っている。

これまでアマテラスに打ち込んだ攻撃にあってきた光。太陽の、核の力だ。

今は凝縮されている。しかし、解放されれば全てを消し飛ばす破壊の力。

(おいおいおいおいおいおいおいおいおいおいおいおいおいおいおい本気か!?)

人間一人殺すために核を使う。太陽の化身の力のすさまじさは嫌になるほど見た。

それでも、あまりに常軌を逸しすぎているため、現実として受け入れることができない。

和宏にわかるのは、自分と同じように光る拳を持つ少年が殴りかかっている。それだけ。

（速すぎはしねえ！！）

以前不気味なオブジェと化した災厄の放った攻撃のほうが、ずっと鋭く早い。

身体をひねりながら、こちらもカウンターになる形でソルの胸めがけて掌打を叩き込む。

掌がソルの胸に触れた瞬間、もう一度強く押す。

「っ！！」

ソルは再び押し戻され、そのまましりもちをつく。

そしてそのまますぐに起き上がった。別にショックでもない。ダメージを与えるつもりなど毛頭ない。相手との距離を広げることが第一に考えた。

とにかく、今はアマテラスの準備が終わるまで時間を稼ぐしかない。こちらはソルを倒すだけではだめなのだ。倒しても地球や人類が減んでしまっていてはどうにもならない。

「おい、まだか？」

小声でせかす。あまりに時間稼ぎが露骨になれば、ソルもなにか企みを疑いだすだろう。

“……もうすこし……はい、これで大丈夫です！！ 準備が整いました！！”

「わかった！」

そう返事をすると同時に、和宏から今度は間合いをつめる。

攻撃をできる環境は整った。あとは、攻撃を当てるだけだ。

それが難題だ。相手もこちらとほぼ同じ身体能力を持っている。不振な素振りを見せれば、最大級に警戒してくるだろう。消耗自体はアマテラスのほうがはるかに大きいのだ。この攻撃をはずしたりしたら、もうこちらにはソルを打倒するすべがない。

まず左のジャブでけん制。そのあと、右のアップパーを振りぬく。

「っ！！」

突然攻勢に転じたことに不意を突かれたのか、ソルはかなりギリギリで攻撃をかわす。

本当にギリギリだったのだろう。和宏のアップパーはソルの左こめかみをかすった。

かすった場所から少量の鮮血がほとぼり出る。ギリギリだろうとなんだろうと、アップパーをかわされた和宏としては、胴に決定的な隙を残してしまった。

「もらった！！」

勝利を確信してソルは左ストレートを放つ。

もともと頭二つ近く身長差があるため、本当なら顔面に突き刺さるはずのストレートが、胴体の中心部。みぞおちに打ち出される。頭なら首を少し動かすだけよけられることもある。だが、胴体は多少動いたくらいでは急所でなくとも被弾はさけられない。

振り上げてしまった右手を急停止させて、そのまま今来たルートを逆行させる。

ソルは和宏の腹に攻撃するモーションにはいつている。当たればカウンター、倍返しだ。だから、あらん限りの力を込める。拳ではなく、腹に。

（信じるからな。力の無効化はやってくれるんだろうな！）

祈るように念じながら、和宏は右腕を打ち下ろす。だが打ち下ろしはあたらない。ソルのこめかみをわずかにかするだけ。直後、腹部で何かが炸裂する。

「が……」

吹き飛ぶことすらできず。和宏はその場でひぎをつきがつくりと倒れこむ。

それができているということは、アマテラスが力の無効化をきちんとやってくれたのだろう。無効化されずにソルの一撃をまともに食らったら、和宏など消し飛ぶ。

本来ソルの身長は命と同じくらいだ。和宏より頭二つは背が低い。しかし、和宏の目の高さには、タンクトップを身につけたソルの胸があった。

和宏は、そのまま身体を横に倒れさせる。半分は事実として。

「残念だったね」

ソルは少し満足げ声でいうと、とどめもささず倒れた和宏の側を通り過ぎようとする。

その瞬間、すべてが見える。仰向けに倒れこんだ和宏の視界に、ソルの全身が。

（力よ、光弾となりー）

頭の中で詠唱しつつ、右手に力を込める。ソルを殴るための握力ではない。握りこんでいる十字架の力を引き出すために魔力を込める。

「――敵を消し去れ！！」

詠唱の完了とともに、仰向けに倒れた姿勢から右手を少しだけ翻した。

白い光をまとう十字架が、姉の下へかけようとしていたソルの鼻先に突き出される。

「??？」

倒れたはずの和宏が突然起き上がりて攻撃してきたなら、ソルも反応できたかもしれない。だが、なまじ速度も殺気もない光を帯びた十字架が鼻先に出現しただけだったので、ソルは防御や回避よりも先に、それが一体何なのかと考えてしまった。

その瞬間を、見逃さない。そのために、あえてカウンターを外した。

十字架が炸裂する。「フレア」よりも強力な白い光が、ソルを飲み込む。

「??？」  
く、あ、つうー！！」

白一色に染まった世界から、こぼれ出るように聞こえるソルのうめき声。

本当なら、和宏もこの光にともなう熱の余波の余波の余波の余波の余波くらいで跡形もなく蒸発しているはずだ。しかし、アマテラスがそれらすべてを中和しているおかげで、ソルが倒される瞬間を、普通ならありえない超至近距離で見ることができている。

「いやだ、負けられない。お姉ちゃんがこれ以上くるしむのを……僕は見ていられない！！」

まず、白い光の向こうから決意を込めた声。

「つ……あ……あく……あああああああああああああああああああつー！！」

絶叫。それとともに、和宏の身体を見えない何かで激しく叩く。

そして、白い幕の向こうから、薄ぼんやりと見え始めるようになる。ソルの姿が。

人間なら何が起こったかすら理解できずに消滅するしかないエネルギーの炸裂を、ソルは完全とまではいかにせよ耐え、こらえている。

「う……く……だめです、このままでは、完全には封じ込めません!!」

同じように辛そうな、切羽詰った声が、頭に直接聞こえてきた。

「なんだって？」

「ソルは思った以上に力を残していました。ソルは耐え切ります。そのあと、私にはもうソルを倒す力はありません」

アマテラスは弟を騙してまで二対一の状況を作った。なのにここで取り逃がせば、以後は警戒して常時もう一方の弟と一緒に行動するだろう。イコール地球破滅の可能性激増だ。

「で、俺にどうしろっていうんだ？」

正直聞くのが怖い。だが聞かないわけにはいかない。アマテラスがさっき言った「私にはもうソルを倒す力はありません」は、打つ手が全くなくなるという意味ではない。それならわざわざ言う必要がない。だから、和宏が何かを決断すれば、まだ手はあるはずだ。

「これからソルの抵抗による余波を一部無効化せずに余力を残せば、ソルを倒せます」

「一部無効化をしなかったら、どうなる？」

「この国が消滅します。今後発行される世界地図に、日本列島は描かれません」

「あっそ」

冗談だと思っていた。だが、これまでに見せ付けられた数々が、冗談だと思わせてくれない。

「いかがいたしますか？ このまま全ての無効化処理を続けますか？ それとも、ソルを倒すために一部力を温存してかまいませんか？」

「C……」

とんでもない選択を突きつけられて、全身が凍りつく。

(……アマテラスに余力を残せといえは、俺は死ぬ)

それは絶対の、確定した事実。破滅を意識した瞬間、頭の中を何が走りぬけた。

単なる頭痛などではない。二度だけ、以前にも同じようなものを経験したからわかる。

絶対に変えようがないといわれている未来を、否定なく頭の中にねじ込まれ見せ付けられたときのあの感触。ただし、何から何から同じではない。

結局あの未来図は、災厄たる命が、無意識に自分で作っていたものだった。対してこれこそは、本当の、本物の未来図。だから違う。同じではありえない。

そんなものを見る心当たりも多少はある。SFだったかもしれない。その本はいつていた。恒星が死して残すモノ、そしてその先にある可能性について。

だからこれは本物だ。今一瞬頭の中をよぎった、日本列島が一瞬にして消滅するのをほるか高い位置から見下ろしている映像は、紛れもなく本物だ。

その映像が、連鎖して頭の中にいくつもの映像を映し出す。こちらは、さっきの未来図では

ない。一つのありえる未来図を引き金に、時野和宏が想像したものだ。

弓子が、ところが、高原が、早苗が、美由が、命が、その他今までに知り合ってきた、世話になってきた人たちが、一瞬にして跡形もなく完全に消滅する。

（今取り逃がしたからって完全に手詰まりってわけじゃねえ！！）

確かに騙してまで誘き出して取り逃がせば、今後はいよいよ厳しくなるだろう。だが、それで完全に打つ手がなくなるわけではない。そのはずだ。

（一体どこの誰が、自分や親しい相手を全員死なせてまで赤の他人を守るってんだ！！）

と、そう考えて思いつく。目の前のアマテラスこそは、その自分や親しい相手を全員死なせてまで、ぜんぜん関係ないものたちを守ろうとしている存在ではないか。

そもそも今絶滅したところで何一つ困らない存在のために、弟たちが力づくでも休ませようとするほど身を削っている。あげくそうして心配してくれた弟の一方を騙して誘き出し、そのために恨まれてでも地球を守ろうとしているではないか。それに対して自分はどうか？

「くーーーーー」

約一億四千万と七十五億。大小の比較を誤ることなど、子供でもありえない。

だが、残りの約七十三億六千万の中に、和宏が知っている人間はまずいない。一億四千万の中に、和宏が知っている和宏の大切な人間はほとんどすべてしている。

“止めていられる時間は長くありません。はやめに決断してください”

「……このまま何も言わなかったらどうする？」

そう聞きたい誘惑をこらえきる。それでもし「日本見殺し」といわれたらどうするのか。痛感する。選択の自由があるというのも時によりけりだ。

「……アマテラス、このまま無効化を続けてくれ！！」

“かしこまりました”

「あ……ああ……あああああああああああああああああああ……！！」  
そのまま絶叫を最後に、再び白が収束した。さっきソルが「フレア」を撃つたあとと同じように、新宿の駅前大通に帰還する。

しかし、いろいろな点で「フレア」を撃つたあととは違っていた。最大のポイントはソルの外見だろう。そこにいるソルはボロボロだった。もともと季節はずれの暑さにあわせて薄着だったこともあり、衣服はほとんどが吹き飛んでいる。身体もそこらじゅうにやけどのあとがあり、また出血も多い。立っているのが精一杯と言いたげに足もふらついている。

アマテラスに一目みてわかる負傷はない。だが両手両膝をつき、激しく身体を揺らしている。それは、あたかもアマテラスがソルに対して土下座して謝っているようでもあった。

「お姉ちゃんは、本当に優しくすぎるよ……」

自分自身がかかり負傷しているというのに、まずソルが言ったことはそれだった。



「っ……っ……っ……」

その言葉が最後の衝撃になったとわんばかりに、アマテラスは倒れこんでしまう。

「……本当ならこのまま連れて帰りたいところだけど、僕にもそんな力はない。ここは一旦引き上げさせてもらうよ。次からは、お兄ちゃんとずっと一緒に行動する。降参するなら早めにしたほうがいいよ。それじゃあね」

そういうと、ソルは身体を中に浮かばせて、そのままどこかへと消えた。

「……くそっ……!」

慌ててそのソルを追いかけようとしてから、苛立ちを込めてはき捨てる。

ソルが弱っているというのは、本来の状態と比較しての話。瀕死の重傷を負った外見に騙されてはいけない。意識さえあれば、いとも簡単に極大魔力弾クラスの攻撃を放つことが可能。人間が立ち向かってできることなど絶無。それが太陽の化身なのだから。

「おい、大丈夫か!？」

とりあえず、今和宏にできることは、倒れたアマテラスを気遣うことくらいしかない。

「ええ、大丈夫です。しばらく休めば……すぐに回復します。私の恒星としての寿命は五億年ほど縮まってしまいましたが、皆さんには関係ないでしょう。私の寿命が五億年縮まろうと、それまでに間違いなく皆様の歴史は終わっているでしょうから」

後半の言葉、冗談として笑えばいいのかどうか、和宏にはわからない。

「っ……」

アマテラスの冗談で気が抜けた瞬間を見計らって、めまいが襲う。

急速に眠気が忍び寄ってくる。ごく短時間とはいえ、アマテラスの力を借りたのだ。人間の身体には大きすぎる力だったのだろう。そのツケが回ってきたのだ。

これはその前兆。十七年前、自分で望んだわけでもなく力を持ったときからある副作用。過剰な消耗のあとに襲ってくる、自分の意思では拒めない眠り。数分以内に取り込まれる。

(そのはずだ、あれはアマテラスのいい間違いのはずだ)

和宏が自分へ言い聞かせている間にアマテラスは少し息を整えて、言った。

「私は大丈夫です。それよりも、東京大学上野キャンパスへお急ぎください」

東大上野キャンパス、今日は姉が持ち回りの当番で美由たちの立会いをしている場所。

「力よ、空を駆ける翼となれ!!」

そう叫んで浮上し、方向を見定めると、和宏は全速力で移動し始めた。

途中で眠りに取り込まれ墜落することなど考えない。もう一度姉を失うことなど、それこそ絶対にあってはならないことだったから。

「……うーん、これはだめ、かな。ランク外。次、お願いします」

彼女のその要求は即座実行に移される。別の魔力物質候補の品が、台車に乗せられて播磨美由の前に運ばれてきた。

「……これはなかなかいいかな。ランクはB。はい、次お願いします」

それを手にとって数分間、ぺたと触ったり、額に当てて眼をつむったりしたあと、鑑定を告げてまた台車の上に乗せる。そしてまた彼女は、これまでと同じように次を要求する。

その言葉を受けて次の候補が来る前に、戸田弓子は言葉で割って入った。

「いいえ、次の前にまたしばらく休憩ですね。今ので通算二百個めです」

それを聞いた美由は、一度軽くため息を吐き出した後、

「あ、そうですか、わかりました」

しゅしゅと近くにある椅子に腰を下ろす。ほんとうにしゅしゅだ。何度何度も腕時計を見て、休憩の十分がさつさと終わることを待ち望んでいる。

軽く苦笑すると、戸田弓子は一旦東京大学上野キャンパスの特別実験場特別実験場を出て、通路に設置してあった自動販売機からあったかいお茶を二つ購入した。

今日は四月二十二日。曆的には昼間にあったかい飲み物を飲んでも全然おかしくない。

缶二つを持って実験場にもどると、やっぱり美由が何度も腕時計を見続けていた。

「はい、どうぞ。しゃべり通しですし、喉も乾いたのでしよう」

そういって、あったかいお茶を美由の前に差し出す。

「あ、どうも」

そういって缶を受け取った美由は、ちよつと驚いていた。この特別実験場内自体は冷房が適度に効いているため、暑さや寒さを感じることはない。だが、頭と身体の両方で、ここ数日の季節はずれの暑さを感じている。熱いのみものには少々抵抗があるのだろう。

「暑いときこそ熱いものをゆっくり時間をかけて飲む。古典ですけど、耐暑法としては結構優秀ですよ。生理学的医学的な根拠もそれなりにあります」

「いただきます」

さすがに突っ返すもの悪いと思ったのか、美由はタブをあけてお茶に口をつけた。

瑞々しい喉が小さく何度か動き、缶の中身が美由の体内に取り込まれていく。少し飲み終えたところで、美由は大きく息を吐き出した。

「あせる気持ちはわかります。ですが、根につめても必ず結果が伴うとは限りません。休むときは休む。それも結果を残すためには重要なことです」

「はい、でも……やっぱりあたし……」

頭では理解できても、感情では納得できません。そういいたいのがよくわかった。

アマテラスによって魔力物質候補の品々が使いきりの魔力物質に昇格して以来、美由はずつと鑑定を続けていた。アマテラスによって昇格した候補の品物十点は、すべて美由や命によつ

て「力がある(かも)」と鑑定された品物たちだったからだ。

味方も太陽の化身なら、敵も太陽の化身。武器はたくさんあるにこしたことはない。そういうわけで、美由は魔術捜査官たちが回収してきた品物の鑑定にあたっている。

ただならない熱心さで取り組んでいる。放っておくといつまでも休憩しない。実際一度軽いめまいまで起こした。そこで立会いの魔術捜査官が、場合によっては少々力づくでも一時間に十分ずつ休憩を取らせることになった。そして今日は戸田弓子が立会う日である。

また、美由が腕時計を見る。それで時間の流れ方が速くなるわけでもないのに。

「そんなに神崎君のことが気になりますか？」

「あんなふうにはひどい怪我して、『完全回復する見込みは正直高くない』って言われていて、あげくまだ意識さえもどつてないんですよ。心配にきまつてるじゃないですか」

アマテラスが出現した日突然倒れた神崎少年は、美由が言うとおりにまだ意識が回復していない。めどもたつていない。また、仮に意識を回復したとしても、全身が神経に至るまで激しく傷ついてしまったため、身体がかつてと同じ機能を取り戻す見込みはかなり低い、「率直に言つてゼロではないがゼロから数えたほうが速い」ということだった。

「あたしは医者でもないし、命を一生看病するお金もない。もうこれしかないんです」

「魔力物質の力で彼を回復させる、ですか」

声に出しては何も答えない。だが、強い決意を込めた目がイエスと返事していた。

たくさんの魔力物質が発見されれば、それらを使って研究も進むだろう。早晚実用化するかもしれない。自分の右手と右足を復活させたような治癒も。それに賭ける、と。

だが、それだけではないだろう。美由が鑑定に精力的なのは、アマテラスへの敵討ちという意味合いがあると思われた。意識さえない状況で、命は「嘘」「隠す」といった言葉を繰り返している。倒れるまでの経緯を考えれば、アマテラスがらみのことなのは確実だった。

事実はわからない。だが、美由はアマテラスが命を傷つけたと思っている。

「せいぜい彼とあつてせいぜい一ヶ月くらいでしょう？ それなのにこんなにも想いを寄せられるとは、彼はああ見えて実は結構ブレイボーイだったんですね」

美由と命は、一ヶ月ほど前高原が、「境遇が重なるもの同士、話も合うと思う」といって引き合わせたはずだ。

「そ、そんなんじゃないです!!」

この上なく強く反論する。それがすでに答えだった。

顔を真っ赤にしたまま、美由は黙り込んでしまう。初々しくてほほえましい。

「見た目とかは子供だけど、中身は最低二十歳だから、根っこですごい落ち着いてるし、精神的にも強くて、今も妹を取り戻すためにすごい勉強してるみたいだし……そういうところにあこがれたりしてるけど、やっぱりそれだけで、別に好きとかそういう感情は……」

「じゃあ相手が告白してきても、『恋愛対象とは見ていない』ときっぱり断るんですねっ」

「え、いえ!! 別にそういうわけじゃなくて……その……その場合は別にその……」  
 「どうしました。顔が赤いですよ?」

「こ、これは……! い、今が季節はずれに暑いから!!」

「この部屋の空調は完璧です。常時二十四度に保たれているはずですが」

「じゃ、じゃあ、……そう、今飲んだこのお茶のせい!!」

「そうですか。まあ、そーゆーことになっておきましょーか」

「……」

格とつか実力の差をさまざまと感じたのだろう。美由はまっかなままうつぶいて、そのままだまりこんでしまった。

「あ、それからー」

「なんですか!?! 私は別に命のことを好きだなんてー」

「がー、と食いかからんばかりの勢いだ。」

「もう休憩時間を五分もすぎています。鑑定に戻らなくていいのですか?」

「う、あ、そ、そういうことはもっと早く言ってください!! 次、お願いします!!」

さらに顔を真っ赤にしたまま、美由はほとんど八つ当たり気味に研究員たちへ次の魔力物質候補を持つてくるように要求する。

こうして鑑定が再開されるこの場に、高原とその妻早苗 ラフ・ジエネサイダー 恋愛殺戮者コンビの姿はない。周囲の間人を発狂させかねない熱々つぷりを評して弓子がつけた呼び名だ。

個人的には胡散臭いショープロスラーっばさの漂うこちらを気になっているのだが、周囲にはその少し前に言った「DIE恋愛コンビ」のほう为好評だったようで少し残念である。

ともあれ、高原たちはこの特別実験場だけでなく東京大学上野キャンパス自体にいない。彼らはそれぞれの人脈や名声を利用して、魔力物質候補の品物の回収にあたっている。

名高き神社の秘宝を国家権力キョクが強く言って「借り受け」たりしたら、「国家による宗教弾圧」とか大騒ぎされる。だからそうした品物は高原が借りてくる。ノーベル賞学者にして政治家でもある高原は言うに及ばず。早苗も実家が宗教界ではかなりの名門らしく、世俗の権威が手を出せない領域にもかなりのところまで踏み込めるそうだ。

「これは……論外。次、お願いします」

再度鑑定にかかった美由は、数分間で冷酷なまでの鑑定を下していく。それから数時間かけて、今特別実験場に用意された魔力物質候補三百七十二点すべての鑑定が完了した。

「お疲れ様でした。それではそろそろ引き上げましょうか」

「……はこ」

美由も素直に言葉に従う。「まだあるのに隠したりしてませんか?」と、聞いてきたりしない。

直接身体を動かさずとも、精神を集中させることはかなり消耗する作業なのである。

「すいません、ちょっと顔をあらってきます」

目を何度かこすりつつ、美由はトイレへむかっていく。

「さて、と」

その間に、弓子は弓子で部屋の隅においておいた鞆を取りに行く。

弓子の鞆は、今の背広姿にはあまり似つかわしくないスポーツバッグである。

そのバッグを持ったまま、ある椅子の前までもどり、その前で身体をかがめる。

椅子には人は座っていない。かわりに、大きな王将のコマがあった。

高さ幅ともに三十センチ以上、厚さも十センチ以上ある。もしこれで将棋をやろうと思ったら、将棋板はボクシングのリングサイズになるだろう。これはコマの置物だ。

それを両手で持って、スポーツバッグの中に入れる。この置物を持ち運ぶために、背広姿にふさわしくないスポーツバッグが必要だった。

五キロ近い重量は苦痛でもない。戸田弓子も十七年前から人間の限界を超えた力を持っている。しかし趣味で持ち歩いているわけではない。これも和宏の十字架同様、アマテラスによって魔力物質候補から魔力物質へ格上げされた品物の一つだからだ。

十個のすべてが十字架のように、持ち歩きやすい形状をしているわけではない。中にはこの将棋のコマの置物のように、おせじにも持ち運びに適さないものもあった。

それら十個のなかで一番小さく携帯に適していたのが十字架だ。それはアマテラスが弟たちと戦う場に居合わせる可能性も高い和宏に与えられた。対してこのコマは特定の誰かではなく、東大上野キャンパスの特別実験場に立ち会うものが交代で所持する。

その巨大なコマをスポーツバッグに入れると、まるで中には何もはいついていないかのように軽々と持ち上げる。非力な置き引き犯では、強奪した瞬間肩が抜けるかもしれない。

「すいません。お待たせしました」

そのタイミングで、美由がもどってくる。顔をあらって多少はさっぱりしたようだ。

「では、行きますか」

「はい」

そうして、二人して特別実験場を出ようとしたときだった。美由が足を止めた。あたりには足を止める理由となりそうなものはない。なのに、いきなり。

「どうかー」

しましたか、といいきる前に、弓子も理解する。あの日、アマテラスが現れたときにくらべればはるかに小さい。しかし根のところで通じる雰囲気をもった、この周囲数キロくらいは簡単に吹き飛ばしうる力が、何の前触れもなく出現したのだ。

距離は至近。おそらくはこの特別実験場の中。そういうものがいきなり出現する根拠もある。

ここには、魔力物質かもしれないモノが無数集められ、保管されているのだ。

「播磨さん、あなたはこの場から離れて！」

「え、でも……」

「はやく、離れなさい！！」

「その前に……」

「はやく！」

「あの……」

「早く離れなさいといったのです！」

「聞いてください！！！！」

美由は弓子の迫力に負けないため、あらん限りの声をはりあげたようだ。かなりの声量だった。ちよつと耳がきーんとする。

「聞いてください。ついさっきどこかで、何かすごいことが始まりました。たぶんアマテラスが弟と戦い始めてるんです。いきなりこんなことになったのも、きっとその影響です」

「……そうですか、わかりました」

その言葉で、自分も少し取り乱していたことを自覚する。

またそうした異変を感じする能力は、自分より美由のほうが高いことも判明する。弓子にはこの場にいきなり出現した魔力物質の気配に気づくことしかできなかった。

「では、できるだけ早くこの場から離れてください。いいですね？」

「はい、戸田さんも、気をつけて」

そういうと、美由はもう振り返ることもなくこの場を去ろうとする。

「命、お願いだから無事でいて！」

そんな、絞り出す声がかすかに聞こえた。美由に気がつけることなら、命はもっと詳細に異変を感じ取れている。今の命にはかなりの負担になっているだろう。

（しかし、となると、やはりアマテラスは魔力物質にかかわる存在？）

自分自身の口では「四月十九日の異変は何の影響もない」といつていた。だが、魔力物質によつて一命を取り留めたというか取り戻した美由がこうも鋭く反応をしているくらいなら、やはりアマテラスは魔力物質に深く関係した存在ではないか。

頭を軽く振って当座不要な疑問を追い払い、気配が強くなる方向へ走っていく。すると、ま

ずはすぐにさつき美由が鑑定作業を行っていた特別実験場にたどり着いた。

そのまま開けっ放しになっているドアへ進む。

ドアを開けた先には、何人かの白衣姿の研究員がへたり込んでいる。

倉庫のような部屋だ。美由によって見込みがあると鑑定されたものたちはここに保管され、後日行われるより徹底的な検査を待つのだろう。

古今東西を問わないさまざまな工芸品美術品装飾品が四十個ほど並んでいる。

その中のどれが覚醒したのかすぐにわかった。ほぼ正面にある高さ三十センチくらいの木彫

りの仏像がそれだ。いかにも仏像らしい笑みを浮かべつつ、うす淡く光っている。

弓子は、へたり込んでいた研究員の一人の頬をやや強く叩く。

「大丈夫ですか？ 立ってますか？」

「……あ、はい。大丈夫です」

「この場は危険です。彼らと一緒にできるだけ遠くへ避難してください」

「わかりました。おい、しっかりしろ！！」

弓子に頬を叩かれた彼は、他二人を揺さぶって呼びかけ、正気に戻す。

その三人に向かって、弓子は問う。

「二つだけ教えてください。何をすればこの状況を打開できるか、考え付きますか？」

問われた彼らは、すまなそうに頭を振るだけ。

無理もない。この場に高原政人がいても、結果は多分同じだろう。

「くれぐれも周りに、逃げろなどとは言わないようお願いします」

強く念を押す。当の研究員に逃げろと指示しておいてこれは明らかに矛盾だが、仕方ない。

半端に「危ないから逃げろ」などわめきちらしても、ただ混乱が加速するだけだ。

今度は一度だけ縦に首を振ると、三人はすぐにこの場から姿を消した。

「さて、どうしたものかしらね」

今も淡く光り続ける仏像を見ながら、考える。

下手につつかないほうがいいのか、あるいは放置しておくことが危険なのか。

正解などない。あるのは被害を防げたかどうかという結果だけ。どれだけ真剣に考えようと、

被害が出たらそれはまちがいがい。轟々たる誹謗の嵐。逆にコイントスとかで何も考えず決めようと、被害を防ぐことができたなら、それは正しい。降り注ぐ賞賛。

「面白いことになってきたじゃない」

不敵に笑う。ここで笑えないようなら、このまま警察官を続けていたほうがいい。戸田弓子

が目指す政治の世界も、きつとこんな感じの、正解などない議論ばかりなのだから。

不幸がおきてから防ぐことではなく、不幸を起ささないようにする。それを最大の範囲で行

うために最適な職業は政治家だと思った。今警察官をしているのは、その世界に足を踏み入れ

る前に、「不幸が起きてから防ぐこと」を知っておくべきだとおもったから。

ゆっくりと仏像の前に歩み寄り、何が起ころうともいいように万全の備えをしつつ、仏像に触

つてみる。だが何も触らない。触るものはことごとく殺し壊すような危険性はないようだ。

放置か、さもなければ、先手を取って破壊か？ 判断が揺れる。

有力な情報は何もない。それでも決めなければならぬ。政治の世界は多分こんなことばか

り。不十分な情報だけを頼りに決断するなど、いくらでもあるだろう。

そんな状況を先取りで経験できているのだと思うと、なんだかわくわくしている。

(まったく、私は何のために政治家になりたいのかしらね)

ひよっとしたら、戸田弓子が政治の世界を目指しているのは、最大の範囲で不幸を防ぐためではなく、最大の規模で伸るか反るかのばくちをやり続けたいだけなのか。

一度、深呼吸。雑念はすべて追い払う。

決断。即破壊。

このまま放っておいたらいずれ仏像は暴走して周囲を跡形もなく破壊するだろう。だから、そうなる前にこの即席魔力物質で跡形もなく消し去る。

両腕でしっかりと将棋のコマを持ち、仏像の前に向けて突き出す。正直かなり、いや、相当間抜けな構図だ。他人がやっているところを何かの拍子で自分が目撃したら、声をかけるか医者を呼ぶか深刻に迷いそうな気がする。新手の宗教儀式？ とか思うかもしれない。

駒を強く握る。魔力を流し込む。

「力よ、壁となりー」

詠唱の間にも弓子の魔力を起爆剤として、大きな王将のコマが仏像と同じく淡い光を帯びる。それで、弓子は自分の判断が間違っていないことを確信する。

コマに魔力を流し込み、発動させてわかった。この仏像も、将棋のコマと同じレベルの力を持っている。しかも、アマテラスによって作られたコマほど、仏像の方は安定していない。何かの拍子にいつ暴走してもおかしくない状況だ。

「――敵を――」

そう、コレは敵。弓子たちの命と安全を脅かす危険要素。

「――包め――」

その命令を巨大な将棋のコマは忠実に実行した。コマはさらに光を強める。

その光は通常の光のように全方向へ拡散したりはしない。弓子の意思のままに仏像めがけてのびていく。そして淡く光る幕をつくり、仏像を包み込んだ。

「……結構、負担も大きいみたいね……」

アマテラスが作った即席魔力物質は十個。いきなり実戦で使うのは危険すぎる。だから一つ試しに使っている。責任者として弓子が直径二百メートルほどの極大防壁を展開させた。

そのときはこんな風に負担など感じなかった。だが、今はもうかなり消耗している。

どうやら、アマテラスが作った即席魔力物質で展開する防壁は、数百メートル単位での使用が標準のようだ。高さ数十センチの仏像の周辺だけを囲むような使い方は、本来予定されていないのだろう。負担はそのためと思われた。

「……あとは……このまま……っ」

防壁の範囲を狭めて押しつぶす。魔力弾にくらべて手間がかかるかわりに、周囲への被害を消すことができる。元々は、命を意図的に暴走させて殺すために考えられた方法だ。

意識と身体に広がる消耗感に抵抗しながら、将棋のコマに込める力と魔力を強める。

光が収束し、いよいよ仏像に触れようとするとき、仏像が炸裂した。



「!?!」

猛烈な反動がコマを持っている両腕を通して、弓子の全身に伝わる。仏像から放たれるエネルギーが、弓子が展開した防壁を押し破って、そのままこの場一帯を破壊しようとする。

それに抵抗して、手の力を強める。

弓子がコマを介して操る力と仏像が放つ力は一進一退。いや、やや弓子の力が押している。

(でも、それくらいじゃだめね)

九十九パーセントシャットアウトしても、残りの一パーセントで何百人以上の命を簡単に奪う。魔力物質とはそういうもの。

持久戦になったらこちらが不利。人間の弓子は、疲労や消耗と無縁ではいられない。

小さく、深く息を吸い、吐き出す。それを繰り返すこと数度。

「せーのっ」

両手に力を込める。

「——つぶれなさい!!!」

ありつたけの魔力をコマに注ぎ込みながら、宣言。

弓子の魔力が、さらに一挙コマへと流れ込む。

コマが放つ光はさらに強くなり、仏像へと注がれ、押しつぶしにかかる。

より強まった光に、思わず弓子は目を閉じかける。

しかし、完全に目を閉じてしまうわけにはいかない。

まだ、終わってはいないのだ。

そして光に飲み込まれかけていたアルカイックスマイルに、かすかな亀裂。

亀裂と同時に、仏像の中からさらにあふれ出す白い光。

弓子は即座に理解する。

これが、最後の足掻き。

「っ!!!」

腕に全身に走る、中から引き裂かれるような痛み。

しかし止めるわけにはいかない。止めれば、自分も周囲も死ぬしかない。

「う、く……はあぁっ!!!」

残された体力と気力と魔力をすべてコマにつき込む。

ばっん!!!

何かはじけるような音が自分の内側から聞こえた気が、した。

頭の中で、弾ける音がまだ続いているうちに、弓子の体から力が抜けていく。

「よか……った……」

へたり込みながら、呟く。とりあえず周囲に被害はなさそうだ。

安堵感が、意識をくらませる。このまま寝てしまいたい誘惑に強くかられる。

両手で頬をやや強く叩き、頭を何度も振って眠気と眠気に流される自分を追い払う。報告しなければならぬことが山ほどある。それが終わるまで眠るわけにはいかない。ゆっくり特別実験場の通路を歩いていくと、出口の前あたりで見知った顔に遭遇した。

「……姉……さん……」

血の繋がらない弟。時野和宏が、目を細め辛そうな表情でこちらを見ている。

服装は少し乱れているだけで、特に血や土による汚れはない。だが、顔全体を埋め尽くす疲労からすぐわかった。アマテラスは弟と戦った。その場で和宏も何かをした。そのため弟は、今はもう意志の力では拒むことができない眠りの直前だ。

「……よかった……」

こちらの姿に特別な外傷がないことを確認すると、和宏はその場で崩れ落ちる。

近くの壁に身体を預ける余裕さえなくその場で。このままだと顔面を床に叩きつける。

だから弓子が疲労した身体を突き動かして、受け止める。

そのとき、和宏はすでに眠っていた。

「……こうなることはわかってたでしょうに。だったら大人しくその場で寝ときなさい」

聞こえないことはわかっている。それでも言う。

和宏が極度に消耗した後落ちる眠りは、とてつもなく深い。

一度寝たら自然覚醒前に意識だけ目覚めることなどない。本当に、どうやっても。

子供のころ、この眠りが怖くて仕方がなかった和宏に、「どんな方法を使ってもいいから起こして」と懇願され、本当はかなり極端な方法を使った。大人立会いのもと、十五分近く逆さづりにするなど拷問に近い方法さえ使ってみた。それでも、和宏は目覚めなかったのだ。

普通にこうしている限りはただの深い眠り。しかしその中身は「自然に目覚めるまでは何があっても眠った状態を保つ強制力」だと思っている。試せるわけがない。だが仮に殺す気で攻撃しても、きっと和宏は平然と眠ったままだろう。和宏は知らない事実だ。

和宏には、弓子にも他の誰にもない何かある。

知らずにいられるならそのままでいたほうがいいと思っていた。

しかし、このままならいつかは知ることとなるかもしれない。

「ごめんなさい、膝枕はもう少しお預けね、和ちゃん」

微笑みながら言う。なんだか久しぶりだった。

五 神の敵は神

熱い。熱すぎる。

「あう~~」

四月中旬にはありえない強烈な日差しの下、池袋の街を松永心は歩いていた。

アマテラスの監視兼道案内を勤める時野和宏がソルと遭遇してから五日、相変わらず関東地方は季節外れの猛暑に襲われていた。じりじりと照りつける日差しは紛れもない真夏のもの。加えて歩いているのは熱を蓄えて反射するアスファルト。むせ返る暑さが一層体力を奪う。

ぐて—————

後頭部のしつぽも動きがないのがわかる。真夏の日差しに耐えかねて、ただただこころの歩きにあわせてかすかに揺れるばかりだ。ばてている。日陰でぐったり寝そべる犬のように。

「ぐ~~~~~にや~~~~~ぐ~~~~~にや~~~~~ぐ~~~~~だあ~~~~~ぐ~~~~~ぐ~~~~~ぐ~~~~~」

目に見えるものすべてが歪んでいるのは、自分の意識がくらんでいるからなのか、あるいは猛暑による陽炎のゆえか、あるいはその両方か。

そんななか、大きなビルの壁面に設置された電光掲示板だけが嫌にはつきり見える。

さまざまなニュースの合間に、表示される現在の気温、実に三十九・七度。

「うなああああああああああああああああああああ」

知ったからといって暑さが変化するわけではない。だが情報は気力を根こそぎこっそり容赦なく。ぺんぺん草も生えないほど奪い取っていく。

体温計で表示されたら病院に強制連行される数字だ。それが自分の体にまとわりついている。

この暑さが日常の普通の地域に生まれてなければ、相当きつい。

「みいいいいいいいずううううううう」

茹で上がってしまいそうな意識を総動員して水道あるいは自動販売機を探す。

すぐに発見した。白い身体に青いロゴをかかれた鉄の塊が、この上なく涼しげに見えた。

すでに何人が並んでいる。この暑さだ。当然だろう。

背広姿の男性の後ろに、通算六人目として並ぶ。誰もが冷たい一口に飢えている。次々と硬貨を投じてボタンを押していく。あれこれ悩んだりする人間は一人もいない。

そして、目の前の背広の男性まで順番が回ってきたところで、こころは見えてしまった。

売り切れ 売り切れ 売り切れ 売り切れ 売り切れ 売り切れ 売り切れ 売り切れ 売り切れ  
り切れ 売り切れ 売り切れ 売り切れ 売り切れ 売り切れ 売り切れ 売り切れ 売り切れ

燦然とならぶ赤い光。すでにことごとく売り切れた。まだ赤く光っていないボタンはもはや一つだけ。前に並んでいた人たちも、考えたり悩んだりする余地はなかったのだ。

(まさか、まさか、そんなことないよね？ そんなことないよね？ ね？)

一度意識してしまくと、とたんに不安になってくる。まさか、私の目の前で、この人で。

前にいた男性が、あまり聞いたことがないメーカーの麦茶のボタンを押した。  
ごめん

彼は身体をかがめて自分が購入したものを取り出して販売機のまえから立ち去る。  
まだ、麦茶のボタンは悪魔の赤い光をともししていない。

すでに準備は万端。右手に握りこんだ百三十円をすばやく投入口へ入れる。

かたん かたん かたん かたん

ボタンを押すよりも早く、何か堅いものがあたる音が聞こえた。

同じような経験は以前にもあった。つり銭がない自動販売機につり銭が出る金額を投入すると、受け付けられずにそのままつり銭取立ち口へ落ちてくるのである。

しかし、今ところは丁度百三十円を入れた。つりはない。ならば――

「ふにやあああああああああああああああああああああああああああああああ」

さつきまでついていなかったはずの赤ランプがなぜか今更煌々と点灯している。

がつくりとひざをついた自分の背後で、遠ざかる足音がいくつか聞こえる。全品売り切れを理解して、ころろのうしろに並んでいた面々が立ち去っているのだろう。

わしわしわしわしわし

そんななか、何かが自分の頭を何度も撫でる。人の手にはない、細いものを束ねたかのような感触。他の人はあまりもっていない自分の一部分が、なぐさめてくれている。

なんとかか足に力を入れて立ち上がると、ころろはまた歩き出す。

ここは世界に誇る魔術大国日本の首都東京。自動販売機などそれこそそこらじゅうにある。

だが、それらを見てももうなんか怖くて近づく気になれなかった。

（そのほうがいいよね、あんまり水分取るとばてるっていうし。うん）

そう気持ちを切り替えて、またころろは当面の仕事に集中してあたりを歩く。

右腕にはめた魔力感知の魔術製品が震える場所をもとめてあちこちを歩き回る。

アマテラスとソルの戦いから五日、今日もころろは魔力物質候補の品探しを続けている。

弟達一人一人と戦えば勝てる。だが、二人まとめて相手にしたらまず勝てない。だから、五日間、騙して片方だけを誘き出したあの戦いは、絶対勝たねばならない一戦だった。

しかし、勝てなかった。以後弟たちはまず単独行動しないだろう。

だから、次の戦いまでに、少しでも多くの魔力物質（候補）を探し出してアマテラスに加工してもらい、戦力を増強しておかなければならない。

「いい加減、都内のめぼしいものは探し尽くしちゃったのかなあ」

自動販売機を相手に（一人で勝手に）痛恨の敗戦を喫してから一時間、さらに暑さを我慢して歩き回るもの、これといって新発見はない。

第二分室が発足したあとしばらくは、長くとも一時間に一個は見つかった。多いときなど一つの古美術商に二つあり、しかも合計二万円程度で購入できたことさえある。

だが、さすがに都内はあらかた探してしまつたようで、全然反応がない。

今日の収穫は、午前中に見つけたガラスの花瓶だけ。

少し日が傾いてくる。風も少し吹き始めて、多少快適な環境になりはじめていた。

「うん、がんばろっ！」

気合を入れなおす。自分を削つても地球のために戦い続けたアマテラス。そして、力を絞りつくして東大上野キャンパスを消滅の危機から救い上げた戸田弓子。後者は軽い過労で済みすでに職場復帰しているが、前者は浅くないダメージを負い、今もその身を休めている。その分まで自分ががんばらないといけない。暑いくらいでへこたれてはいられない。

軽く伸びをして、未探索エリアへと踏み込もうとしたときだった。

不意に足を止められた。目の前からゆっくりとこちらへ歩いてくるその姿に。

季節はずれの暑さに備えてか、半そでシャツとカーゴパンツと実に涼しげな格好だ。そして、その肌の色は褐色だった。日本人が夏に海へいったりして持つ褐色ではない。今が雪の舞い散る真冬だろうと、彼の肌は同じように褐色だろう。親から受け継いだ褐色だ。

「……っ」

一度頭を振り、そのあと失礼にならないようにもう一度その若者を凝視する。

身長は和宏と同じで百七十半ばくらい。体重もほぼ同じ感じがする。余計な贅肉もなく、普段から何か運動でもしていることをうかがわせた。

髪も肌と同じく茶色がかつた褐色。日本でもよくみかける、もともとそうでなかつた髪を人工的に変色させた褐色ではない。ごく自然な茶褐色。

(それだけ、だよな?)

どれだけ見ても、それだけだ。ここは魔力大国日本の首都東京。そのなかでも中心の一つとすべき街池袋。外国人くらいいくらでもいる。現在の視界にも、墨のように黒い肌をもつた女性や、季節はずれの日差しで本当なら白い肌を赤くしている男性などがある。

彼らは簡単に見過ぐすことができる。だがこの若者だけは見過ぐせない。目を離せない。

それまでどこを見るとなく歩いていた若者が、やおらこちらを見た。

単なる偶然ではない。明らかに目があつた。

「あ……」

思わず目をそらしてしまう。

「わ、わわわわわ……」

そらしてから、あまりにも拙い反応をしてしまったことにすこぶる慌てる。

こういう場合はゆっくり目をそらすか、「何ですか一体?」といわんばかりに睨み返して、相手に目を背けさせるのが正解。尾行術の一部として頭と身体に叩き込まれている。しかし、できなかつた。こちらを見たのが、この若者であつたがために。

若者の足に力が加わる。別に歩を早めたわけではない。だが、今まで特に行くあてもなく何

とはなしに出していた足に、目的地へ向かう明確な意思がこもった。

向かう先は誰でもない、紛れもなくこの松永心。

「まさか、この人——」

思う間にも、「まさか」が頭の中から消えていく。平日の昼間とはいえ、池袋の駅前。人通りはそれなりにある。こころと彼の間にもそれぞれの目的地へと歩く人々がいたはずだ。

だが、それはもう過去のこと。いつのまにか、こころと彼を隔てるものはなにもない。誰も当然のように道を譲る。

自分自身で見るのは今が初めて。だが、話では聞いている。アマテラスが、そしてその弟が、何をするのでもなく、ただその格をもって人間に道を譲らせたことを。

それと同じことを、目の前の褐色の若者はやっている。

この褐色の若者こそ、アマテラスの弟のもう一方。

たしかエジプトの神話で、太陽神の名前にも使用された名前の、本来の持ち主。ラー。

「ど、どうしようどうしようどうしよう？」

本庁への緊急連絡？ してどうなる？ 数日前もうソルが騙されたばかり。互いの連絡は万全を期しているだろう。こころがアマテラスを呼び出したら、ラーもすぐソルを呼び出すだろう。そのあと協力した弟たちの前になすすべもなく倒されるだけ。

動けない。頭ではなく本能で確信する。何をどうやったところで逃げようがない。

ふと、子供のころのことを思い出す。ある日夜空に浮かぶ月が不意に妙に怖くなって、振り切ろうと走った。だが、どこまで走っても逃げ切れない。それがただ怖い。

在りし日、恐怖の理由が分からなかった。しかし、今なら分かる。

大きい。それが怖い。あまりの違いを、人はおびえずにいられない。

すでに距離は二メートルを切っている。

「あ、あ……」

目をそらすこともできない。目が、意識が、吸い付いたように離れない。

そのまま、若者はこころの前で立ち止まる。そして、ゆっくりと口を開く。

死ねとか消えろとか言われたら、本当に死に消えてしまうかもしれない。

「すみません、池袋ヒルズへはどうやっていったらいいんでしょう？」

がくん、と身体から力が抜けた。後頭部のポニーテールも同じ思いだったようだ。へなへなへなへなと力がぬけていくのをはつきり感じる。だが片膝をついた時点でなんとか踏みとどま。ギヤグマンガみたいに前のめりに倒れることだけはなんとかこらえる。頑張った。

「あの、どうかしましたか？」

「あ、いいえ、ちょっと暑さでくらっときただけです。ちょっと場所を変えましょう」

若者を促して、往來の邪魔にならないよう街路樹の下まで移動する。

影の涼しさも、普通に感じ取ることができ。さっきまではこころにまとわりついて身じろ

ぎすることさえ許さなかった存在感は、いまやまったく感じられない。

「池袋ヒルズですよ。駅の反対側ですよ。あそこをまっすぐいったあと……」

池袋はあまりなじみの深い場所ではないが、池袋ヒルズは何度かプライベートでいったことがある。その知識に基づき、警察手帳を出さずに身振り手振りしつぽ振りもまじえて案内する。

彼は、一言目からもわかるように日本語が堪能だ。意思疎通に困ることはない。

「ありがとう。さすが警察官、説明のしかたもなかなかだった」

「いえ、どういたしまして」

(…ちがった、のかなあ？ そうだよ、ちがったんだね)

あれだけの存在感である。実は隣にいた別の誰かが放っていたのを勘違いしたとしても、おかしいことはないだろう。そう納得しかけてから――

(――え？)

まことに不意ながら、松永心は初対面の相手に警察官だと思われることがない。それどころか年齢相応に見られることさえほとんどない。中学生だと思われることはもとより「小学生にしては背が高い」とか言われることさえザラ。「背が高い」だけで「大人っぽい」とか「発育がいい」とか言ってくれる人はいないのがちよつとくやしい。

ともあれなぜか松永心は話しかけやすい雰囲気を持っているようで、警察官だと知らないまま道を尋ねられたりすることもある。だが、この若者は確かに言った。「さすがに警察官だ」と。今日この池袋で警察官らしいことは特にしていないのに。

「本題に入らせてもらおう。私は、ラー。あなたたちと行動しているアマテラスの弟だ」

「……」

緊張が全身を一気に駆け抜ける。駆け抜けた後、何をしていいのかわからない。何をしたら通じない。だが、それでもさつきみたいな混乱に陥ったりはしない。相手の姿はきちんと見えているし、相手の声もきちんと聞こえている。あの異様な迫力がなくなったから。

「……ころが克服しているのではなく、ラーが抑えたのだらう。アレを出している限り……ころはすくみあがってしまい、まともに話などおぼつかないと判断して。」

「そ、それで、なんのお話ですか？ アマテラスさんに連絡つけましょうか？」

「それは止めておこう。今回は君たち人類に対して話がある。君には偶然遭遇したように見えるかもしれないが、これでも姉上の看視の目をかいくぐるために色々苦労しているのだ」

どこか古風な話し方が、精悍な外見と結構マッチしていた。

「今からの話は、アマテラスさんに聞かれたら困ること、っていうことですか？」

「我々にとってはかなり困る。だが、君たち人類にとってどうかは正直はかりかねている。だから私はありのままに事実だけを告げよう。君たちがよく考えて決めてくれ。あまり時間はない。さっそく話したいのだが、かまわないか？」

「わかりました。ちよつとまってくださいね」

そういうとポケットから電子警察手帳を取り出して、何度かボタンを押す。すると、『録音モード ○：○○』と表示され、その数字が一秒ずつ増え始めた。

「どうぞ。お伺いします」

「君たちに忠告する。姉上、アマテラスの言葉をそのまま信じないことだ。姉上は『見返りなど求めていない。ただあなたたちを救いたいから救っている』とかいっただろう。だが、救ったところで何の見返りもなく、見捨てたところで何かを失うわけでもない存在のために、本当に身を削ってまで戦えると思うか？ 君ならどうだ？」

『救いたいから救っている』は建前で、本当はアマテラスさん自身にとって重要な利害がある。そのために地球を救っている、ってことですか？」

「その通り。四月十九日に覚醒した魔力物質の一つに、我々の力さえ自由に制御するものがあった。姉上は、救っても何の見返りもない君たちのために我が身を衰えさせたことを深く後悔し、その魔力物質でかつての力を取り戻そうとしている。だが、まだその魔力物質は半分覚醒した程度で、この近くにあることしかわからない。我々が乱暴に搜索したら半覚醒のまま破壊してしまう危険が非常に高い。ならばどうすればいい？ 今君は何をしている？」

「……私たちに、探させる？」

「正解だ。あの場でソルを取り逃がしたように見せかけた。そうして『絶対取りこぼせない奇襲を仕掛けた。次に弟たちが結託して攻めてきたら勝ち目は薄い』となれば、君たちは戦力補強のため血眼になって魔力物質候補を探さだろう。そうして目的の魔力物質を手に入れたら、姉上は自分の愚かさと完全に決別するため、放置すれば消える地球を吹き飛ばすかもしれない。その証拠に、姉上は君たち以外にも接触し、調査をさせている」

そういうと、ラーはある一枚の紙片を差し出した。

「そんな……」

それは、一枚のスナップショットだった。どこかのホテルの廊下だろう。廊下にいるアマテラスを、部屋の中からドアをあけて室内に招きいれようとしている。

写真の証拠能力はそれほど高くない。その気になればいくらでも偽造できるからだ。

だが、これは偽造や合成などではありえない。人が意図して作ることなど絶対不可能ものがはつきりと映し出されている。

部屋の中からドアを開けてアマテラスを招き入れているのは、あの請負テロリスト赤い風。

赤い風の美しさは、本人を直接加工しなければ誤魔化せる程度の甘いレベルではない。

赤い風がいる景色といたない景色を合成すれば違和感が生まれる。そういう次元だ。

だから、この写真は、偽造ではありえない。

「姉上と一緒に写っているのは君たちの社会で、凄腕の犯罪者らしいな。そんな相手と姉上は接触し、しかも、君たちにはそれを伝えていない。それでも君は姉上を信用するか？」

「ど、どうして、あなたはそれを知ってるんですか？ だいたい、アマテラスさんはずっと私



「たちに監視されていたんですよ？」

「私と姉上が同じ両親から出産という方法で生まれたように見えるか？ この身体は地球上で活動しやすいため便宜的に作ったものにすぎん。姉上なら、自分をもう一つ作るくらい簡単だ。本体に監視を集中させて、分体に行動の自由を保障させる策略だった可能性は？」

「そ、そうだとしても、あなたはどうかやってこの人の所在をつかんだんですか？」

「我々も姉上の先に行くべく、独力で魔力物質の搜索を行っていた。そんな折、この女の力が我々のアンテナに引っかかった。これだけの力を持っているなら何らかの役に立つと思い、正式に接触しようと思っていた矢先のことだ」

「いよいよ反論できなくなる。アマテラスは自分のために身を削っている。地球や人類を救うというのは、こちらを操るための口実。筋は通っている。」

「じゃ、じゃあこれを私たちに伝えて、あなたたちは何があるんですか？ アマテラスさんの無償の善意を否定する動機は、『騙されちゃいけないよ』って無償の善意なんですか？」

「ソルとラーたちが有利なのは事実としても、それほど決定的圧倒的なものではない。もう一度嘘で騙すことはできないとしても、どうかして一対一に持ち込めれば勝機はある。だからこちらの結束を崩しにきているのではないだろうか。」

「こころとて警察官。疑うことは仕事の一部。この程度の勘繰りはする。」

「もちろん無償の善意などではない。私やソルと姉上の関係は、さまざまな対立の積み重ねから、すでに修復不能なところまできている。姉上が魔力物質を手に入れたら、今までの報復を込めて、我々の存在を抹消してくるだろう。それは何とか避けたい」

「即答。指摘にうろたえている様子は皆無。それは「事実だから」か、あるいは「あらかじめ用意しておいた嘘だから」か、こころには判別できそうにない。」

「ラーは、平静な表情のまま、続ける。」

「協力してくれるなら当然礼はする。あと五百年は我々が責任を持って地球を維持しよう。その間に地球外脱出なり何か方法を考えろ。以上だ。何か聞いておきたいことは？」

「……いえ、ないです」

「では、最後に今持っているその魔力物質を渡してもらえるか？」

「……あ、はい」

少し考えてから、理解する。今日一日池袋の町を歩き回って、一つだけ見つけた花瓶のことだろう。背負ったリュックサックの中にはいつているそれを取り出して、ラーに手渡す。

受け取ったラーは、ペットボトルサイズの花瓶を右手で軽く握ると目を閉じた。

その直後、まずラーの右手が光る。その光が広がって花瓶全体を包み込む。

それほどもせず、花瓶全体を包んでいた光は消える。

「これでこの花瓶は姉上が作ったものより数段上の力をもった。私たちの行動に不審を感じるようなら、これで私たちの本体、あの太陽を破壊すればいい。同時に君が暑さのあまり幻覚や

幻聴にとらわれたわけではない証拠にもなるだろう」

そういつて、ラーはここに花瓶を渡す。

受け取つて、確信する。ラーは本当にアマテラスと同種の存在なのだ、と。

今の今までラーが言つたうちの一方、暑さのあまり幻覚を見、幻聴を聞いたのではないかと頭のどこかで期待していた。だが、その期待が完全に砕け散る。

これまで極大防壁を何度か使ってきたりしたからわかる。これは疑いようもなく癒しの石を超える力を持った魔力物質。さつきころがリュックサックを背負っている間は、魔力物質候補でしかなかった。だが、ラーの手に渡り、再びころの手にもどつてくるまでせいぜい一分前後の間に、魔力物質候補は超魔力物質ともいふべきレベルまで昇格した。

もう一切否定できない。目の前の若者は、人の形をした人以外の、人以上の存在。

「それからもう一つ、これを渡しておこう。我々と組む気になったら、いつでも連絡してくれ。強く握り頭の中で私のことを念じれば、話はつながる」

さらにラーはズボンの右ポケットからコインを一枚取り出して渡す。おそらくは銀製。かなり古びさびついているため、何が掘り込まれているかとかは、まったくわからない。

「では、失礼」

ラーはそういつと、こころの返事など聞かず、歩いてこの場から姿を消す。

その姿をこころは呆然と見送つていた。約十分後、電子警察手帳が、連続録音の限界が近いことを伝えるために発した警告の電子音で、ようやくこころは我に返つた。

ほけー

ほけー

ほけー

ほけー

ほけー

ほけー

人間と人間に見えるもの、こころとアマテラスが並んで、空を見ながらぼんやりとしていた。

なー なー なー なー なー なー なー なー なー なー なー なー

なお なお なお なお なお なお なお なお なお なお なお

そんな自分たちのまわりを、こころ一帯に住み着いている猫が行ったり寝そべったりしている。餌をもらいなれているからか、こころたちを怖がっている様子はまったくなくない。

車のボンネットに猫がのっかって寝ているように、アマテラスのひざとか肩とか頭とかに猫たちはのっかって、思うさまひなたぼっこを満喫中。

(~~~~~)

ちよつと悔しい。これでも動物に好かれることにかけては結構自信があった。「初対面の人にはまずなつかない」と言われる犬や猫と簡単にうちとけて、飼い主を驚かせたことも一度や二度ではない。そんなころをはるかに超えたなつかれっぷりだった。

(でも、仕方ないのかな)

そうも思う。アマテラスは本当に暖かい。性格面だけの話ではない。今日も四月下旬にふさわしからぬ強烈な日差しによって、気温は三十度を軽くオーバーしている。しかしアマテラスの周囲だけは春のように暖かい。暑くない。まだ毛が夏に向けて生え変わってもいない猫たちにとつてこの暑さは厳しいだろう。むしろ集まってくるのは当然ともいえた。

アマテラスが、こころを見て、言う。

「いい天気ですね」

「そうですね、いい天気ですね」

アマテラスの言葉に、こころはとりあえずそう返事をする。たしかにいい天気である。少し離れてベンチに座るころもアマテラスの暖かさの影響をうけている。心地よすぎて、平日の昼間にこんな風にぼんやりとしていることが、何か後ろめたくさえ思えてしまう。

今、こころは東京大学上野キャンパスの中庭にいる。

弟との戦いのあと、自らの疲労と消耗を自覚したアマテラスはそのあと数日間、飯田橋の警察病院で入院生活を続けていた。怪我そのものは打撲など治癒があれば人間でもせいぜい一週間ほどで回復してしまっていたので、マテラスも二日で完全に回復した。

だが、アマテラス自身は「まだ完全に復調してはいないので、よろしければもうしばらくここで休養させてください」といって、かつてのような都内探索は控えている。

その要求をうけいれ、警視庁は東大上野キャンパス近くのホテルをひとつあてがった。

そこに滞在しているアマテラスは、今のようにホテルの中でぼーっとしているか、さもなければこの東大上野キャンパスでぼーっとしている。そして猫たちに囲まれる。

現在アマテラスの仕事らしい仕事とせば、魔術捜査官たちがさがしてくる魔力物質候補の品物を鑑定し、よさそうなものがあればそれを即製魔力物質に加工することだけ。

半分猫に埋もれているアマテラスにちよつと嫉妬しながら、こころは思う。

(どうなのかあ、本当に何かたくらんでるのかなあ)

ラーの言葉が本当に事実だとすれば、今の状況はまさに理想の展開だろう。

一度弟を騙して誘き出し、同行していた魔術捜査官に恒星の戦いを見せ付ける。それですくみあがった人間どもが、戦力を増強するため必死こいて魔力物質候補を探し、差し出してくれる。アマテラスは、差し出される中に目的のものがあるまでただ待たばいい。

企みがある前提でこれまでのアマテラスの行動を解釈しても、矛盾はない。

アマテラスが退院してからずっと、監視は和宏からこころの役目になっていた。ただ一人弟

ラーと話をした存在として、不審な言動や企みを見抜くことを任務である。  
(でもー)

猫たちに心地よい眠りを提供するために微動だにしないアマテラスをみていると、そんな企みがあるとは思えない。本当にただアマテラスは見返りなど何一つ求めずに人間を救っているのではないかと。人間には誰一人持つことができない天井知らずの優しさも、太陽の化身なら持つことができるのではないかと。

「どうしました？ 松永さん？」

「いえ、なんでもありません」

「最近気候が急激に変化していますからね。体調を崩したかな、とか少しでも思ったら、速めに手を打ったほうがいいですよ」

「そうですね。そうします」

こちらがそちらを疑っているなど考えもしない。あるいは、こちらの薄汚い疑心暗鬼さえすべてお見通しの上で許してくれている。そのどちらかにしか、こころには思えない。

この笑顔の下で何かをたくらんでいるなんて、どうやっても思えない。

だから、警視庁は他の方法で確認を取ることを決断した。それを今日これから実行する。

こころは左手首を見る。腕時計の示す時刻は十三時五十六分。

そろそろ、予定の時間だ。

予定にたがわず、姿を見せる。戸田弓子が。先日東大上野キャンパスを、消滅の危機から救い上げた、大げさに言えば世間は知らない影の英雄。

(あれ？)

その横には、魔力物質によって死より復活した少女播磨美由の姿もある。今日弓子が来るのは知っていたが、美由まで伴っていることは聞いてない。

「……怪我はたいしたことなかったようで、なによりです」

弓子がアマテラスの姿を認識してから、挨拶するまでに少し間があった。「ブル猫アーマー」、  
「猫だらけ」、「猫まくり」のアマテラスの姿に度肝を抜かれたのだろう。

挨拶はしない美由も、ちよつと驚いたような顔になっている。

「ご心配をおかけしてもうしわけありません。ですがこの通り順調に回復しております。そのうちに再び行動を開始できるようになるでしょう」

「そうですね、それはそうとして、今体中にまとわりつくそれは何なのですか？」

「何と言われれば猫ですね。このあたりの野良猫でしょう。私は彼らに気に入られたようです。

今の私の姿に違和感を覚えるなら、『アマテラス@ねこだるま』とでもお呼びください」

「……」

「……」

「……」

「是非」

言葉を失うころたち三人に、少しぐつと身構えてそうお願いする。

「……………わかりました、では、アマテラス@さん。少々お聞きしたいことがあるのですが、よろしいでしょうか？」

「普通こういう場合は、前半を省略して『ねこだるま』と呼ぶべきでは？」

「アマテラス@さん、少々お聞きしたいことがあるのですが、よろしいでしょうか？」

「……………わかりました。伺いましょう」

残念そうに、アマテラス@（ねこだるま）が折れた。

（す、すごい！！ 勝った！！）

素直に感心する。どんなくだらないことであっても、太陽の化身相手に自分の都合を押し通すなど、中々できることではない。

『ねこだるま』って悪くないけどなあ

ただ、そうも思ったので、こころの脳内では「ねこだるま」と呼ぶことにした。

「まだ完全に復調しているわけではないようですから、早めに用件を済ませましょう。お聞きしたいのはこういうことです。アマテラス@さん。あなたは何か私たちに対してまだ言っていないことはありませんか？ どんな小さなことでもかまいません」

「なぜ、そのようなことを今になって聞かれるのでしょうか？」

ごく自然にうろたえることもなく、ねこだるまは質問し返した。

「あなたたち太陽の化身の戦いはあまりも強烈です。前回は被害なく収まりましたが、次も同じようになるとは限りません。被害を減らすためにできることはすべてやりたいのです」

「もつともな話ですね。ちよつと待ってください。よく思い出してみます」

そういつて、ねこだるまがねこに包まれた腕を額にもっていく。

その間に感じた。魔力物質の気配を。ほんのごくわずかな、魔力物質の秘めたる力を一度も経験したことがないものなら、「妙な雰囲気」で片付けてしまう微々たる気配。だが、知っているものには無視できない。

それを美由が放っている。全力を集中してねこだるまを見つめている。

敵意も畏敬も尊敬もなく、ただ奥にあるものをみとけようと目を凝らしている。

額に手を当てていたねこだるまの目が、そちらに向かう。

美由の気配など圧倒する何かが、ねこだるまから吹き上がる。

それを受けて、ねこだるまがねこだるまではなくなる。ひざの上にいた一匹を除き、すべての猫たちが緊急離脱して、ねこだるまをアマテラスにかえた。

「……………あ……………ああつ……………」

美由が叫ぶ。それと同時に小柄な身体の内側から光がほとばしり出る。

「ふにゅっ……………」

突然の光を直視してしまい、思わず悲鳴を上げ、目を覆う。

だが、光はその悲鳴が終わりきるまでには収まっていた。

光のあと、アマテラスを凝視していた美由はもういない。虚ろな目で棒立ちになっている。美由の体が、支えを失った置物のように、その場で倒れようとする。

その動きだけでもわかる。すでに美由は、内部から破壊しつくされた。

「あぶー」

ところが美由を支えようとするより早く、弓子が支える。

「……今のは、どういうことですか？」

弓子は美由を抱きかかえたまま、敵意と警戒心溢れる声を、元ねこだるまに向けて。

「少々乱暴な手段ですが、口を塞がせていただきました。もうしわけありませんが、今知られるわけにはいかないのです。後で償いはいたします」

「……力よ、空を駆ける翼となれ!!」

そういうと、すぐに弓子は飛行でこの場を離れた。美由をどこかの病院へ運ぶのだろう。

「……」

突然の展開に頭がついていけない。それでもある程度はわかった。

現在も意識不明の命は、アマテラスの出現を和宏や美由より先に感じ取った。そして意識さえもどらないまま「嘘」「隠す」「だけど」などと繰り返し、何かを伝えようとしている。

その断片的な言葉の詳細をさぐるため、美由はこの場にやってきたのだ。

命ほどではないにせよ、美由も和宏より先にアマテラスの出現を察知したという。「何か隠していることはないか？」と聞かれれば否応なく意識する内容を読み取れるかもしれない。

そして美由は確かに何かを読み取った。それを知られたくなくて、数秒前までのねこだるまは、少々乱暴な手段で美由の口を封じたのだ。自分で宣言した通りに。

「じゃあ、じゃあ……」

本当にただ善意で人間を救おうとしているのなら、知られて困ることなどないはずだ。

ならば、ラーの話こそ正しかったのか？

「ねこだるまさん……」

この先、何を言えばいいのだろう。あるのはその感情だけ。あまりにも力の差がありすぎるため、一人でいることに不安も恐怖もない。

ベンチに座ったまま、元ねこだるまは一度こちらを見る。そのひざの上には、さつき美由を傷つけた力の発動にも気づかず、まだひざの上でのんきに寝ている猫が一匹だけ。

その猫を静かに見やうてから、左手を少し伸ばして力を込める。そこに光が収束する。

たった一グラムの質量さえ、完全にエネルギーに変換しきると、何十万本というドラム缶の石油を燃やしたときに匹敵するエネルギーになるという。

元ねこだるまは、その逆の変換を、今やっている。理由なく直感する。

バレたなら、大人しくする理由もない。すべてを消し去りなき払うために？  
左手に収束する光はどんどん大きくなり、そしてやがて一つの形となった。  
それは、スコップ。真新しい金属製のスコップらしきものが左手に出現する。  
それを握り締めるとねこだるまはひざの上の一匹を抱きかかえたままベンチを離れる。  
少し歩く。その間にも、一旦緊急離脱したねこだるまの各パーツが集まってくる。  
大きな木の下で足をとめると、スコップで土を掘り始めた。

(まさか……)

駆け寄り様子をうかがう。元ねこだるまはいつもと同じ穏やかな表情のまま掘っていく。  
ある程度の深さと広さができたところで、そこに膝の上にいた猫を入れた。そのあと掘り出した土をかぶせていく。埋められてしまうのに、その猫は一切抵抗しない。

当たり前だろう。一匹だけ緊急離脱しなかった猫は、すでに息絶えているのだから。

美由の口封じの余波で死んだのではない。その時点で既に死んでいたのだ。

「おやすみなさい。よい眠りを」

元ねこだるまが立ち上がり、頭をさげて冥福を祈る。その周囲ではねこだるまの各パーツたちが、死せる猫を見送っている。それぞれに猫らしく猫背で。

死期を悟った猫は飼い主の前から姿を消す。

間違いではない。だが、それが全てではない。

死期を悟るとは、生物としての衰えを悟ること。信頼できない相手に弱った姿をさらすなど危険である。本当に飼い主に心を許していれば、猫はいつものように飼い主の膝で眠り、そのまま息絶える。ナオ、こころの祖母が飼っている猫がそうだった。

アマテラスはせいぜい数日で、警戒心の強い野良猫から死を見取ることを許された。

本当に、本当に、このもの静かで暖かな微笑が単なる演技なのだろうか？

「お詫びの言葉もありません。では、私はこれで失礼します」

太陽の化身はこの場を立ち去った。その背中を多くの猫たちに見送られて。

『――では、また次がいつになるかは不明だが、これで失礼』

そこで、松永心がMDプレイヤーに手を伸ばす。ボタンを一つ押して再生を停止させた。  
停止するまでの一連の会話を、高原政人は、総理官邸の一室で聞いていた。

ボタンを押した後、松永心が、ひきつった顔で、言う。

「あ、ええと、こ、これが、私が、先日池袋で遭遇したラーとの会話のすべてです！ ほ、本当ですよ。こ、このあとほうけて録音機能の限界まで十分近く録音しっぱなしなんてことはぜつたい、ええ絶対ありません！！」





ラスは善意の裏側で何かをたくらんでいると見るべきだろう」

「そうだな。周囲が吹き飛ばないようにし続けていたのも、ただ守りたいからではなく、自分にとって失えない重要なモノが何かあったと思えば理解しやすい」

基本的に、閣僚たちはラーの意見を肯定する。

それは、アマテラスの無償の善意の否定。

「——しかし、仮にアマテラスの言葉を否定しソルの言葉を信じたところで、こちらの状況がそれほど多くなるわけではないのだな。相変わらず打つ手はほとんどなしか」

列席者の一人が、乾いた笑みを浮かべつつ、発言するともなく呟いた。

それに反対するものはない。仮にアマテラスの裏切りを知り、ソル及びラーと手を組みなおしたとしても、基本的な状況は同じ。アマテラスに地球が不要であるように、ソルやラーに

とつても地球は不要。ラーは自分の言葉を信じてもらう根拠として、太陽本体自分を殺せるほどの力を

差し出したが、それで状況が劇的に改善されたわけではない。裏切りがあったからといって、その力を使い太陽を破壊すれば地球は百パーセント破壊である。

あちらはこちらを絶滅させても何ら問題ないが、こちらは相手を殺しても引き分けが精一杯。人間が太陽に戦いを挑むことの無謀さが、はっきりわかる。

「と、全体の意見はラーの言葉を肯定する感じですが、高原教授のご意見は？」

一通り意見が出たところで、官房長官が意見を求めてきた。

「まあ、こうなると論理の優劣を競うというよりは腹の探りあいですからな。政治の世界から足をあらって長い老いぼれが口をさしはさむ余地はありますまいよ。皆さんがそう思うのならそれでいいのではないですか。ただし」

最後の部分で語気を強める。周囲の視線と意識を集めた後、松永心のほうを見る。

「腹の探りあいとなれば、何より重要なのは相手の本質を見抜くこと。今の時点で、アマテラスとラーの両方と直接話したのは彼女だけ。その彼女がアマテラスとラーに対してそれぞれ持った印象を聞いてほしいのだが、よろしいかな？」

彼女といいながらこのころを見る。それに触発されて、三十数本の視線がこころに集中する。

「え、わ、私、ですか？」

「うむ、気兼ねすることなんぞない。どいつもこいつも明日には手が後ろに回るような連中じや。そのうちお嬢ちゃんも取調室で顔を合わせたりするかもしれない。その予行演習に、バーンときついことぶちかましてやるといい。いいストレス発散になるぞ」

「そうだな。その葉山さんなんて最近信頼する秘書が病気で引退して、後任も決まってない。今叩けばいくらでも埃がでてくる。大手柄あげて出世するチャンスだぞ」

「黙れ、そういうあんたこそ先月後援会長が亡くなって足場が危ういとこだろう」

「いいぞ、やれやれ。どっちも負けずに死力を尽くして戦って共倒れになれば最高だ」



の緊張はなくなっている。額に手を当てて、少し考え込んでいた。針のように尖って動かなくなっていたしっぽも、今はぐるぐるどめぐるしく回っている。

「はじめにお断りしておきますが、あくまでも私の印象です。根拠はありません。まずラーですが、こつちは会ったといってもせいぜい十分くらいなので、印象というほどのものはありません。ただ、ちよつと突き放した感じがするなあ、と思つたくらいです」

一息。そしてさらに「こころは続ける。

「次にアマテラスさんですが、すごい優しい性格なんじゃないかなと思ひました。皆さんがラーの意見を採用するのももつともだと思ひます。』どこに何の見返りもなく自分を削つてまで他者を助けようと人間がいるか?』つていわれたら、きつとそんな人間はいないでしょう。けど太陽の化身ならそんなすごい優しささえ持てるのかもしれない、と思ひました」

「だが災厄から人間になった少年が、今も『嘘』『騙す』『隠している』となど何度も繰り返しつつやいているそうだが? アマテラスはあげく口封じまでしたそうではないか」

官房長官がそう質問すると、周りで何人かが頷いた。それを受けてこころは、

「でも、その言葉と一緒に『でも』『だけど』とかも言っているはずですよ。こういう言葉がある以上『騙している。けど悪いことじゃない』とか解釈も可能でしょう。先日美由——じゃなくて魔力物質と一体化した少女の口を塞いだことも事実ですよ。でもそれは知られたら自分が困るからじゃなくて、本当に私たちが知るべきではないと思つたからではないでしょうか。大体『口封じをした』なんて自分で認めたら、口封じをする意味がありません」

「本当にこころのたれを思つているのなら、知られて困ることなどないと思つたか?」

「あ、ええと、それは……」

「現在魔力物質の存在を一般に公表していないのは、力を独占したいからなのでしょうが? 私は『知らせても混乱が深まるだけ』という意識が先だと思つていましたが。それと同じように知らせないことがこころのたれ、という可能性はあるでしょう」

「あ、そう、それですそれ!」

「む……」

弓子の助け船でこころは勢いを取り戻し、質問した官房長官は言葉に詰まる。

こころは深く頭を下げた。その下げた頭の前で、しっぽはさらに深くお辞儀をした。

こころが腰を下ろした後、豪華な調度品に彩られた特別会議室の中を、重い沈黙が支配する。

(そうか、お嬢ちゃんもそう思つたか)

いかにも善人面して「あなたのために」と持ち込んでくる一見おもしろい話ほど、裏には恐ろしい企みがある。珍しくもないことだ。

だが、それらはあくまでも人間の世の中での話。本当に単純な善意だけでアマテラスが行動している可能性は低いものではない。太陽の化身は太陽の化身。人間ではない。人間と同じ言葉話を話しているとしても、人間と同じ思考法が通用するとは限らない。魔力物質が死や空間さ

え簡単に超える現場をみせつけられて、高原もここと同じようなことを考えた。

人間の常識など遙かに超越した優しさというものがあってもいいのではないかと。

だが、最終的には破棄した。自分も政治家だったからわかる。善意なんて不確実なものに頼って政治をするなど、絶対あつてはならない。善意に頼りきって相手がある日突然「もう止める」なんて言い出したらどうするのか。だから契約で縛り、反故にしたら強制的にでも執行する。裏切りもふくめあらゆる事態を想定し備える。人間の社会はそうして成り立ってきた。

誰もが善意をもって信じあえたら素晴らしい。しかし政治家がそれをあてにしているわけではない。世界屈指の魔力大国とはいえ、食料の多くを輸入に頼る日本ならなおさらだ。

「……ありがとう。君の意見は大いに参考となった」

官房長官は、こころに対して礼を言った後、高原たち列席者を見回す。

「では、決をとります。今後の方針について、ラーの発言をもとにアマテラスに対しては面従腹背でいく。賛成の方は挙手をお願いします」

高原を除く十五本の手が、右だったり左だったりで挙げられる。

たとえ太陽の化身から見ればそれ自体が取るに足りない吹けば飛ぶような時間であつたとしても、人間は己の歴史で培ってきた考え方を、捨てることはできない。

「では、そのあとの方針について大まかな方針を決めましょう。ではまずー」

会議は、ほぼ高原が予想したとおりの方向へ進み続けた。

「それじゃ、使いますね」

そういうと、こころは警視庁舎の屋上でコインを握り締めた。

花瓶ともどもラーからあずかった、連絡用の古びた銀のコインである。

(ええと、ラーさん、聞こえますか？ 聞こえないなら聞こえなくてもいいですよ？)

頭の中で呼びかけながら、後者を期待する。期待するくらいしかできない。連絡を取れと命令されたなら、警察官として従わなければならない。自分は納得してなくても。

「いや聞こえている。こうして連絡を取るからには、我々と協力するということか？」

しかし、通じてしまった。しかも、こころの頭の中にだけ響く声ではなく、周囲にも聞こえる形で返事をされた。こうなったらもう嘘すらすけない。

「はい、そうです。そのために細かい点を詰めたのですが、構いませんか？」

もはや、こころには上司に命じられたとお話をする以外になかった。

とて

今日は立ち止まることもせず、一步後ろでアマテラスがついてくる。

現在和宏は、アマテラスは階段を上っている。上った先に、目的地がある。

和宏たちは今、東京と埼玉の境にある山寺、へ繋がる階段を上っている。

そこでかなり強い力を放つ魔力物質が発見された。しかし、高さ八メートルはある巨大な仏像なので、簡単に持ち出しできない。だからアマテラスが赴いて検証し、必要なサイズに切断のうえ加工してほしいと要求した。それをアマテラスは即座に承諾した。

(本当に、アマテラスは俺たちを騙しているのか?)

こころの話によると、アマテラスは美由を意識不明の重体に追い込んだ。命よりも深く傷つき、現在意識の回復さえ危ぶまれている。その理由は「口封じ」だと言明した。

普通に考えれば、ここまでされてアマテラスを信じる理由はない。だが、アマテラスはそのあとも姿を消さず日本が用意したホテルで生活を続けている。人里はなれた場所への呼び出しに応じた。口封じの時点で日本政府とアマテラスの関係は決裂したようなものなのに。

だとしたら、美由の口封じさえ、純粹に善意?

(そんなはずあるか!)

しかし、頭の中でそう叫ぶ声のほうが強い。政府の決断は正しいと信じたい。

外れていたら人間は滅びるしかない以上、正しくなければ困る。だがそれだけではない。

本質的に必要でない相手を、身を削ってまで守り救う。しかも見返りは一切求めない。

人の社会は、基本的に慈愛や無償の善意を否定して成り立っている。あってもいいが、なくともまわっていくように作ってきた。そんなギブアンドテイクを原則とする社会が、実は無償の善意と一方的な奉仕の元でしか成り立たなかったとしたら？ こちらが心血注いで差し出すすべての財宝や犠牲さえ、相手にはゴミ以下でしかないとしたら？

それは人が数千年かけて作ってきた歴史の否定だ。だからアマテラスのような存在はあつてはならない。一見あつたとしても、その裏側には必ず打算や企みがある。あるはずだ。

政府首脳の決断した背景の中にも、そういった自己の全存在を歴史ごと否定されることに對する本能的な恐怖のようなものがあつたと思う。

細道を通り木造りの門をくぐる。そこには三つの姿があつた。

一つは職場の同僚たる松永心。もう一つは、先日新宿で見かけたアマテラスの弟ソル。残る一つは初見だが、状況を考えれば答えは一つしかない。褐色の肌を持つがっしりとした身体の持ち主は、アマテラスの弟でソルの兄でもある太陽の化身、ラー。

「これが純真な弟を騙し、無辜の少年や少女を傷つけた報いなのかもしれませんね」

弟たちが待ち伏せしている。しかもその傍らにはころがある。味方であるはずの日本国が裏切り弟たちと結託して自分を誘き出した。今更聞かずともはや確定した事実だ。

なのに、アマテラスの表情も声もいつもと変わらない。

「そういうことなんです、ごめんなさい」

そういうと、ころはソルおよびラーの側からはなれ、アマテラスの側を通り抜ける。

ころが通り過ぎる瞬間も、アマテラスに動きはない。

このアマテラスを連れてくる役目と、ソル及びラーとともにアマテラスの到着を待ち構える役目は危険きわまりない。その一方であるアマテラスを連れてくる役目を、第二分室室長の弓子は和宏に任せた。能力を考えれば当然だろう。

そして、もう一方のラー及びソルとともにアマテラスを待ち構える役目は、ラーと接触したこともあるころの役目となった。本人が希望した。どうもころは閣僚たちの会議でもっとアマテラスを弁護すべきだったと後悔しているようだった。

そして和宏と同等の能力を持つ弓子は、現在東京湾上の海洋巡視艇上にいる。

この一帯には無数の発信機や通信機その他がセットしてある。アマテラスは当然ソルやラーが不審な素振りを見せた場合にも、太陽本体を破壊して道連れにするためだ。ラーからもらったあの花瓶で。その現場指揮と監督が姉の仕事である。

太陽を破壊すれば当然人間も滅ぶしかない。だが、もともとこちらをまったく必要としない太陽の化身を相手に駆け引きをするなら、そのくらいの覚悟は必要だ、とは和宏も思う。

和宏達は、最後にアマテラスの背中を見て、この場を立ち去ろうとする。恒星の化身同士が本気で戦えば地球自体跡形もない。だが、あえて爆心地のすぐ側にいる必要もない。

「ごめんなさい」

和宏の隣に来たところで、こころがもう一度アマテラスに向かって深く頭を下げた。その頭のさきでは、やはりしっぽも深々と頭を下けている。

仮にアマテラスの言動がすべて嘘で演技だったとしても、それによってこちらが騙した罪が帳消しになったりはしない。そう考えるのがこころだ。

和宏は、こころとともにアマテラスの背中に背をむけてこの場を離れようとする。

その瞬間だった。いきなり、周囲に壁が出現した。基本的には透明だが、そこらじゅうに火花がとんでいて、下手に突破を試みようものなら黒焦げになると告げている。

「くっ……！」

身構える。ただ命令に従って自分をここまで誘き出した小物など気にも留めないかと思っただけ、やはり生かして返すつもりはないのか？

相手は太陽の化身。戦える相手でもない。逃げ切れる相手でもない。その気になれば惑星ごと破壊するという冗談のような手段さえ、躊躇なく選択し、簡単に実行できる。

そうだとしても、意識と身体があるかぎりむざむざ死なせはしない。すぐ隣にいる相手を。

「あなたがここに来てくれたのは好都合でした。そこでじっとしててください。どこへ逃げるよりも安全ですから。かなり強めに展開しました。危ないですから触らないでください」

背中を見せたまま、アマテラスはそういった。

「なんだと？」

「ラー、ソル、わかつてはくれませんか？」

和宏の質問には答えず、アマテラスは弟たちに言う。相手が結託したら勝てない。以前言っていたことさえ嘘だと思いたくなくなってしまふほど、これまでと同じ穏やかさで。

その言葉を受けて、和宏と同じような体格を褐色の肌で彩る若者が一歩前に出る。

「姉上、私はずっと考えてきた。我々にとって地球は、あってもなくてもまったく問題のない存在だ。その意味では姉上が身を削り守り続けなければならぬ理由などない。だが、姉上の言う『生きる余地を与えた以上守る義務がある』という言葉にも理があると思っていた。だから、私は私なりに彼らに守るだけの価値があるか計ることにした」

アマテラスの背中の方こうに、ラーの目が見える。その目が、和宏たちを射抜く。わきあがる恐怖。

その目は、すでに計り終えている。結論を出している。

和宏は、恐怖で絶叫するのをこらえつつ、小型無線機を手早く操作する。

『こちら海洋巡視艇「うずしお」。どっぞっ』

「こちら時野だ。何か不穏な雲行きだ。準備をー」

ぶっん！！

叫んでいる途中で、いきなりそんな音がした。

「おい、どうした、もしもし、もしもし!!」  
よびかける。しかし返事はない。急速に嫌な予感が胸をせりあがる。「うずしお」には、弓子だけでなく高原や早苗もいたはずなのだ。

「私は彼らに『姉上が地球を守ろうとしているのは、姉上自身にとって重大な利害があるからだ。地球を守りたいというのは口実に過ぎない』と伝えた。また彼らは姉上の言葉を聞き、身を削って戦う場も見たはずだ。それを踏まえた上で、彼らが出した答えがこれだ」

ラーが頭を振る。姉想いの世間を知らない少年のソルには不可能な、皮肉を込めた所作。

「もはやこのような身勝手な連中を救うために姉上が身を削っていく必要は認めない。このよ  
うな連中ならば、いずれあれを見つけたときには、必ずや我々も踏みこむ」

「!!」 ラー、あなたはあれに気がついていたのでですか!？」

「少しでも多くを救い守ろうとするあなたの想いは尊いと私も思う。だが、宇宙にはまったく救うに値しない存在が確かにある。それまで救おうとすれば、あなたの存在までが下らないものに墮する。私はそれを見てはいられない。今ここであなたの蒙を啓く!!」

ラーは断ずる。人間は救うに値しないと。アマテラスの目を覆う蒙にすぎないと。

アマテラスが神の慈愛ならば、ラーは神の無慈悲なまでの公平さを持つ存在なのか。

ラーは右腕を伸ばし、ソルの左肩に乗せる。

「ソル、お前が正しかった。この宇宙には是非など考えず嫌悪感だけに基づいて踏み潰し、一顧だにしないほうがいい汚物が確かに存在した」

「っ!!」

アマテラスが緊迫した声とともに動き出す。だがそれよりも先に、ラーとソルが光る。

その白い光が、一瞬だけ和宏の視界を占領する。そして光が収まったとき、そこにいるのはソルだけだった。だが、それはさっきまでの、和宏も新宿で見たソルではなかった。

この火花を放つ（おそらくは）防壁さえ貫いてとどく、強烈な存在感。はじめてアマテラスを警視庁の屋上で見たときさえはるかに上をいく。

ソルは不敵にいたずらっぽく笑っている。アマテラスが慈愛でラーが公平さなら、ソルは古くから言われていた「神の御心は人間などには計れない」という気まぐれな部分か。

「もうわかるよね。これまで合計の数字は上回っても、別々である以上僕たちはそれぞれ従でしかなかった。主はおねえちゃんだった。けど、今それも逆転した。お兄ちゃんの力をもらった今、僕が主でお姉ちゃんももう従なんだよ」

『弟たちが力を合わせたら勝てない』それは単に「協力する」ことではなかった。人ならざる太陽の化身は、一方の力を直接もう他方に乗せできる。

「今も、前と同じことができるかな?」

「ソル、やめなさい!!」

以前と同じく、ソルはおこられて身体をごく短時間小さくすくめた。だが、それは本当にこ



く短い時間だった。ソルはその場で煙か何かを払うように、ごく軽く右手を振った。

刹那遅れてすべてが漂白された。はじめてソルとアマテラスが戦ったときと同じように。数秒後、すぐに視界は色彩をとりもどす。

そこには、何もなかった。視界が漂白される前、和宏は寺の敷地にいたはずだ。

周囲に見えるのは土、ただそれだけ。腰より高いものは何も無い。

今日まで約五十億年にわたって輝き続け、そしてこのあとも同じ時間だけ輝き続けるだろう。恒星の化身同士が戦えば、こうなるのが当然。

「あ、ああ……あああああああああああああああああああああああああああああ」

震え上がるころの声。驚愕が強すぎて、泣くことさえできていない。

しつぽがまったく動いていないのは、ある意味一番適切にこのころの心理状態を表現しているだろう。啞然、このころの精神状態は今それ一色になっている。

「そうなるはず、だったんだよな」

本当なら、アマテラスとソルが対峙した時点でこうなっていた。しかしならなかった。あの時はアマテラスの力はソルより上回っていたから被害を完全に遮断できた。だが、今回は相手のほうが力において勝っている。すべてを完全に無効化するなど望むべくもない。

ざっと見回しても半径三〜四キロ四方が完全に吹き飛んでいる。確実に万単位の間人が、何が起こったかもわからないままに蒸発しただろう。

「……………く……………」

その場でアマテラスがひざを突く。背中と肩が激しく上下する。

「なんでだよ、どうしてだよ。どうしてそこまでしてそんな連中を守るんだよ？」

こちらも同じく直接聞こえるようになった、ソルの絶叫。

自分で宣言したとおり、すでに兄の力も取り込んだソルは、姉であるアマテラスを超える力を持っている。しかし、搾り出すように叫ぶ。それしかできないように。

「……………お願いします。わかってください、ソル……………」

息も絶え絶えにしながら、それでもアマテラスは説得を止めない。

こちらも変わらない。相手が自分より強かろうと弱かろうと、相手が弟であるなら同じ。正しい道へ進ませようとする姉としての言葉遣い。

「そんなの嫌だ。僕はお姉ちゃんが苦しむのを見てられないよ!!」

「地球を消滅させれば私の負担は確かになくなるでしょう。ですが、そうしたら私は以後ずっと、自分を責めて生きていくことになります。あなたはそれでいいのですか？」

「じゃあ僕はどうなるんだよ。僕がこんなにお姉ちゃんのことを心配しているのはどうでもいいのかよ!？ お姉ちゃんは今僕とこいつらとどつちが大事なんだよ!？」

叫んでから、ソルははっとする。

それは言っただけなら質問だった。人間同士でも「仕事と俺(私)とどつちが大事なのか?」

とかさまさまなシチュエーションで言ったり言われたりする。だがそれによって何らかの実りがもたらされることはまずない。優先順位などつけられるはずがない。結局言った側にも言われた側にも気まずさが残るだけ。口走ってから、ソルもそれを感じたようだ。

「あ、いや、その、今のは、でも、えっと……」

ともごもごと口を詰まらせる。

「ソル、あなたは強い子です。私はあなたのことを同等の存在だと思っています。だからこそ、お互いのいいところも悪いところもお互いに受け入れあえるようになりたいのです」

遠まわしに人間を同等ではないと言い切る。しかし腹は立たない。ただの事実だ。地球上の生物のすべてにとって絶対欠かせない熱源であり光源である太陽は、地球に何も求めない。そんな状況であなたは私と同等ですなんて言われても、空々しいだけだ。

「わかってくれませんか、ソル」

「いやだ、僕はそんなのいやー」

ソルの絶叫が終わりきらないうちに、アマテラスが動く。

はじめてアマテラスが攻撃に出た。以前は相手が消耗して体力切れになるまですべての被害を防ぎきるといつともなく非効率的な戦いをしてきたアマテラスが、攻撃に出た。

その理由もわかる。実力で劣る側の勝機は、奇襲か短期決戦にしかない。

一気に間合いを詰めて、何かを押し付けるように両腕を突き出すアマテラス。

それに対して両腕を組み防御の姿勢をとるソル。

閃光。

かつての「フレア」よりもさらに上をいく烈光が、和宏たちの網膜を焼く。

(今度こそ、死んだか?)

何もかも桁が違いすぎる戦いをみせつけられ、もうかなり感覚が麻痺していた。

「はあああああああああああああああつー!!」

「うあつー!!」

真っ白な視界の向こう側から聞こえる一つの咆哮と、一つのうめき声。

そのあと、光が収まる。再び視界に色彩がもどる。

そのとき、和宏たちの周囲はそれほど変わっていたなかつた。さつきソルが軽く右腕をなぎ払っただけですでに半径数キロは焦土と化していたからだ。今更変わりようがない。

ただし、何もかも同じではなかった。さつきまで、半径数キロのその向こう側には建造物などが見えていた、山などもあった。だが、それらさえ何もなくなっていた。

完璧に、見事に、すっぱりさっぱり何も無い。

「地球丸焼け人類滅亡かあ」

感覚は麻痺を通り越して磨耗していた。地球が残っただけラッキーと言うべきだろうか。それさえも、アマテラスが何かしてくれたおかげかもしれないのだが。

「……っ……あ……は……」

そのアマテラスは、さつき最後に見た場所から少しはなれた場所にいた。ソルに挑みかかった場所から数メートル離れた場所でアマテラスは両手両膝をついていた。

「地球を何周かしてきたあとこの場に落ちたのか？」

和宏は、なんとなく、そんなことを呟く。アマテラスとソルがまともにぶつかっという数メートル吹っ飛ばだけなんてことのほうがちよつと考えにくい。

両手両膝をついているだけのアマテラスなら、以前ソルと対峙したときにも見た。だが、今はそのときよりさらに消耗が激しいようにみえる。やや距離があるのではっきりとはわからないが、服もそこらじゅうが焼け、引き裂かれているように見えた。

「……おねえちゃん……」

同じくもといた場所から五メートルほど離れた場所で、ソル。

こちらもびんぴんしているとは言いがたい。不意を突かれたためか、それともラーと力をあわせたばかりということと完全に扱い切れていないのか、いずれにせよ少なからずダメージを受けているようだ。足はふらつき、肩で息をしている。それでも「力は上だ」と宣言したのは間違いないようで、アマテラスに比べれば消耗がずっと少ない。

「う……く……あ……」

ソルは何とか身体を起こして立ち上がろうとするアマテラスのもとへ、よどみなく進む。

「ソル……」

「おねえちゃん、もう抵抗しないでよ！！ 休んでよ！！」

そういうとともに、ソルは右足を振りぬいた。

「うあ……」

かすかな声とともに、アマテラスが吹き飛ばされる。

吹き飛ばされた先で立ち上がろうとするより先に、ソルがこちらを見つつ手を伸ばす。

「そうまでして守ろうとするんなら、一つ残らず消し去ってやる……」

「ソル、だめです……」

次の瞬間、アマテラスの背中が和宏たちの前に出現した。

「っ……っ……」

そして、再び白い光。そしてすぐに収束する。

「う……」

光が収まったとき、目の前で、長い髪を持つアマテラスの背中が力なく崩れ落ちる。

「……お願いします。やめなてください。ソル……」

アマテラスは言葉による説得を止めない。それしか方法がないからではない。圧倒的絶対的に有利でもアマテラスは同じように最後まで言葉で説得を続けるだろう。

「なんでだよ、どうしてだよ……」

叫ぶと同時にまた光。そして、一瞬だけ立っていたアマテラスがまた倒れる。

倒れても倒れても、何があってもどうあるうとも、アマテラスは自分自身が消滅するまで和宏たちを守り続ける。守ったところで何の報いもない地球を、すべてをなげうって。

「……」

その背中に、和宏は薄気味悪さを感じていた。それは「お前はただの金づるだ」と言われても、「それでも幸せだから」と自分をすり減らして貢ぎ続ける女へ感じるものに近い。

そこに美談は感じない。金づるとしか見ない男への怒りと同じかそれ以上に、そこまで言われても自己陶酔なのかなんなのか、貢ぎ続ける女へ不気味さを感じてしまう。

そんな自分には理解できない感情の上でしか、地球は、人間は存在できない。

「く……う……」

だから、とうとうアマテラスが立っていることすらまもなくなくなって、倒れるにいたり、何かほっとしてしまった。アマテラスの敗北は、人には理解することさえできない善意と慈愛よりも、身近な誰かを助けたい気持ちのほうが強い証明のような気がして。

その証明は、和宏達の死に直結しているとしても、ほっとしてしまう。

「……お休み、お姉ちゃん。ゆっくり休んでね」

そういうと、ソルは軽くバックステップした。

そして両腕を突き出す。

「我が名はソル。天空に君臨せし大いなる光よ。古の契約の履行を我は求む！」

集中する力。出現する巨大な竜。しかし、現れた竜は想像しているほど大きくも力強くもない。まだソルがソルだけだったところに新宿で放とうとした「フレア」のほうが、迫力も光の強さも上に思える。アマテラスの攻撃は思った以上にダメージを与えているのか。

「第一の使い、荒れ狂う紅蓮の炎を纏いしの猛々しき竜よ、われは告げる汝が名を。ここに来たりて敵を――」

「伏せてください！！」

アマテラスの叫び声。これほど緊迫した声は聞いたことがなかった。

何がアマテラスにそう言わせたのか、すぐわかった。

急速に空に広がる、巨大な力を持った何か。丁度ソルの真上に、白いものが突然出現する。

それが光だと理解できたのは、ひとえに今までソルとアマテラスの戦いを見てきたからだろう。今それをはじめてきたのなら、巨大な極上の大理石の塊にしか見えなかった。

だが、これまで見てきているのでわかる。アマテラスが自分はポロボロになっても維持し続けている防壁さえ超えて感じる。巨大な力の波濤。

あるいは、新宿でソルが撃った「フレア」より強く、鋭い。

「c.？」

ソルもこちらの視線に何かを感じたのだろう。とどめの一撃を放とうと伸ばしていた両腕や、

しっかりと地面を踏みしめていた両足から力が抜ける。

その隙を、見逃さない。

落ちる。有物体と錯覚するほどの質感をもった光が、ソルに上から直撃する。

「くっ……！」

気がついたら身構えて全力で防壁を展開していた。無意味だとわかっている。

それからどれだけ経過したか、いつの間にか閉じた目をあけてソルを見る。

直撃を受けても死んではない。消えてもいない。だが直撃を受ける前とは大幅に変化していた。アマテラスと同じかそれ以上に見た目はボロボロでたまたまはふらふらだった。

まぎれもなく、ソルは少なからぬダメージを受けた。

頭の中を駆け抜ける疑問。一体ソルに攻撃したのは誰なのか？ アマテラスはボロボロで、

和宏たちを守るのに手一杯。ラーはソルと一体化している。となれば、一体誰が？

考えられることは二つ。どちらも可能性はかなり低い。

一つ、ソルが何を思ったか自分で自分を攻撃した。

二つ、さらにありえないことではあるが――

「なんだかすごいことになってるわね」

響く声。あまりにも、ただ、どこまでも美しい。

アマテラスの防壁がたとえ音声まで完全にシャットアウトするものだろうとも、これは、これだけは絶対に遮断できない。そんな、あまりにも美しすぎる声。

ソルの頭上、光が出現したあたりに見える人影。

すでに地球は焦土と化したはずなのに。事実として存在する。影だけでもわかるその美しさ。

ゆっくりと降り立つその姿は、見間違いようもないあの請負テロリスト。

発光体質は人により光る色も部位もことなる。和宏は手が白く光る。

この女は、目が光る。

この女以外の誰にも似合わない赤い光。それが今目に浮かんでいた。

この女は、今も存在している。この大破壊を生き延びた。死ななかった。

「なんだか面白そーなことやってるわね。私も混ぜてくれない？」

ゆっくりと降りたって、言う。誰へともなく。「面白そうな遊びでも見かけたみたい。」

「お前、どうして……！」

「どうしてって、こんな派手にドンパチされたら、誰だって嫌でも気付くでしょ」

と返事をしてから、こちらの表情が、まったく納得していないことを見てとったのか、

「あ、なんで私が蒸発してなかったこと？ そうね、確かにあなたと初めてあった頃の私なら蒸発してたわ。けど、私だって自分を高めるための研鑽は続けてるわけだし」

と、捕捉。つづけて右腕を伸ばす。そこに再び生まれる白い火竜。

それは、新宿でソルが撃ったものに匹敵する迫力を確かに持っていた。

「ゼロから色々考えるのと、誰かや何かが作った完成品を解析してモノにするんじや手間が段違いってこと。特にここ一年くらいは面白い発見もかなり多いしね」

この女は言う。魔力物質が様々な力を發揮する都度、それをモノにしていると。誇る様子など特にない。ただ事実を淡々と告げている。

「そういう意味であなたは最高の解析対象よ。でも、流石にここまで強力だと扱いも難しそう。だからここで殺しておくべきか、かなり迷ってるわ。回復されたら勝てそうにないしね。ってわけで東京の治安を守る警察官様は、この姉想いの弟をどうすべきだと思う？」

いきなり話を振られて、和宏は言葉を失う。

その目はいつものように薄く笑っていた。だが目の奥は笑ってなどいない。一ヶ月と少し前、命が人間になった直後と同じように、何かを測っている。和宏の中にある何かを。

「ねえ、どう？」

「……」

「許すの？ たいしたものね。私なんて結構長く仕事していた仲間を目の前で蒸発させられてかなり頭来てるのに。私はその瞬間名古屋にいた。そこでもこのこと同じように吹っ飛んでるんだから、都内は確実に全滅よ。それでも許す気になるの？」

その言葉で頭の中の何かがはじけた。頭の中にかかっていたもやが、急速にとけはじめる。そして取って代わるのは、煮えたぎる怒り。

赤い風に指摘されたとおりだ。あまりにも唐突で急激で、しかも自分自身は無傷だったから、眼前に広がる光景が現実だと思ふことを、どこかで拒否していた。悪い夢でも見ているような感覚を、どこかで捨て切れなかった。そう思ったがっていた。

だが、違った。これは現実。弓子も、美由も、命も、早苗も、高原も、別れを告げることさえできずに、一瞬で、完全に、細胞一つ残さずにもう蒸発した！！

怒りが沸騰する。煮えたぎる。それでも和宏はギリギリで踏みとどまっていた。

理性も感情も、怒りに全てを委ねたがっている。しかし本能が叫んでいる。

「待て！！ 奴が何の企みもなくそんなことを言うわけがねえ！！」

赤い風はそれこそアマテラスの対極に立つ存在だ。無償の奉仕なんて言葉から一番遠い。アマテラスの無償の善意は無理でも、赤い風の悪意なら無条件で信じれそうだ。それほどに。

そんなせめぎ合いを内心につづけている間に、打ちのめされたソルが立ち上がる。

アマテラスと同等に近いダメージを受けている。ソルももうフラフラだ。

「邪魔をするなあつ！！」

絶叫がそのまま五本の白い槍となって飛んでいく。消耗は相当のものようだ。赤い風めがけてきちんと飛んでいったのは二本だけ。途中から軌道を修正して予想外の角度から狙うためではない。まったくあさっての方向にとんでいく。

即座自分の周囲に防壁を展開し、赤い風は防衛する。

「くっ……！」

かさなるアマテラスの声。赤い風は自分に当たらない攻撃をわざわざ無効化したりはしない。だから他の誰かが無効化しなければ、またどこかが吹き飛ぶ。

アマテラスから同じような光の槍が三本放たれる。うち二本はソルが放った槍に直撃し、その場で淡い光を放ちつつ消えた。しかし、残り一本はとどかない。アマテラスが放った槍は空へと消えた。しかし、ソルが放った槍は地平線の向こうへ消えた。

そして、空の一部が白く染まる。地球のどこかで地形が一部変わっただろう。

「どうして、人間がこんな力を……」

「無理はやめときなさい。さっきも言ったけど、今のあなたじゃ私にも殺されるわよ。ここは引いてしつかり回復したほうがいいわ。そうすれば私なんて簡単に殺せるから」

「うるさいよ、お兄ちゃんは黙ってて……！」

ソルの怒りが更に鋭くなる。今とどめを刺さなければ負ける側に逃げろと言われた。ソルの内側にいる兄も撤退を促したのだろう。それらがプライドをしたま傷つけたようだ。

そんなソルを面白そうに見てから、赤い風はこちらにやってくる。

周囲を焦土とする攻撃さえ完全に遮断した防壁がある。それでも身構えずにはいられない。

どこまでも果てしなく美しい顔でこちらを見て、言う。

「んー、そうよね。あなたの言うとおりだね。やっぱ怒りに任せて復讐なんて駄目よね。まがりなりにここは法治国家なんだから、法にのっとらないと」

どこまでもあざ笑う。日本という国自体が消し飛んだときに、そもそも国どころか地球も人間も必要としない太陽の化身の行いを、一体何にのっとりどう裁くのが正しいというのか。

「うん、そんなこといってたら、なんかこー、突然今までやってきたことが恐ろしくて仕方なくなってきたわ。とゆーわけで、今すぐこの場で自首させていただきます。あつしはその筋で『赤い風』なんつーケツタイな通り名をもつケチな裏家業の何でも屋でござえやす」

ひざを突き、こちらを見上げながら言う。

作った卑屈な笑みの向こうで、渾身の力で馬鹿にしている。魂を賭けて笑っている。国が消滅したその後で、その残骸とも言える元公務員の前に頭を下げる請負テロリスト。

「もう逃げもかくれもいたしやせん。一年前新宿のホテル爆破などもすべてあつしがやったこととござんす。今更許してもらえろとはおもっておりやせん。命をもって償いやす」

その言葉とともに、赤い風は力を押さえ込んでいく。その証しに目から赤い光が消えていく。今まではソルが突然攻撃してきても即座対応できる状態を維持していた。しかしそれをあえて押さえ込んでいる。回復されたら負ける相手を倒せるチャンス。なのに逃走を促すだけにとどまらず、自分から隙を作っている。

「な、な……」

ソルの声が震えている。ダメージのためではない。理解不能の困惑が原因だ。見える。近未来太陽の化身が激怒の爆発を起こす瞬間が。

ゆつくりと、ソルの後ろにゆがみが見え始めている。混乱きわまってソルはまだ何をすればいいのかわかっていない。しかし遠からずゆがみは白い火竜となって赤い風を、そしてこの星のすべてを消し飛ばす。

それがわかっていて、わかっているから、赤い風は動かない。

本気だ。もし和宏が何も言わなければ、このまま一切抵抗せずに殺される。

何のためらいもなく皮肉と嘲笑に己の全存在を賭ける。見返りなどもとめずに。

無原則の慈愛と同じかそれ以上に、理解不能な極限の皮肉。

今新たに地球を守ろうとするのも、人間には理解できない感情だった。

「ふ、ふざ……ふざけるなあっ!!」

ソルが吼えた。その言葉にあわせ、揺らいでいたソルの背後が、急速に竜の形をとりはじめる。アマテラスが指摘どおり、あのながったらしい詠唱はいらないようだ。

しかし、消耗は相当なものなのか、実体化が遅い。ある程度まで竜の形をとったと思ったら、頭などのパーツが霧散してしまっている。

「くそ、なんでだよっ!!!」

ソルがいらだちまぎれに叫ぶ。「フレア」の発動が遅れているのは、単純に消耗のためだけではない。比重は怒りのあまり我を忘れているほうが大きく思える。

大きさも光の強さもこれまでとは比べ物にならないほど弱い。しかし、それを補ってあまりある怒り。これまで地球も人間も「姉を苦しめるもの」としてしか認識していなかったソルが、今ははつきりとこの美しすぎる女に怒りと敵意と憎悪をもっている。

たかだか一個の人間の分際で、この女は、太陽を、すなわち神を怒らせた。

少しずつ、確実に「フレア」は白い炎の竜は確かなものになっている。

目の前に広がる一面焼け野原以上に、うそ臭い信じられない光景。

皮肉る、ただただそれだけのために、自分自身の命を捨てることさえも厭わない。

命さえたやすく投げ出して、赤い風はある言葉を待っている。

自首する犯罪者に、警察官が言う。自分が生き延びるために。

「そんなことはどうでもいいから」

これまで悪と見なし憎んでこと、罪だと見なし追いかけてきたこと、すべて否定される。それこそが赤い風の待っている言葉。テープに取ってあとで脅そうなんて考えてはいない。純粹にこの場で皮肉ること。それだけが目的。

「あ、ああ……」

こころのほうけた声。今までは声も出せなかったのか、和宏の意識が聞き流していたのか。強烈に揺さぶられる。どうせ全てが死に絶えた世界。いずれのたれ死ぬならばと、せいぜい



意地を張り通すことさえ、傍らにある一つの命によって許されなくなった。

「竜の形は、いよいよ具体的になつてゐる。何も言わなければ、ただ吹き飛んで終わり。ソルの怒りはいよいよ頂点に達する。完璧な形状に近づいた白竜が動き始める。」

「あの、早く逮捕手続きをしていただけねえでしょうか」

「絶妙なタイミングでせかされた。もう止まれない。」

「そんなことはどうでもいい。ソルを殺せえっ!!」

誰一人いなくなる。消滅する。地球のすべてさえ。それが叫ばせた。

片膝をついていた赤い風の肩が、少しだけ動いた。

「わかつたわ。そうよね、命の瀬戸際でそんな細かいことにこだわつてられないわよね」

心底うれしそうに言つと、赤い風はその場で立ち上がり、和宏たちに背をむける。

「消えてなくなれえっ!!」

叫ぶ。それよりも一瞬はやく、赤い風の右手が動く。

炎がその手から生まれる白い炎の竜。

ソルが必要もないのに形作つていたものを、赤い風も同じように形作る。

「にいんぐえんをばあかあにすうるうなあ〜〜」

それこそ「どおこおでえもおどおあ〜」とか「たあけえこおぶうたあ〜」と言い換えて

もまったく違和感がない、とことん緊張感が欠落した声とともに放たれる極大の一撃。

激突する二匹の白い幻想獣。何度目だろうか。白い光がすべてを覆う。

同じく何度目だろう。潮が引くように白い光は消える。視界が焦土にもどつたとき、もうすでにソルはいない。ソルがいた場所には、二つの蛍みたいな光があるだけだった。

その二つの光は、ある方向に引き寄せられる。虫が光に引き寄せられるのとは違う。相手の

意思に関係なく強引に引き寄せられていく。二つのうち特に一つは、かなり抵抗しているように見えた。だがそれも長くは続かない。ややして力を失つて引き寄せられるままになる。引き寄せられた先には、アマテラス。光は引き寄せられてアマテラスの胸に触れた瞬間、小

さくはじけた。そしてそのままアマテラスの身体を覆い、消える。

「……ごめんなさい、少しの間、大人しくしててください」

ポロポロになつた身体を抱きしめながら言う。身体の状態とは関係なしに辛そうな顔で。

「……ソルとラーを封じ込めたんでしょか」

「かもな」

ソルとラーは人間に不可能な方法で力を合わせた。ならば、アマテラスは人間には不可能な方法で、弟たちを取り込み封じ込めたのではないか。

少し身体を引きずるようにしながら、アマテラスがこちらにやつてくる。

「本当に、申し訳ありませんでした」

沈痛な面持ちと言葉の後、やつと和宏たちを守っていた壁が解除される。

それと同時に、むせ返る熱気が和宏たちを包む。これまでも季節はずれ常識はずれの暑さを感じてきたが、それらとは異質な暑さだった。皮膚を刺す熱気だ。

「ほんとうに、ほんとうなんですね」

震えるこころの声。この暑さに、日本が消し飛んだことを感じているのだろう。

しっぽはまっすぐ一本の棒みたいのび、先端だけをさまざまな方向へまげている。理性で事実を受け入れようとすればするほど、感情が否定する材料を探す、というあたりか。

「はい、事実です。ここを中心に半径二千キロが吹き飛びました。日本列島はほぼ全滅です。または、つけた力が世界の都市のいくつか消滅させました。死者の総数は約八億七千万人です」  
アマテラスらしからぬ事務的な口調。それは失われたものの大きさを段階的に理解させるための気配りか。

「なんだ、まだ人割以上生きてるじゃない。十分十分。いつそ人口爆発を食い止めるきっかけになってよかつたんじゃない？」

そのあとにつづく、拍子抜けだと言わんばかりの、赤い風の声。

「……」

声のするほうに身体を向けるころには、全身が最大級の警戒態勢を保っていた。

そこにはいる。すでにアマテラスとの戦いで消耗していたとはいえ、紛れもない太陽の化身にとどめの一撃を加えた女が。

「それじゃ、報酬をもらうわね。いい？」

「報酬？」

「当たり前でしょ？ 人に何かをしてもらってにおいて、謝礼を払わないなんてそんな無法が通るわけじゃないじゃない。私はあなたたちの命を救ったのよ。その礼をする気がないの？」

「知ったことか。お前が勝手にやっただけだろ。大体今のうちにソルを倒さなきゃお前だってどうなつてたかわかったものじゃねえじゃねえか」

「あるところに凶暴な人食い虎がいて、多くの犠牲が出ていた。見かねた地元の若者が命を賭けて戦い、片手片足と引き換えに退治した。そんな彼に『困っていたのはお前も同じ。頼みもしないのに勝手にやっただけだ』って宣告して見捨てるわけね。出世するわ、あなた」

「……何が欲しいってんだ？ 先に断つとくが金はないぞ。からっきししないぞ」

立て板に水とばかりに切り返されて、和宏はしぶしぶ聞き返す。

「……お金がないって胸をはれる人、初めて見ましたよ」

「金がないことを誇ってるんじゃない。正直であることを誇っているんだ。嘘つきは泥棒の始まりだつて教わらなかったか？」

「……」

こころの細い目が、ちくちくと痛い。

「金じゃないわ。ごく簡単なことよ。あなたはただ一言『イエス』とさえ言えばいい。私が欲

しいのはそのばたばたしてる彼女の命。それだけよ」

指差す先にいるのは、こころ。すでに蒼白だったはずの顔が、さらに蒼白になる。

「……な、なんでだ、今更なんのためにこころの命が必要なんだ!？」

「ゼロになるまでに決断してちょうだい。じゃ、カウントダウンスタート。十……」

「復讐か!？ 一年前殺されかけた復讐のつもりか？」

「……九……」

「答える! どういうことだ!？」

「……八……」

赤い風は答えない。大体七〜八秒につきカウントが一へっていく。

カウントの途中だからか、和宏がイエスと言わなかったらどうなるのか。言葉にはしない。

それでも、どうなるかはわかった。これまではどこへともなく発散されていた赤い風の魔力が集中しはじめる。それが答えた。何も言わなければ、逃げたりすれば、あるいは抵抗でもしようものなら、この場にいるもの全員を殺すつもりだ。

「やめろ、止めてくれ!！」

「……七……」

赤い風は止まらない。せいぜい長くとも十秒おきに、カウントをつづける。

(くそ、どうする!?)

逃げるだけ、一矢報いるだけなら幾つか案はある。だが、それでは意味がない。和宏がワンアクション起こす間に、赤い風もワンアクション起こしてこころを殺している。

こころの命を奪うより自分の命を守る方が大事、なんて読みは通用しない。和宏が言わなければ、間違いなくあのまま赤い風は殺されていた。自分が死んでもこころだけは殺すだろう。

相手を刺激しないように視線を送る。必ずしも自分だけでなんとかする必要はない。ボロボロになったとはいえ、和宏よりは数段上の力を持つはずのアマテラスがいる。

むこうも座して待つつもりはなかったようだ。すぐにこちらの視線に気づき、

“ 以前あなたがー”

「そこまで、声にしなきや気付かれないなんて思わないでね。『以前あなたが』ってのは私にもしっかり聞こえてるわ。もう一度やったら即刻全員殺すわよ……六……」

それで、和宏はいよいよ動けなくなる。手詰まりだ。アマテラスと打ち合わせさえできない。

「つてわけで、最後にあなた、何かいっておくことある? ……五……」

こころに対して、声を出すことを許す。

「お願いです。イエスって言ってください! このままじゃ時野さんも死んじゃいます! 生き延びて、私のカタキをとってください!！」

絞り出すような声。それはおそらく事実だろう。イエスとさえいえば、赤い風はきつとこころしか殺さない。和宏を殺すことが目的なら、とっくの昔に殺している。

さつき和宏から「そんなことどうでもいいから」という言葉を引き出したように、赤い風が欲する報酬とは最大級の精神的苦痛だ。このころの命はそれを引き出す手段にすぎない。

「……四……」

「時野さん、お願いします。お願いしますから…… 時野さん……」

「……三……」

わかっている。わかっている。それでも、それでも……

「……二……」

それでも……

「……一……」

「時野さん……」

二人とも死ぬくらいなら片方だけでも生き残って、どうするのか？ こんな荒野の中で。

このあと仮に赤い風を殺したところで、何も帰ってきはしない。

「……ゼー……」

「イエスだ。殺せ。殺したければ殺せ……」

「……」

光った。赤い風の右手から放たれた白い光がこころを飲み込む。

そのあと何かが落ちる。乾いた音。赤い風の攻撃はこころの全身を消し飛ばしはしなかった。

こころの右腕が、焼け焦げた地面に落ちる。胴体という支えを失って。

「こころ……」

かけよる。拾い上げる。この地上に残った、かろうじてのこったこころを。

強烈な高熱によるためか、右腕の出血は皆無だった。ほんのさつきまでこころの一部だったことをものがたるように、その腕は温かい。

だが、こうしている間にも、そのぬくもりは消えていく。

そして、もう、二度ともどることはない。

「じゃあね。依頼料は確かにいただいたわ。それじゃ」

遠ざかる声。それは、誰の声だったのだろう。

「……時野さん……」

「……」

ついにさつきまで何度も聞いた言葉遣いに、あわてて後ろを振り返る。

そこにいるのは、アマテラスだった。わかりきったことだった。声からしてアマテラスのもだった。あたりまえだ、もう、こころはこの世に存在しないのだから。

「……死んだから、なんだったんだよ……」

災厄から人間に少年がいる。八年前死んでおきながら、ゼロから作り直された女性がいる。

ならば、それならば、自分も同じように突き進めばいい。それだけ。

そのはずなのに、胸にぼっかりと穴があいてしまってもできない。こころを取り戻すのならば、この腕は貴重な情報源として今すぐ厳重保管しなければならないのに。

保管って、どこにする？ 誰が協力してくれる？

誰もいない。日本を出たことがない和宏に、もはや知人は物理的に存在しない。

それでも、この場に残しておくことなどできなくて、和宏はこころの腕を拾った。

もう、すでに冷たくなりかけている。

ズボンのポケットで携帯電話がなった。

(誰だよ、こんなときに)

わずらわしげに頭を振って、無視することを決める。

(つて、ちょっと待て!!)

この見渡す限り焦土となった日本のどこかで、誰かが、和宏を呼んでいる。

「はい、もしもし!!」

「……和宏か。無事で何よりだ」

出た直後、少しして、声。しわがれた声は、和宏にとって聞き覚えのある声。

高原政人。多くの名声に彩られた老学者。

「教授、生きてたのか？」

うれしい。喜びがこみあげる。誰も彼もが消滅したわけではなかった。

「ああ、弓子が身を挺してかばってくれたおかげで、なんとかワシらは助かったよ」

うれしさが一瞬にして凍りつく。

(おちつけ、おちつくんだ!!)

身を挺したからといって、必ずしも弓子まで死んだとは限らない。

一年前だって、瀕死の重傷を乗り越えたんだ。きっと今回だって。

「何もかもなくなっただけでわかりづらいが、今日明日のうちには何とかお前の前につれていく。別れの挨拶をしてやってくれ」

自分の中で何か壊れた。その音を確かに聞いた。

その日、人類は人口の一割強を、一瞬にして失った。

## 六 太陽の切り札

目の前では、姉が眼をつむり横たわっている。

べつに身体のごにも汚れはないし、破損したりもしていない。

それでも、姉は息をしておかなかった。すでに身体は完全につめたくなっていた。

あのあと、戸田弓子は高原早苗に抱えられて帰還した。物言わぬ姿になって。

ラーの言葉に不審なものを感じて和宏が連絡を入れた瞬間、あの花瓶が最大発動した。

弓子はそれに飛びついて周囲をなぎ払うのを封じ込め、さらにはその力を利用してソルとアマテラスの激突の余波から周囲を守った。おかげで高原たちその場に居合わせた二十名ほどは蒸発せずにすんだ。それと引き換えに弓子はすべてを使い切り、命を落とした。

そして今、弓子はある小部屋に收容されている。地下に存在する施設は被害を免れたものもあった。今和宏がいるのは、とある病院の地下霊安室である。

そこに安置された姉の亡骸と、もはや片腕だけとなってしまったところ。

そのまえで、一体どれだけの時間をすごしてきただろう。

ドアの開く音。後ろから、誰かが入ってきたようだ。

「和宏、少しは何か食べたほうがいい」

振り返らずとも、声でわかった。残された数少ない知己、高原政人である。

「賞味期限が少々あやしいが、ま、お前ならなんとかなるだろう」

いいながら和宏の傍らに紙袋を置く。サンドイッチとペットボトルが入っていた。

「ありがとよ。むしろ突然あんまり高級なもの食ってからだが驚くかもな」

むこうがこちらを気遣って冗談を言っている。それを理解できる程度には精神が平衡をとりもどしていた。だから、こちらも礼儀でそう返す。

右手首の腕時計を見る。日付の表示は、あの日から三日たったことを和宏に教えてくれた。

「三日か、実感ねえな」

ただでさえ精神が特大級の衝撃を受けているところにここは地下。窓もない。そのため景色による時間の経過をまったく感じ取れない。それが時間の感覚をよりあやしくしていた。

「とにかく何か腹に入れておけ。お前がお嬢ちゃんや弓子を取り戻そうと思うのなら、なおさらこんなところで倒れておれんはずじゃ」

「そうだな、ありがとよ。遠慮なくください」

「食料の札はワシより早苗にいつてやってくれ。生きるために仕方がなかったとはいえ、早苗にとってはかなり辛かったはずじゃからな」

「辛かったって、まさか？」

すでに日本列島の上にあったものはすべて消滅した。しかし、この部屋が破壊を逃れたように、あの瞬間地下にいたため生き延びた人間はいるだろう。

国家機能その他とともに、日本列島の上にあつた食料もすべて消滅した。もはや貨幣紙幣は鉄くず紙くずでしかない。食料などが外部から入ってくる見込みも絶無。そんな状況で、地下に残された数少ない食料を穩便に手に入れる方法などあるだろうか。

「いつそ身体と引き換えに食料が手に入ったほうが早苗にとってはまだしも耐えやすかったかもしれない。ワシが命令したようなものじゃ。殺して奪えとな」

高原の声も苦渋に満ちている。愛する妻に身体を売らせるか、あるいはその手を汚させるかどうかの方法でしか、食料は手に入れられない。今はそういう状況なのだ。

高原が「命令したようなもの」といつているあたりからして、本当に「殺して奪え」と命令したわけではないのだろう。だが、結果において同じようことをさせたのだ。

「つて、ちよつと待て、アマテラスはどうしたんだ？」

和宏が自分の記憶をゆがめていない限り、あの後赤い風はすぐに立ち去ったはずだ。

たとえどれだけ傷ついていようと、あの太陽の化身が赤い風以外の誰かに殺されるとは思えない。誰一人殺さずに無力化させることくらい、苦もなくできるはずだ。

「お前と合流したあと、気がついたらどこにもいなくなっておったよ」

「そうか。すまない」

改めて、自分のふがいなさを痛感させられる。自分と同様の力を持っているとはいえ、早苗は普通の民間人で主婦だ。戦うことも殺すことも殺されることもまったく慣れてはいない。対して自分は警察官だ。今日までこの手で直接人間を殺したことはない。だが殺し殺されることを覚悟する精神修養は、現在正式な警察学校のカリキュラムだ。また、何度か死線もくぐった。

そんな自分がふぬけきったまま、民間人である早苗に戦わせていたのか。

「明日からは、俺が前線に立つ」

「すまんがそうしてくれ。ではな」

そういうと、高原は部屋を出ていく。

そのあと、もう一度姉の亡骸と腕だけになってしまったところを見る。

「悪いけど、しばらくお別れだ」

覚悟をきめる。今までは、それが区切りになってしまふことが怖くてできなかった。だがやはり死体をいつまでもそのままにしておくことなどできるはずもない。ここは薄暗く涼やかで風通しもいいとはいえ、いずれは腐敗する。その前に葬るべきなのだろう。

高原が持つてきてくれたビニール袋をもってこの部屋を出ようとする。

死体といつても特に破損が激しいわけでもない。目の前で食事をしても食欲が失せたり気分がわるくなることもない。それでも和宏は出るべきだと思つた。

食べることができなくなった二人の前で食事をとることが、何か申し訳なく思えたから。

部屋を出て行くと、少し先にまだ高原がいた。廊下の真ん中で棒立ちになっている。

その理由は和宏にもすぐにわかった。こちらへ歩いてくる姿が、棒立ちにさせたのだ。そこにいるのはアマテラス、弟たちを吸収し、唯一となった太陽の化身。

「まずは、理由も告げずに立ち去ったことをお詫び申し上げます」

いつでもアマテラスの口調は変わらない。アマテラスにしてみればそもそも存在する必要さえない人類に対しても、丁寧な口調をくずさない。

「さっそくお話をさせていただきたいことがあるのですが、よろしいでしょうか？」

「立ち話もなんじやろう。一つ上の喫茶店などいかがかな？ 営業はしとらんが」

「ええ、そちらでももちろんかまいません。ですが、よろしければその奥の部屋で。当事者となるお二人の前でお話をしたほうがよろしいかと思えます」

『当事者となる二人』ってのは、姉さんところのことか？」

「はい、その通りです」

「……わかった。ここにしよう。あと教授、よかったら同席してくれないか？」

「かまわんのか？」

「頼む。このあとの話 一人じゃ落ち着いて聞けそうにない」

高原のうなずきを受け取り、和宏はまた弓子とところが眠る部屋へともどる。

「祈らせていただいてよろしいですか？」

和宏が許可すると、アマテラスは二人の亡骸の前に立って一分ほど頭をさげていた。

「私たちの私的でくだらない争いのために彼女たちを含め多くの犠牲を出してしまったこと、あらためて深くお詫びいたします」

黙祷のあと、まず開口一番そういった。

「くだらないなんていわないでくれ。それこそ誰も浮かばれなくなる」

「そうでしたね。軽率でした。失礼しました」

アマテラスは自分の胸に溜め込んでおくべき言葉を口走ったことを軽率と謝った。発言自体を訂正はしない。事実そうなのだろう。太陽の化身には、地球のために身を削るべきか否かなど、あまりにも私的でくだらない争い以外の何でもない。だから訂正しない。

齒軋りする。事実であっても、大切な人たちの死を「私的でくだらない」の一言で片付けられては、とてもにこやかになどしてられない。

だがこらえる。アマテラスがただ和宏たちを罵倒しにくるはずもない。さつき「当事者となる二人」といった。こころや姉が復活する道があるはずなのだ。

「このたび非常に多くの犠牲を出してしまいました。謝っても謝りきれぬことではありません。具体的な行動をもって償いとさせていただきます。お好きなほうをお選びください。一つ、彼女たちを復活させる。ただし、この場合は言葉通り彼女たちだけです。復活させるにはあるていどの情報が必要です。身体が一部残っていないければなりません」

ならば八億に届く死者の大半は復活できない。彼らは細胞一つ残さずに消滅している。



「二つ、過去に干渉してこの現在そのものをなかったことにする。この場合は協力していただきたいことがあります。四月十九日にさかのぼってこの悲劇を原因から断ち切ってほしいのです。ただしこちらの成功率はせいぜい五割。また命や消滅の危険も少なからずあります」

「な……」

「か、過去に干渉するじゃと？ そんなことが本当にできるのか？」

絶句する和宏にかわって、高原が問いかける。

「これまでではできませんでしたから、当然やったこともありません。しかし今ならブラックホールを作り出し、その最奥に特異点を発生させて、あなたを過去に送ることもできるかと思いません。成功率は高く見て五割です。どちらにしますか？」

「……『これまでではできなかった』ってのはどういうことだ？」

「警視庁でお話したとき、『私が行動をおこしたことに四月十九日の影響はない』といいましたが、あれは嘘です。四月十九日に何かの魔力物質が覚醒し、私の負担が倍増したことをうけて、ソルたちは行動を開始したのです。あの赤い風という裏家業の何でも屋と接触していたのも播磨さんの口を封じたのも、これに関連してです。魔力物質に気付いていたのは私だけだと思っていました。ラーもある程度は気付いていたようですね」

「それをどうとう見つけたってことか」

「はい、力を合わせたソルたちと戦い、この一帯が焦土になることではっきりと所在をつかむことができました。その点嘘をついていたことはお詫びいたします」

丁寧な頭を下げてから、表情を厳しくする。

「しかし、これはとてもお話できる内容ではないと判断しました。核ミサイルごときさえもてあましている皆さんに、この力はあまりにも大きすぎます」

「核ミサイルごとき、か」

自分でいうとどこかうそ臭さが抜けない。しかし、アマテラスの「核ミサイルごとき」はう

そ臭さがなかった。和宏（人間）とアマテラスの器の違いのためだろう。

「だ、だが、本来あなたていどの恒星が、ブラックホールを生み出すことはないのでは？」

どちらかといえば涼しい地下室で、高原がすでに汗をかいている。

「それは私が本来の寿命を生き抜いて普通に死んだ場合の話です。皆さんも必要とあれば多少の無理はするでしょう。それと同じです。先ほど見つけた魔力物質の力を借りて一点に力を集中させれば、時間を越えるだけの超重力を作り出すことは可能です」

「しかし、それは……」

高原が必死になって反論を探している。一度死んだ人間を生き返らせるなんて間違っていると思うからでもないだろう。物理学者としての側面からだと思われた。

因果律。原因があるから結果がある。物理学における大前提だ。逆は認めていない。認めたらこれまで培ってきたすべてが崩壊してしまう。

しかし、和宏は高原ほど驚いてはいなかった。新宿でソルとはじめて対決した佳境、一度未来を見せられていたから。時間逆行は、その延長線上にあるものにすぎない。

「いかがいたしますか？ 余計なおせっかいを承知でいわせてもらえれば、一つ目の選択肢はあまりお勧めできません。この国はすでに焦土であり、今後生きていくことも過酷でしょう。

戸田さんならともかく、松永さんにとってこの世界は危険すぎます」

その通りだ。今すでに食料を入手するため、早苗がその手を望まず血に汚している。

「そうだな、高く見て成功率五割。命の危険があらうと考えるまでもねえな」

「ま、待つんじや、和宏！！ そうすれば、すべては解決するかもしれない。しかし……」  
自分でも考えがまとまっていけないのだろう、制止のあとに言葉が続かない。

「参考までにいっておきますが、時間をさかのぼることが許されないというのなら、あなたたちの存在そのものがすでに根元から許されませんよ。本来人類の歴史はキューバ危機で終わっています。今のこの世界は、その後改ざんされた世界です」

「なに？」

「なんだって？」

和宏と高原の声が、期せずしてハモった。

「日本史にも世界史にも普通に記載されている記述だと思うのですが、ご存知ありませんか？七十年ほど前、世界は二つの陣営に分かれて対立を続けていました。そして、あわやキューバのミサイル基地設置を端に全面核戦争寸前までいきかけましたが、両陣営首脳の歩み寄りによって回避された。今ではそういうことになっているようですね」

「この現実が、すでに歴史を改ざんされた結果だったっていうのか？」

「その通りです。本当はそのまま核戦争に突入し、世界は核の炎に包まれたのですよ。しかし大量にばら撒かれた核ミサイルのうち一発が、ある魔力物質に直撃して能力を覚醒させたのです。それで何人かが過去にわたり歴史を改ざんした結果が今の歴史です」

そこまで言うてから、一度軽く頭を振った。

「これは皆さんが引き起こした破滅ですから、救う気はありませんでした。とはいえいくらなんでもそこまで馬鹿ではないと思っていたのですかね。予想の上をいかれましたよ。お喜びください、皆さんはすでにある部分で私を超えています。見習いたいとも思いませんが」

「……お前、本当にアマテラスか？」

疑問をそのまま口にする。「私的でくだらない」という発言をはじめとして、数日ぶりに見たアマテラスは、かつてのアマテラスではありえないことを口走っている気がする。

『警視庁ではじめてお会いしたころのアマテラスそのままか』と質問されているなら答えは



後あなた方が生産する物品と貨幣の九十五パーセント。並び生身の人間一億。一度でも支払いが遅れたらその瞬間地球を消滅させますのであしからず」

日照権。人間が言うならば、「高層建築物などで日当たりを制限されない権利」。しかしアマテラスには違う。「自分が生み出す光と熱を使用させてやる対価を請求する権利」だ。

「正直言って、私にしてみれば、あなたたちが生み出すモノも金も、そしてあなた達自身さえも、一切価値などありません。もらったそばから燃やす手間が生まれるだけの、ゴミそのものです。ですが、私の好意がなければ存在すらできない虫けらが、その事実すら忘れて独立独歩の歴史を培ってきたなどとはざくのは、不愉快の上ありません」

一年ごとに人類が生み出す財貨の九十五パーセント以上と一億の人間の命。人間が人間に対して要求するのは絶対に許されない。だがアマテラスならば正当に主張できる。

太陽なくしては、地球そのものが存在できないのだから。

その暴利に人類が「そんなことしたら我々が生きていけない」と講義してきたら、即アマテラスは即答できる。「なら死ぬ」と。アマテラスには、地球自体が必要ない。

国民が減んだら結局自分も破滅するしかない独裁者ごときとは、比較することさえ不遜。対等に対話するなどそもそもおこがましい。相手を殺したらこちらも滅ぶ。たとえ新たな太陽を作り出す力を生み出したとしても、それは信じる神を変えるだけ。

これこそが、決して埋まることのない、人と神の距離。次元の違い。格の差。軽く呼吸を整えて、アマテラスは表情から笑いを消す。名残惜しげに。

「改めて聞きましょう。いかがいたしますか？」

合計四本の視線が、和宏に注がれる。高原とアマテラスの視線が。

アマテラスは静かに答えを待っている。高原も同じくらい静かに和宏を見守っている。さつき、思い切りアマテラスに笑い飛ばされた直後とは思えない静かな顔だ。

（地球が減ぶならともかく〜）つてのは、俺のために言ったことだったのか？）

なんとなくそう思った。政治の世界はプロスポーツの世界よりもシビアに、ただ結果だけを求められる。そんな生きてきた高原だ。今更ちつぽけな倫理にこだわるとも思えない。

かつてはここを救うために脅迫まがいどころか脅迫そのものの方法まで平然と使った。それを踏まえれば「地球が減ぶならともかく〜」はいよいよらしくない。

「ありがとよ、教授」

簡潔に礼を言う。それを高原は少しだけ笑みを浮かべて受け入れた。

やはり高原は和宏に決断させるためにあんなことを言ったようだ。

時間を越える。人の価値観を根本から揺るがす究極の技術。

その是非を、既存の倫理観や道徳観で計ったところで意味などない。

だから、どんな決断をするとしても、自分だけは絶対に裏切るな。決断の理由を自分以外の

何かに預けるな。まずは自分で決める。そのあとに理由を探せ。

それを伝えたくて高原はあんなことを言った。多分高原とアマテラスはグルだろう。さまざまならしくない言動も、吸収の影響などではなくこちらを思いやっつてのものだったのだ。

つくづく思い知らされる、底知れない、人には計りえない慈愛。

一度、大きく深呼吸する。そして、決める。

「……考えるまでもねえ。あんたがそう申し出てくれるなら俺としては願ったりかなったりだ。遠慮なくその話乗らせてもらう。時間をさかのぼってすべてをリセットする」

「わかりました。では、私は早速準備に入ります。十日後お迎えにあがりますから、体調を完全に整えておいてください。延期もやり直しもききませんのであしからず」

「わかった。十日後だな」

「よろしく願います。では、私はこれで」

そういうと、アマテラスは弓子とところが眠る部屋をでていった。

過去の改変を決断した日の夜、和宏は弓子とこのころの亡骸を土葬した。

これ以上放置しておけば腐敗が始まる。そんなのは見たくなかったから。

物資が決定的に足りない。だから小さな土の山それぞれがこころと姉の墓標。

右手には、二人の形見がある。こころの上着の切れ端と、弓子のブレスレットだ。

「もし俺がそのことを覚えていたら話してやるから期待してまっていてくれ」

告げる。二つの土の山に、再会を約した言葉を。

歴史が改ざんされたあと、和宏がそのことを覚えているのかどうかはわからない。

記憶を残せるというのはアマテラスにとっての話。太陽の化身ならぬ和宏には、そもそもどうやればそんなことができるのかすら不明だ。

何かに書くとか刻み付けるとかすればあるいは簡単に記憶を持ち越すこともできるか？と

か考えて、止めた。アマテラスは言っていた。成功の確率は五割。消滅の危険もある、と。成功するかどうかともわからないうちに、成功した後のことを考えても意味はない。

「もうこない。じゃあな」

振り返り、立ち去る。

見るは過去。ただそれのみ。

そして十日後は、アマテラスに案内されて、とあるくぼみの前にいた。すでに日本列島はほ

ぼすべて焦土だが、河川などの地形からある程度の位置は推定できた。

おそらく江戸川河川敷近く、JR北千住駅から数キロはなれたあたりだろうか。

和宏の目の前で、焦土の一部がすり鉢状になっている。半径十メートル、深さはそれよりやや足りなくて六〜七メートルほどだ。

すり鉢の面も圧倒的な力で焼き払われたように焼け焦げている。それは周囲と変わらない。だが、感じる。ここだけは周囲とは別の力で焼き払われた、と。

「ここにその魔力物質があったのか？」

「はい、このあたりは雑木林でした。そこに誰が建てたかも定かではないお堂があつて、そこに飾られていた銅鏡が魔力物質です」

そういいながら、アマテラスは右肩にさげていたバッグから包みをとります。

包みの中から出てきたのは、言葉通り銅鏡だった。歴史の教科書で見たことがある。

アマテラスがとりだした銅鏡も歴史の教科書などと同じだった。さび付き、ボロボロで、鏡として使うことなどできそうにない単なる金属の板だ。

「……」

しかし、アマテラスの目にはいつもの穏やかさ以外のものがあつた。それは驚き。自分の靴の中にあつたくらいだから、今はじめてみるものでもないだろう。

それでもこんな銅鏡が、自分に新たな力を与えるものだという事実には驚いている。

和宏は、銅鏡から特に魔力物質特有のすごみというか迫力は感じない。

だが、アマテラスの驚く表情だけで十分信用する根拠になつた。

「あ、もうしわけありません」

そんな和宏の目に気がついて、アマテラスは軽く謝る。

「では、これより時間を越える特異点を作り出します」

もうアマテラスはいつものアマテラスだ。三カラットのダイヤモンドを大気中の二酸化炭素から合成した」と言つた時と同じように、緊張感のかけらもない。

アマテラスが、こちらを見る。

「体調のほうは大丈夫ですね？」

「体調は大丈夫だ。ただし、精神のリズムほうがちよつと崩れてるかもしれない。十日間も働かずのんびりしていたなんて久しぶりだからな」

「そうですね。しかし、以前にもお話したとおり、延期もやり直しもできません。そのあたりは何とかしていただくしかありませんのであしからず」

「……わかつてるよ」

少し肩透かしを食らう。ここらなら、姉なら、きっと軽く笑いながら、それぞれの言葉遣いで「普段だつてろくに働いていないだろう」と、指摘してくれたはず。

些細なことからも痛感する。失つたものの、なんと大きなことだろう。

「なるほど、さっきのあれは切り返されることを前提にした軽口だったのですか。気がつかず申し訳ありません」

「そうだな。以後の参考にしてくれ」

微笑むアマテラス。そこには、今失われている人に似たものがある。

しかし、今後、他の誰かの同じような顔を見ても、似たような思いにとらわれることはない。これから、すべてを取り戻すから。

「では、いきます」

アマテラスが、両腕でしっかりと銅鏡を握り締める。

表情から穏やかさがぬけてくる。ラーの力を上乘せしめたときにすら見せることのなかった、緊張した面持ち。これからすることが並大抵のことではないという証しだ。

「ちよおっと、まった。その前に、一ついいかしら？」

その和宏の背後から、いきなりかかる声。

「!?!」

振り返る。その先にいるのは、わすれようもないこころの敵。

赤い風。日本でも超一流と呼ばれていた請負テロリスト。

「過去を改ざんなんて、ずいぶんひどいことするのね。残った六十億人以上の未来は完全に踏みにじるんだ。私だつてこの手で殺したのはせいぜい何万つて単位なのに、すごいもんね。やっぱりあなた犯罪者の素質あるわよ。今からでも、私と組まない？」

万という人間をその手で殺したという宣言も、もうあ気にあまり気にならない。

見渡す限り焦士だ。そんな状況で、どうやってこの女はここまで接近したのか。

飛行ではない。遮蔽物皆無の状況で見えないほど遠くから急接近などしたら、音で気づく。

アマテラスに目配せする。自力だけでどうにかできる相手ではない。

「戦えば勝てます。しかしそれでは本末転倒です」

済まなそうにそういった。そのあと少しの時間差で「本末転倒」の意味も理解する。

戦ったら勝ったとしても、もう過去へ戻れない。確かにそれでは本末転倒だ。

(どうする、考えろ!!!)

身構えながら考える。アマテラスの助力が望めないなら、自力で撃退しなければならない。

「とまあ、そういうわけだね。本当の意味での依頼料をもらいにきたわ」

そういうと、赤い風は上着のうちポケットから携帯電話を取り出して、こちらに投げた。

思わず受け取ってしまったが、爆発などしない。液晶には「通話中」と表示されている。

「……まさか……」

予感が走る。和宏の知己の多くは蒸発して消滅した。彼らが実は生きていたとわかったところで喜ぶだけ。この絶対失敗できない状況で、和宏を揺さぶれるのは――

「こころか？　こころなのか？」

『あ……、時野さん、ですか？　お久しぶりです……』

携帯電話の向こうから聞こえる、こころの声。かなり途切れ途切れだ。

「つてわけで、今、彼女は某所地下にいるわ。左腕には高性能爆薬がつないであつて、五分後には起動するって状況よ」

そういうと、赤い風はもう一つ和宏に何かを投げる。

つづけて受け取ったそれは、プラスチック製の小さな箱だった。液晶には時間が表示されていて、現在の表示は「4：56」。その値は一秒また一秒と減っている。その下には二つのボタン。一つは上に「即時起爆」、もう一つは上に「緊急停止」とある。

「そんなわけで、彼女を助けたかったら『緊急停止』を押してちょうだい。『即時起爆』はそのままの意味だから押さないでね。彼女を殺したいなら別だけど」

「……」

突然現れてはわけのわからないことをほざく赤い風を凝視する。

「あ、言つとくけど彼女は私が用意した声だけの偽者なんかじゃないわよ。こういうことね」というと同時に、赤い風が右手を伸ばす。

すると、三十メートルほど離れたその先で、いきなり光が生まれた。

「今のは、まさか……」

「そ、あなたのお得意の転移魔力弾。もちろん転移そのものも使えるわ。これで蒸発させる一瞬前に、彼女をどつかへ避難させたつてわけ」

無視。別にそんなことを聞きたいわけではない。こころが死ぬその瞬間を聞かせるなら携帯電話だけでいい。このスイッチを渡す意味は何なのか？

「どうしたの？　まだまだ時間はあるけど、そんなに悩むことなんてないんじゃない？　それとも、まさか本当に彼女どうでもいい存在だったりした？」

赤い風は「本当にどうでもいい存在？」と、不安がっているように見えた。

（なんだ？　一体何を企んでやる？）

考える間にも、表示時刻は確実に減っている。気がつけば、残り四分になっていた。

『時野さん……』

電話の向こうから聞こえる、懐かしい声と言葉遣い。

『話は聞こえました。お任せします。時野さんが後悔しないようにやってください』

（だったら『死にたくない。助けてくれ。失敗したらばけて出て一生のろつてやる』くらいいいつてくれよ。そうすりゃ死んでも吹っ切りやすいのによ）

皮肉交じりにそう思う。そんなこころだからこそ、死なせたら強烈に後悔する。

つづけて一度大きく息を吸い、吐き出す。肩から力を抜く。

「こころ、今からボタンを押す。その前に俺の意見を聞いてくれ。俺が後悔しないために必要



なことなんだ。時間はまだ三半分以上ある、頼む」

『わかりました。どうしたんですか？』

「姉さんが帰ってくる前、競馬にいったときのこと、覚えてるか？」

『はい、覚えています。レースより時野さんの燃え尽き方が面白かったですね。特に十一レースの燃え尽き方は絶品でした』

「そう、俺はあのレースだけほかよりも数段落ち込んだ。何でだと思っ？」

『すごく自信がある馬券だったから、ですか』

「そうじゃない。実はあのレース、俺は当初の読みを捨てたんだ。その日のレースごとごとく外して、かなり自信をなくしてたからな」

『……普段アレだけ極貧生活しておいて、まだ自信なんてかけらでもあつたんですか？』

「うるせえよ」

こんなちよつとした軽口のたたきあいにも、つい頬が緩んでしまう。

「俺は自信をなくしてた。その隣には馬語がわかってるのかビギナーズラックなのか、とにかく当たりまくってる奴がいる。意地でも八千円に届かせなきゃいけない。そう思っつて、散々悩んだあげく、俺はお前の読みに乗り換えた。結果はおおはずれ。しかも捨てた読みこそ正解なんておまけつき。こういう自分の読みを信じ切れなかったときが一番悔しいんだ」

『なるほど。そういうものですか』

「ああ、そういうもんだ。俺は通算七十五回とその敗北の悔しさを絶対に忘れない」

『……時野さんつて、半分は悔しさでできてるんですね』

「やかましい、人をどこかの風邪薬みたいにいこうじゃねえ！」

また怒鳴る。また頬が少しだけ緩む。

思いを強める。なくせない。

失敗しても歴史の改変に成功すれば問題ない。

そうだとしても、死なせない。絶対に。

「奴はそれを知っている。だから、奴は俺にいかにも怪しい形で正解を知らせて、散々かんぐらせて、『裏をかいだ』と思わせて失敗させたいんだ。俺を完全に叩きつぶすためにな。だからお前を殺さずにする方法は必ずある。間違えてもその正解は必ずあとで確認できるようなっているはずだ。そうでなきゃ、ここまでする意味がねえ」

もし『即時起爆ボタンこそ正解』『実は両方とも即時起爆』とかのイカサマをしかけてあつたら、和宏は赤い風を恨むだけ。復讐の想いを前へすすむ糧にできる。だが本当に正解があつたら和宏は打ちのめされる。決して振り切れない後悔に囚われる。

テストでカンニングしたら、当たっても「ああ、よかった」と安心するだけ。はずれたら落胆する。「よし、やった！」という達成感に繋がることはまずない。

よくよく考えれば、ソル達を倒した直後の状況は「逆らえば自分も殺されていた。仕方なか

った」と言い訳できてしまう。赤い風の「報酬」としては不完全だったのだろう。「遠慮なくやらせてもらおうぜ」

そういつて、右手人差し指を予告したボタンに乗せる。まだまだ二分以上くある。しかし、右腕全体が凍りついたように動かない。

（本当にそれでいいのか？ 奴なら俺がそう読むことまで読むんじゃないのか？ 最後に『犯罪者を信用するなんてどうかしている』と皮肉るつもりなんじゃないのか？）

皮肉のためには自分の命さえ投げ出すような相手の思考を、論理で読み取ろうとすること自体がそもそも根本的に的外れなのではないか？

（でも、仮に奴の言葉を信じてはずしたら、俺は奴を恨むだけだ）

それでは意味がない。疑えば正解。信じれば和宏は自分と同じくらい相手を憎悪する。つまり、どちらに転んでも赤い風にはうまみがない。そのはずだ。

右指に、力を入れる。

かちり

ばん！！

携帯電話のむこうで、爆発音がした。

血の気が顔から引いていくのが、いやになるほどはつきりとわかる。

「おい、どうした。こころ、こころ！！」

よびかける。しかし、何も答えない。ツー ツーと音を繰り返すだけだ。

全身から力が抜けていくのを、なんとか気力でつなぎとめる。

「……気に、するな。はじめから、こころはあの時死んだはずだったんだ。それが今改めて死んだからなんだ。このあと時間を撒き戻すことができれば、問題ないんだ……」

そう言い聞かせても、身体から力が抜けていく。いずれは回復するだろう。だが、「成功率は五割。命や消滅の危険もある」挑戦の直前に、時野和宏の精神状態は最悪になった。

死んだはずの人間をもう一度死なせて何が悪い。成功さえすればすべて帳消しにできる一度きりのチャンス。

それに集中するために、気にするな。

こころを死なせたことくらい。

それに二十年以上に時間の逆行など不可能な世界に生きてきた部分が、強く異議を唱える。忘れるな、落ち込め。それを気にせずにいられないからこそ、時間までさかのぼるんだらうが。今そんな簡単に気にすることができずにいられるなら、危険を冒してまで時間をさかのぼる必要なんてない。すべて受け入れられ、この世界で生きていけ。

（くそ、こんなことでへこたれるな！！ 吹っ切れ、忘れろ、気にするな！！ このあと失敗したらそれこそおしまいなんだ！！ 自分を責めるな、奴を恨め！！）

自分を奮い起こそうとする側から、疑問がわき上がる。

それを吹っ切り、忘れ、気にしなくなったら、一体何のため時間を超えるのか。

『——時野さん、どうしたんですか？ もしもし、もしもし？』

「!？」

そんなもろもろの疑問が一気に吹き飛ぶ。携帯電話の向こうから聞こえてきた声で。

「……ころ、ころなのか？」

『え、あ、はい。何かあったんですか？ いきなり繋がらなくなったんですけど』

「つてことよ、あなたの勝ち」

どこまでも空々しくさういうと、赤い風は右手を伸ばす。

音もなく、光もなく、次の瞬間ころの姿が目の前に現れた。

「ふえ、あ、あれ？」

突然視界が切り替わったことに、ころは大いに慌てている。

え、え、え、どーして、どーして、なに、なに、なに？

これでもかというくらい慌てふためくしっぽ。その何もかもが懐かしい。

「……ころ、お、おい、だ、大丈夫か？」

しかし再会を喜んでばかりもいらなかった。ころは右腕がなかった。最後に見たときと同じ服装のまま右腕が消滅していた。消し飛んだ腕の周りにはかなり血がついている。

「あ、これは大丈夫ですよ。きちんと処置はしてくれましたから」

というころだが、いきなり片腕がなくなって何事もなくすむわけがない。ただ十日間監禁していたというだけではありえないほど血色がうせていた。

「信じる気持ちって大切よね。いいものを見せてもらったわ。このまま世界が混乱を深めるのも変更される歴史に抵抗するのも、私としては同じくらい面白そうだから、特に邪魔する気はないわ。一度きりのチャレンジがんばってね」

散々やりたいほうだい言いたい放題をつくしたあと、赤い風はまた姿を消した。

その場で消えた。ころをここに連れてきた転移だろう。

そして、あとには和宏ところとアマテラスだけが残る。

「さっき電話越しに話を聞きましたけど、時間をさかのぼるってどういうことですか？」

「そのままさ、今ならアマテラスは俺をあの四月十九日に送り届けることができる」

それにつづいて、いくつかの経緯を説明する。弓子が死んだことなども含めてすべて。

「そんなことが……それで、歴史が変更されたら、この現在はどうなるんですか？」

おずおずと、ころが聞いた。この現在とは、「今の私」ということだろう。

「当然なかったことになります。簡単に言えば消滅します。語弊を怖れずに極論すれば、ビデオテープを上書き録画するようなものですね」

「そうですか。私にはそれがいいとも悪いともいえません。ただ私個人の意見を言わせてもらえば、私をキズモノにした責任はきちんととってもらえるのはうれしいです」

「な、なんだそりゃ？ 俺がお前をいつキズモノにした？」

「見てわかりませんか？ 右腕がなくなっただんですよ？ これがキズモノでない？」

「あ、そういうことか」

世間一般で言われている「キズモノ」の意味で理解して、しこたま慌てた。

「そうだな。その責任は取らなきゃいけない」

あのととき、和宏にもっと力があれば、こころは腕を失わずにすんだはずなのだ。

「そうですよ、きちんと責任とつてくださいね」

微笑みながら、こころ。自分が消滅すると言われても迷いはない。片腕を失ったまま必死に置のみで十日間放置されていたことは、見た目以上のこころを蝕んでいるのかもしれない。

「わかったよ。じゃ、アマテラス、今度こそはじめよう」

「その前にもう一度確認です。成功率五割。命の危険もある。成功してもあなたは消滅する。改変された世界の時野さんはそれを覚えていない可能性大。それでもよろしいですね？」

「ああ、構わない」

「去年の四月十九日でとるべき道は二つ考えられます。一つ、この銅鏡をセアムルグの羽の異常発動前に破壊してしまうこと。二つ、あの屋上をかこつて異常発動の余波の拡散を防ぐこと。どちらの手段を選択しますか？ それによって送り先が変わります」

「そういう手もあるんだな」

和宏は一つ目の方法を思い浮かべて、それで姉やこころが取り戻せると思つて、思考を停止させてしまった。だが、実際にはアマテラスが言ったとおり、二つ目の道もある。

どちらを選ぶか、そのためには、必要な情報がある。

「ちなみに二つあるうち、どっちがー」

「足し算ですか、引き算ですか？ それによって回答はことなつてきます」

二つの方法どちらがより多くの人間にとって望ましいか。そう聞こうとして聞き返された。

人そのものの姿を持つその目は、今、人間を人間扱いしていない。

いや、これこそ太陽の化身の人間の扱い方なのだろう。地球上に存在するすべての人間が自殺しようとは何もないものだけに可能な、冷め切った物言い。人間などただ数字の構成要素。

普段は誰よりも優しいアマテラスだからこそ逆も極められる。神にふさわしい冷徹さ。

『足し算』は、幸福になる人間が増える、『引き算』は不幸になる人間が減る、か？」

「そう理解して頂いて結構です」

「ちなみに人間一人を1とすると、あんたはいくつになるんだ？」

「1です。意思として数えるのですから、持つ力の大きさは何の関係ありません」

謙遜も卑下もなく、ただ静かに言う。それもまた、人にはありえない神の静けさ。

「さっきの質問は聞かなかったことにしてくれ。悪いな」

「いえ、お気になさらずに」

どうせ時間をさかのぼるなら、より望ましい選択を、そう思った。

だがやめた。確かにあの日東大上野キャンパスの屋上で異常発動した力の余波の拡散を食い止めるれば、この騒ぎに限らず今日までの事件のすべてをなかったことにできる。

新宿の事件では、死者だけで百人以上。屋上を囲えば彼らも救える。だが、そうすれば美由はもちろん救われない。パンドラの箱の覚醒も起こらず、今も命は災厄のままだろう。

百人以上と二人、比較するまでもない。だがひよっとしたらその百人の中に、長じて赤い風二号（の親）になるものがあったかもしれない。そう考え出したらきりがない。

頭を振る。振る間にすべてを吹っ切る。

「二つ目の方法でいく」

和宏が求めるもの、それはこの悲劇の改変。それだけだ。

「わかりました。そうですね。それがいいでしょう。難易度はこちらの方が明らかに低いです。

二つ目の方法のほうが影響範囲も大きく、歴史の抵抗も強くなりますから」

アマテラスは右手を上向かせて差し出す。

差し出したとき、掌には何もなかった。だが二秒後には何かがあった。

指輪だ。寶石などはない、素材は銀と思われる簡素な指輪。

「三十分ほど歴史の抑止力に抵抗できるはずです。ただしあまり当てにはしないでください。力の限界に近づくほど光が弱くなるので、参考にするならそちらを」

「わかった。使わせてもらうぜ」

言いながら、指輪を左手の薬指にはめる。きつくもなくゆるくもなくぴったりだった。

「がんばってくださいね。それじゃあ、さようなら」

「ああ、じゃあな」

別れの言葉。歴史の改変に成功すれば、もう次にあうところは別のところだ。

和宏は、先日墓標に対してしたように、今またここに背をむける。

もう振り返りはしない。見据えるは過去だけ。

「こっちの準備は万端だ。はじめてくれ」

「これより時間をさかのぼるための特異点を作成します。少し離れていてください」

言葉にしたがつて、和宏は少し下がる。まず十メートルほど下がってみたが、まだアマテラスはこちらをみている。そこでもう十メートルほどさがったら、小さくうなずいた。

それにあわせてこちらも場所を移っていた。ここはアマテラスから三十メートル。和宏から十メートルほど離れた場所に移動している。

アマテラスは両手でしっかりと銅鏡をもち、抱きしめて胸に押さえつける。

「では、はじめます。天にありし大いなる光よー」

といいかけて、止める。ばつが悪そうに、頭をかく。

「やはり私はこういうのはかっこいいとは思えませんね」

少しはかむアマテラス。殺したわけではないとはいえ、騙し、踏みにじった弟たちのことをより深く理解しようと、真似てみたようだ。

今度は表情を引き締め、無言のまま銅鏡を抱きしめる。すぐに訪れる、莫大な力の予兆。

来た。

目の前に、無が広がる。色はない。白でも黒でもないようで、同時に白でもあり黒でもある。和宏たちとアマテラスの調度真ん中あたりの位置に、半径五メートルほどの何かが出現した。

何かの向こうに広がる焦土の荒野が見えない。

見えないのは、何かがあるから。だが何かはわからない。

しいて言うならば、無。「何もない」という状態がそこにある。

和宏が持っている知識に基づけば、これは本来頭上に輝く太陽よりもはるかに巨大な恒星だけが、死して残す超重力の最奥部。

「ありがとう」

アマテラスに感謝する。歴史改変の正否に直接関係あるわけでもないところを守ってくれている。この力の余波の余波で人間など完全につぶれて消える。しかし、これまでと同じように、アマテラスが守ってくれているから、こころはまだ死んでいない。

「これよりあなたを去年の四月十九日のここにお送りします。一度過去にいつてしまったら、私もサポートできません。向こうで発生した不測の事態はすべて自力で対処していただくことになります。失敗すれば死あるいは消滅です。よろしいですね？」

「成功率五割だろ。そのくらい当然覚悟の上だ」

「なにがあっても、自分を強く意識してください」

ごく小さくうなずく。

「いきます。お気をつけて。幸運を祈ります」

その言葉に、少しだけ頬がっりあがる。

神のアマテラスが祈る相手とは、誰なのだろう。

そんな皮肉もひっくるめて、無は一気に和宏を飲み込んだ。

「……あの、これでもう時野さんは過去にいったんですか？」

あの「何か」が存在している瞬間はとつもない存在感を感じたが、終わってみれば特別な変化は何もない。無とともに和宏の姿も消えた。それだけ。

「はい、おそろく行ったはずです」

『おそろく行ったはず』って……」

そんな無責任な、といいかけて飲み込む。成功率の五割には、「過去までたどり着けない」ことも含まれているのだろう。

「申し訳ありません。しかし、私ではこれが精一杯なのです」

「謝る必要はありません。きつと私たちにはあなたくらいに神様で丁度いいんです」

時間を超えるチャンスは一度きり。次はない。それが今の人間には相応だろう。無制限に時間をさかのぼれたら、きつと先に進めない。何かある都度過去を改変して、改変した結果発生する影響の修正に気を取られ、その場をまわるだけになってしまう。

自分の尻尾を追いかけてぐるぐる回る犬みたいに。

……ちよつと、楽しいかも。

いや、そうじゃなくて。

そこまで考えたとき、目の前が揺れた。

「……………」

頭に走る鈍い痛み。軽く頭を振る。そのあと、目にした光景にこころは愕然とした。

軽く頭を振った間に、いきなり夜になっていたのだ。

「うそ……………」

「とりあえず時野さんは四月十九日にたどり着けたようですね。現在、過去に対する干渉がはじまりました。これはその変化の一つです」

驚くでもなく、アマテラスが解説してくれた。

「じゃあ、もう?」

「いいえ、残念ながらまだそこまではいっていません。現在、彼と歴史をこのままに保とうとする強制力のせめぎあいが起こっているあたりでしょう」

「そうですか……………」

そこで、また頭痛。思わず両手を額にあてようとする。

あてようとして、愕然とする。もう、松永心の右腕は存在しないはずだ。それなのに、一瞬、確かに錯覚などではなく松永心の右腕が復活していた。そして、また音もなく消えた。

嘩然とする間に、こころの眼前が焦土になったり雑木林になったりする。

現在歴史の改変が行われかけているところ。もし改変が無事に成功すれば、焦土たる光景も右腕を失っているところもありえない。あるべき姿をとりもどそうとしている。

すでに何がおこってもおかしくない状況になった。

それでも、こころの目の前に、ある人間の背中が現れたときは心底驚いた。

突然姿を見せたことではない。後姿だけでも間違いないのな、あまりの美しさに驚いた。

「どうやら、過去にはいけたみたいね」

声がいよいよ事実を揺るがないものにする。

突然目の前にあらわれたのは、こころの右腕を奪った請負テロリスト、赤い風。

「そのようですね」

アマテラスが答える。特にアマテラスは驚いた様子もない。

「それはさておきありがとうございます。おかげで助かりました」

「別に礼なんていう必要ないわ。私としてもいい経験させてもらったからね。太陽の化身の立場から人間を思い切り馬鹿にするなんて、そうそうできることじゃないもの」

「謙遜しなくてもいいと思いますよ。彼が躊躇いなく過去の改変に挑むことができたことの何割かは間違いなくあなたの功績です。よって歴史改変の何割かはあなたの功績です」

「そういつてもらえるのは光栄として、あなたもずいぶんノリノリだったじゃない。私はあんなふうに高笑いしろなんて指示したつもりはないんだけどね」

「いえいえ、あの場にいたのがあなただったらどうするだろう、と考えた結果にすぎません。

あれが私の地だなどと思われるのは、少々不本意です」

「ま、そういうことにおいてあげるわ」

殺気立つでもなく雑談している。どうも話を聞くに、アマテラスと赤い風は、和宏に歴史を改変させる決断をさせる課程で、なにかで協力していたようだ。

会話から想像するに、演技指導でもしたのだろうか。

そこまで考えたところで、全身から力が抜けた。その場でひざを突き、倒れこんでしまう。

(そっか、いい加減限界だよね)

これは歴史改変の影響などではない。それをすぐに理解する。

十日前、一応赤い風は治癒で止血はしてくれた。それ以上のことはしなかった。

すでに全身が損耗している。もう長くない。こころ自身が一番わかっている。

だから歴史の改変によって自分が消滅すると言われても、それほど恐怖はなかった。

なんとか今まで意識があったのは、そのうち和宏に会わせてやるという言葉を支えにしていたから。それが終わってしまい、精神の緊張も続かなくなってしまった。

その場でうつぶせに倒れる。結構乱暴に倒れこんだけど、あまり痛くない。

すごく眠い。自分に近づいてきている音さえ、急速に遠のいていくほどに。

赤い風は、目を閉じて、意識を集中させる。

それと同時に、魔力を自分の周囲に展開させ、自分を包み、覆う。

覆った後、すぐ傍にいる太陽の化身を見て、聞く。

「なんとなくこんな感じかなってノリでやったんだけど、これ、どう?」

「悪くはないと思いますよ。あまりあてにされてもこまりますが」

太陽の化身は少し考えてから、そう返事。



「ありがとう、その返事で十分よ。歴史が改変されるときの強制力。どの程度かしらね」

それを思うと笑みが止まらない。時野和宏が歴史の改変に成功すれば、その影響は自分に対しても確実に及んでくる。今日の前で倒れている少女の右腕を一瞬再生させたように。

それに勝利できれば、また一步自分は近づけるだろう。あの人の高みへ。それが嬉しい。

「それじゃあね、色々面白かったわ」

「本当に、その道をゆくつもりですか？」

立ち去ろうとする背中にかかる声。振り返ると、相変わらず穏やかな顔の太陽の化身。

「ええ、もちろん。そのために私は生きてるわけだし」

「あなたの行く道は、あまりにも遠く、あまりにも険しい。あげく行き着いた先には何もないかもしれない。それでもあなたは進み続けるのですか？」

「遠いかどうか、険しいかどうか、行き着く先がどこか、そこに何があるのか、全てを自分で決める。自分で決めたようにしかならない。ある人はそういう力をもっていた。私が欲しいのはそれ。誰かに言われてどうかなるようならまだ届いてない証拠ってことね」

「本当にそこまでいけると思っているのですか？ 私程度の力を持ったところで満足しておいたらいいかがですか？」

赤い風は、笑う。心から楽しそうに。

「わかっていていつてるでしょ。私が最終的に求めているのはその満足する力よ。私は自分を操る力が欲しいの。まがい物じゃなくて本物のね」

「そうですね、そこまでわかっているのであれば、もう言うことはありません。自分が望むままに突き進めばいいでしょう。私はそれを見届けさせてもらいます」

「自由に。とりあえずあきないことだけは保証するわ」

人にあらざる力を持った女と、人にあらざる力をもった紛れもない非人間は、それぞれにふさわしい笑みを浮かべてかわしあった。

完了まで一瞬だった。気がついたら、和宏は雑木林の中にいた。

「これが、確定した過去、か」

周囲に立ち並ぶ杉らしき木々を見ながら、一言。

来た瞬間から頭に流れ込んでくる情報が、問答無用に理解させた。たとえこの場が雑木林ではなく延々と広がる焦土のままだったとしても、すぐにそれが理解できただろう。

(五、四、三、二、一……)

ゼロと同時にクラクション、それほど遠くないどこかで、誰かがならしたのである。

それを和宏は知っていた。分かっていた。このクラクションだけではない。意識しなくても、

「すでに起こったこと」と「これから起こったこと」の情報が和宏の頭に流れ込んでくる。

この世界は、もう死んでいるから、そんなことが起こる。

木々の色、風のそよぐ音、土の臭い。影の涼しさ。すべてある。

だがそれらは「生きてない」。

年代物のテレビに映し出されている映像をハンディカメラなどで記録し再生させると、肉眼で見ている頃にはなかったはずの線というか縞が上から下へ走り続けているのが見える。

古いタイプのテレビは、動画はもとより静止画像も同じ絵を連続描画して表示する。普通の人間の目は速すぎてこの連続描画を認識できない。だがハンディカメラなどは連続描画処理まで記録する。だから再生時には目で見ていたときには見えない縞というか線が見える。

和宏は集中すれば肉眼でもそれが見える。疲れるだけで意味がないからやらないが。

そんな縞が数秒間に一度、空間全体に走りつづけている。

空間や視覚映像だけではない。音も臭いも皮膚感覚も、数秒に一度リロードされていく。

「アマテラスもなかなかシユールなセンスしてやがるな」

これが既に確定した過去の世界の姿、そのものではないだろう。

時間の本質を追究する学問では、十次元とかいう言葉がバンバン飛び交う。和宏たち人間が生活する世界は三次元。それに一足した四次元の世界を人間の目や脳で認識しようとする、すべてがピカソの絵のようになるという。その倍以上ともなれば、人間には認識できない。

この世界は本来そういう領域のはずだ。なのに雑木林として認識できているのは、和宏が行動しやすいように、左手で小さいが強い光を放つ指輪が構成しなおしてくれているからだろう。意のままに動かせるこの身体とて、本当に自分のものか怪しいものである。

「やて、と」

少し意識を未来に集中させると、求めるものはすぐに見つかった。

頭の中に飛び込んでくる映像。社らしき建物を、見えない何かが覆い被さっていく。

そのあとに、ゆっくりと胎動する何か。それこそ和宏が防ぐべきもの。

少し歩くと、そこにはそれらしき建物がすぐに見つかった。

古びた社だ。雑木林の持ち主も壊すことすら億劫で放置しているのだろう。屋根も境内も階段も手すりもすべてが風雨にさらされて誰も手入れはしていない。さっき見た社だ。

そこには、二人の少年が座っていた。境内の前に向かい合って座りカードゲームをしている。

トランプではない。トレーディングカードゲームというやつだろうか。

「あぶないぞ、どいてくれ……！」

せいぜい十メートルほどなのに叫ぶ。しかし彼らにその声が届くことはない。ここは確定した過去の世界。和宏の声ごときが通じるはずもない。

できることは、ただ指輪の力を解放して、社の中にある銅鏡が覚醒する前に、あとかたもな

く破壊してしまうこと。

確定した過去を覆すほどの力は、周囲に被害を与えずにすむだろうか。

カードゲームをするのは、奇しくも二人。和宏が歴史の改変を決意した死の数と同じ。

「……今更、ためらうな！ 俺は六十億人を踏みにじるんだ！！」

赤い風が嘲笑したことは、ある意味正しい。和宏は歴史を改変するという行為によって、死ななかつた六十億以上の人間の未来を消し去るのだ。

八億、世界人口の一割弱が一瞬にして消える巨大破壊。それは大きな変化をもたらすだろう。

世界にかつてと同じままでいることを許さない。その環境だからこそ生まれる出会いも、そこから始まるも幸福も、半端な数ではないだろう。

和宏は、その全てを踏みにする。たかだか二人の死が加わるくらいなんだというのか。

「悪いな、君たちは俺にとってそれほど重要じゃない」

必ずしも少年たちに被害が及ぶとは限らない。だが、それはただの結果論でしかない。

この場で、和宏は彼らの死まで許容して歴史を改変する。

もう一度左手にはめた指輪を見る。まだまだ強い力を感じる。

社までもう五メートルを切った。少年たちとの距離はそれより一メートルほど近い。

和宏が足を踏み出すと、土や落ち葉を踏む音が発生している。しかし彼らはまったく反応しない。無視しているのではない。確定した過去において、この日この時間この場所に時野和

宏はいなかった。その足音が、彼らの耳に聞こえているはずがない。

右腕を社へむけて伸ばす。意識と力のすべてが右手の指輪に集中させる。

「歴史よー」

「力よ」に始まる魔術捜査官の詠唱は、あえてしない。

これは時野和宏という個人の行動だから。

次の言葉を頭に思い浮かべながら、身構える。必ず来るであろう反撃に備えて。

「――変われ！！」

意思がそのまま力となって右腕に集中し、社に向かって放たれる。

白い光は目の前にいた子供たちを紙くずさながらに吹き飛ばし、そのまま社に直撃した。

「……?？」

拍子抜けする。来ると思っていたものがこない。

「……これでおわり、なのか？」

呟いた矢先、倒壊した社からあらゆる方向に向かって、何かがほとぼり出る。

慌てて身構え、それにこらえようとす。しかし、そんなものものともしない。

全てが分解され押し流されていく。溶かされていく。その側から、再構成されていく。

すでにあの破壊を招く要因は潰えた。ならば当然この時野和宏は存在しない。

望ましいことのはずだ。しかし、達成感はなかった。

(これで、本当に?)

溶かされずに最後まで残ったのは。そんな思いだった。

そして、和宏は目覚める。目を見開いた直後にはもう眠気はまったくなく、このまますぐに動き回れそうだ。普段の目覚め方とは明らかに異質である。

「……」

身体を起こした状態であたりを見回す。今和宏はパジャマ姿でベッドの上にいる。十メートル四方ほどある巨大な部屋の真ん中に、それだけぼつんと置かれたベッドの上に。

「……どうということだ?」

見覚えのない、窓さえない部屋にることよりも、自分の状況が気になった、

和宏ははつきりと全てを覚えていた。あの破壊も、歴史を改変しようとしたことも。

「とにかく、今はどういう状況かはつきりさせるか」

あの破壊のあとこんな建物やそれを運営できる組織があるとは思えないので、歴史の改変には成功していそうだ。だがそれ以外は何もわからない。ベッド以外にはテレビもラジオも本当に何もない。外に出るため部屋を見渡し、ある面の壁に見えたドアへと向かう。

ドアまで二メートルを切ったところで、声がした。

『何度言えばわかる。お前に外出の自由は認められていない。さっさとベッドに戻れ!』』  
とげとげしい男の声で、スピーカー越しにそう命令された。

周りを見回してもそんなものは見あたらない。巧妙に隠されているようだ。

「どうということだ!! ここはどこなんだ、答えろ!!」

居丈高な命令に、和宏は怒鳴り返す。しかし、こちらの声は聞こえていないのか意図的に無視しているのか、いずれにせよ返事はない。

「……どうということだ、ここはどこなんだ?」

歴史改変に成功しても失敗しても、こんな状況にはならないはず。しかしそんな状況になっている。とりあえずベッドにもどって腰を下ろし、考えることにした。

「……」

目を閉じた矢先、頭に走る鈍い痛み。あわせて記憶が頭の中で急速に整理されていく。

この世界は間違いなく歴史を改変された世界。姉が帰ってきた翌日に目覚め、記憶をなぜか持ち越していた和宏は狂喜乱舞した。そしてこころと姉と高原にだけ、それを話した。

それを聞いた三人ともはじめは愕然としたが、やがて信用してくれた。

そして、詳しく話を聞きたいという高原によって一席用意され、その場で全てを詳細に話しているうちに突然眠くなり、そのまま意識を失った。そして目覚めたらこの部屋にいた。

そして知らされた。姉も、こころも、そして高原も、誰も時間を逆行して歴史を改変したなんて信じていなかった。最近続いた魔力物質がらみの事件のつど死線さまよった和宏は、パンドラの箱がらみの消耗でとうとう精神が崩壊したと判断されたのだ。あまりに詳細に事件の内容を覚えていることも逆に「重症」と判断される原因になった。そして、今日までおよそ一ヶ月、ずっと和宏はこの部屋に軟禁状態。解放される見込みはない。

「どうして……」

記憶が回復するに連れて感情も鮮明になってくる。だれかれ構わず放言したわけではない。本当に信用できる相手を選んだ。なのに全く信じてもらえないのが悔しく、悲しかった。

「くそっ……」

右拳をベッドに叩きつける。脱出を考えるのは無駄だ。この部屋は東大上野キャンパスの特別実験場と同レベルの隔離能力がある。核爆発でもびくともしない。和宏の魔術では傷一つつけられない。実際試した記憶もよみがえってきているので、ゆるぎなく確かだ。

こうして何も無い部屋に軟禁されてはや一ヶ月。楽しみは三度の食事とそのときに差し入れられる新聞だけ。和宏が目覚めたからには、時おかずそれらが運び込まれてくるだろう。

実際それから五分ほどでさっき近づいたドアが開いた。

そしてそこから見慣れた姿が二つ。五体満足なこころと、死んだはずの姉弓子。

全てを犠牲にして取り戻そうとしたもの。しかし、こんな形ではとても喜べない。

「おはようございます。はい、今日の食事です」

そういつてこころはトレイに乗せられた無個性な本当に栄養補給以外に何も考えられていない、病院食みたいな食事を渡してきた。

はじめてではない。こんなことはこころ一ヶ月で何度かあった、と記憶がいつている。

和宏はトレイの上のパンをつかみ、ちぎって口に運ぶ。

「だ、だめです!! 食べちゃだめです!!」

その瞬間、こころがはじけとぶように動き、和宏の手から乱暴にパンを払い落とす。

「猛毒が入ってます!! 死んじゃいます!!」

「な……」

こころの絶叫に、混乱がきわまる。パンはごく普通のパンだ。色も匂いも変ではない。色も匂いも変なパンの耳を食べ続けてきたので、自信を持って断言できる。

それなのにこころが毒入りとわかった理由は一つだけ、毒入りだと知っていたのだ。

姉の悲しそうな表情が、最悪の予想を裏打ちしてしまう。

「……普通の長期刑囚でさえ、病気になるたりすれば養うのにかなりの費用がかかるわ。ましてあなたは武装解除さえできない。いつ直るかわからない妄想症のために、膨大な費用をかけて隔離するなんてことはできないの。しかもあなたは魔力物質にかかわる事実も多く知りすぎているわ。なおさら放置してはおけない」

だから、毒入りのパン。弓子やこころ自身の判断ではないだろう。国がそう判断すれば、逆らえるはずもない。ならばせめて見届けようとした。

そう信じた。弓子やこころが進んで殺しにきたなんて信じたくない。

「ごめんなさい。あのパンを食べてれば、眠るように死ねるはずだったのに。……でも、そんなの嫌なんです。せめて……せめて、私たちの手で……」

こころの顔は悲痛だ。かつて、絶対避けられない未来を見せ付けられ、死は避け得ないと覚悟したときと同じくらい、いや、それ以上に。

「ちよっと待ってくれ。俺は正常だ。本当だ。歴史は変わったんだ。信じてくれ！」

「ええ、そうね。私たちの歴史は大きく変わってしまったわね。魔力物質のせいで」その言葉とともに、弓子が動く。和宏と同等の身体能力で間合いをつめてくる。

十メートルほどをコンマ数秒の間に縮め、何の躊躇もなく顔面へ左掌打を放ってくる。それ自体に殺す威力はない。だが脳を揺らし、とどめをはなつための時間を作る一撃。

ベッドに座った姿勢から身体を仰向けに倒し、左掌打を回避する。さらにそのまま勢いを利用して後ろに転がり距離をとる。

だが、その間に弓子も動いていた。追いかけてベッドにあがった弓子が左足を振りぬく。本来脇腹を叩き払う蹴撃は、ベッドの高さによって和宏の頭を狙う攻撃となっていた。

後ろに転がった勢いでまだ体勢を立て直しきらないうちにさらに後ろへ跳ぶ。

靴下に包まれた弓子の足が和宏の前髪だけを切り払った。

「ねえさん、止めー！」

といいかけて口が止まる。右方向から感じる魔力の気配。そちらを見れば、こころが右手を突き出している。そこには普通の魔力銃ではありえない強さの光がすでに集積している。

強化魔力銃。和宏が転移魔力弾を持っているように、こころも普通の魔術捜査官が持っていない魔術製品を持っている。アマテラスはもとより魔力物質相手ではあまり使い道はないが、和宏相手なら十分殺すこともできる道具だ。

「ごめんなさいっ！！！」

言葉とともに、白い光が和宏を襲う。

二度の回避で完全に身体が泳いでいる。さらなる回避も飛行ももう間に合わない。

「くそっ！！！」

全ては防ぎきれない。それでも全力を振り絞って防壁を展開する。

光が痛みとなって和宏の身体を焼く。

だが、その攻撃に押し飛ばされることで、いくらか距離をとることができた。

「頼む、待ってくれ。信じてくれ、俺は正常だ。狂ってなんかいない！！！」

「大丈夫よ、あなただけ寂しい思いはさせない。私たちもすぐに追いかけるから」

「止めてくれ！！ 死ぬなら俺ひとり死ぬ！！！」

叫ぶ。しかし、弓子たちの表情は変わらない。

「なんで、なんでこんなことに!!」

一体何をどう間違ったのか。すべてなかったことになるはずなのに記憶を持っているのか。救いたかった存在を、今度こそ決定的に死なせるために、時間をさかのぼったのか。

これが己のためだけに巨大きわまる力を使ったものへの罰だともいうのか!?

わからない。何をどこで間違えたのか。

”……され、ないで……“

絶望で満たされた頭の中に、聞こえる声。

「!?!」

驚き、慌てて周囲を見渡す。さつきからここは目の前にいる。ずっと耳に聞こえる話で言葉をつむいできた。それなのに、今突然頭の中にこころの音が聞こえた。

”騙されないで。気をしっかりもって!! まだ何も変わってません!!“

改めて聞こえるこころの声、それとあわせて部屋を含めた空間そのものに線というか縞が走る。あの雑木林と同じように。

右手が、特に指輪をはめた薬指が強く光る。それに比べればいくらか弱いものの、上着のうちポケットも同じように光る。こころと弓子の形見を入れた場所が。

“何もかもなかったことになっても、私は時野さんを疑ったりなんてしません。だから、だまされしないで。そこにいるのは私じゃありません。がんばって!!”

“……そうよ、気にすることなんてないわ。それは私じゃない……”

すでにこちらはこの世に実在しないからだろうか、かなり力が弱い姉の声。

「??? まさかっ!!」

何か異変を感じて、距離が開いた後は静観していた弓子が動き出す。

再度間合いをつめる。それと同時に跳ね上がる左掌打。あごめがけて一直線に。

「っ!!」

突然の攻撃に反応が遅れる。左掌打はかわせたものの、紙一重だった。身体を後ろに引くのが精一杯。次を考えている余裕はなかった。のけぞった姿勢で大きな隙を作ってしまう。

(おい、姉さん。こころ、どうしたんだ!?)

頭の中で呼びかけてみる。しかし、さつき勇気づけてくれた声はもう答えない。

アップー気味の掌打ははじめからけん制だったのか、掌打で身体が泳いだのは一瞬。和宏がよけることで精一杯の間に体勢と重心を立て直し、今度は左足を軸に身体をひねる。

そのまま右裏拳が和宏の即頭部めがけて襲い掛かる。

(防げ!!)

右腕をあげ、防御のために力を込める。しかし、何もこない。

「???」

疑問に思っている間に、弓子の右手は和宏の鼻先へ来ていた。

右バックブローは軌道を変えて和宏の右腕との衝突を回避し、和宏の鼻先へ移動していた。いつの間にか広げられていた姉の右手には、すでに白い光が集中している。

至近距離から顔面直撃。防いだら何割かはダメージを受ける。よけるしかない。

足から、強引に力を抜く。エレベーターより数段急激に景色が下方向へずれる。目の前に見えるものが、弓子の顔から胸、さらには腰へと流れるようにかわっていく。

そして、腰のさらに下、足は動いていた。

和宏にそう回避させることこそが狙いだったのか。右足のつま先が胸を突き破ろうとせまる。防御、と意識するのが精一杯だった。何かははじけ、吹き飛ばされる。

「っ！！」

吹き飛ばされながら、無理やり足に力を入れて地面を蹴り、吹き飛ばされる威力も利用して距離を取り。迎撃の態勢を整える。

直後、右手から感じる力の気配。そちらを見やれば、またこちらがこちらに左腕を突き出しているところだった。その先には、すでに白い光が生成されている。

（くそっ！！）

全力で防壁を展開する。

「ぐ！！」

しかし、完璧には防ぎきれない。十分な集中をしている余裕もなかった。

いくらかが防御を突き破って、和宏の身体を焼く。和宏の身体を押し飛ばす。

押し飛ばされる間に、今度は視界の左半分が白くなった。

炸裂。

ほとんど直撃だった。こころの魔力弾の防御に意識と力を注ぎ込み、なんとかしのぎきったと思つた直後、同等の威力を持つ攻撃が和宏を左から打ち抜いた。

五メートルほど吹き飛ばされて、さらに同じくらいの距離をころがる。

ころがって跳ね起きたとき、その場には弓子が間合いを詰めていた。

吹き飛んでころがったあとひざを突いている状態の和宏。その頭を吹き飛ばそうと、弓子の右足が振りぬかれようとしている。

「っ！！」

もう一度後ろへ跳ぶ。

ばん！！

（しまった！！）

弓子は振りぬこうとしていた右足を強制的に地面へ叩きつけた。

フェイントに和宏はまんまと引っかけた。身体が宙に浮いている。

右足を軸にしてさらに踏み込み、左ハイキックで和宏の頭を吹き飛ばそうとする。



(飛行——いやー)

防壁。身体が浮いているのが災いした。回避も地面を蹴って同じ方向に動き衝撃を緩和することもできない。その認識が頭の中で防御以外の選択肢を考えさせてしまった。

その一瞬の遅れのためにもう手遅れ。自覚していてもせめて身体をよじる。

よじるついでに、一瞬視界の片隅に入った弓子の顔。

笑ってなどいなかった。動きの鋭さとは反比例した悲しげな顔だった。

これが、本当に——

少しでもガードしようとあげた右腕に、何か重いものを叩きつけられたかのような感触。それに遅れること刹那、身体ごと吹き飛ばされる。

「が……」

今度は壁に激突した。背中から叩きつけられて、息のすべてを強制排出させられる。意識がくらむ。力が抜ける。

それでも、目は閉じない。左手にありつたけの力を込め、弓子たちの前に広げて突き出す。

その動きだけで、和宏の数メートル手前で弓子の動きが止まった。

和宏と弓子の距離は数メートル。和宏は一方的にやられていて、しかも弓子は無傷。砲台として遠距離から援護してくれるところもある。今更弓子が動きを止める理由はない。

それでも弓子は足を止めた。まるでこれから和宏の言葉がわかっているかのように。

いや、わかっているのだろう。さっきまで弓子とは十メートル以上離れた場所にいたはずのところも、いつのまにか弓子の側にやってくる。和宏の言葉を聞き逃さないために。

「一度しか言わない。だからよくきいてくれ」

念を押す。二度言いたい言葉でもない。

「わかったわ。どうぞ」

「お願いします。時野さん」

二人の声は、どこまでも和宏の記憶の中にあるものと同じだ。

(ずいぶん手の込んだ真似しやがるな、歴史の抑止力さんよ)

確実なのはいることだけ。性格があるのかも不明な存在へ、声には出さず皮肉る。

歴史の抑止力。アマテラスに「歴史改変の成功率は高くて五割。命の危険もある」と言わしめた存在は、結局和宏が社を破壊するまで何もしてこなかった。

目の前の弓子(?)は和宏の頭の中の声を悟って妨害に入った。なぜか? 続きを聞かれたら、自分たちは外見がそっくりなだけの偽物とばれるから。それが普通の考え方だ。

「歴史改変などしても、その先にあるのは以前を超える悲劇だけ」

「違う。そんなのは歴史の抑止力が仕掛けた罠だ」

どちらが現実であって欲しいか? 当然後者だ。だから耳に心地よい情報を提示されれば、

喜んで飛びつく。そうして目の前の二人は偽物だと決めつけ致命傷を与えた後、息も絶え絶え

なこのころの声を頭に送り込まれたら、つまりあの激励は目の前のこのころ(？)たちの演技だと宣言されたりしたら、それこそ最悪の形で証明されていた。

このこのころたちが本物かどうかなど関係ない。記憶を持ち越すかどうかも関係ない。お前は歴史を改変したあと、いつか必ず目の前にいる弓子やこのころに不満をもつ。そしてそのとき都合な情報を示されれば、喜々として殺す。今と同じように。時野和宏がそういう本性を持っている限り、時間をさかのぼったあと行きつく先も不幸しかありえない。お前は今度こそその手で殺すために姉を生き返らせ、このころを回復させるんだ。

危なかった。自覚するより先に実例つきで突きつけられたら、二度と立ち直れなかった。そうして歴史改変に挑む気力を根本から叩きつぶす。それが本当の狙い。

成功率五割と言われながら抵抗らしい抵抗もなく成功したこと。露骨なまでに不幸だけの世界。都合良く聞こえてきた激励の声。それらがそう悟らせた。

「どいてくれ。五秒待つ。五秒以内にどかなかつたらー」

声に力を込める。「聞こえなかった」などとは絶対いわせないように。

「あんたたちを、殺す」

確かな意思を込めて、言い放つ。

相手の戦力はむこうが明らかに上だ。手加減など考えていたらこちらが殺される。

終わってみれば殺さずすむかもしれない。だがそれは結果だ。この瞬間これから和宏は、弓子とこのころを殺すことも念頭においた攻撃を放つ。

「歴史の抑止力に逆らえるならさっさと消えてくれ。余計なことはしたくない」

目の前の二人は本物の弓子とこのころだ。そう確信する。敵は歴史の改変を阻む力。どこかの時間から本人たちを連れてくることくらい簡単にできるだろう。

そう決める。少しでも言い訳の余地を作れば途端に流される確信がある。だから二人は本物だ。ひよっとしたら操られているだけかもしれない。その二人をこの手で殺す。

「ごめん、歴史を変えたら俺は絶対消えるから。次会う俺は俺じゃないから」

それくらいしかできることはない。償いになるのかもわからない。それでも謝っておく。広げていた左手のひらを拳とする。そのまままずは人差し指を立てる。

同時に手全体に力を入れ、魔力を集中させ始める。

すべての指が伸びきった瞬間魔力弾を放ち、そのまま距離を詰める。全力で決めにいく。つづけて薬指。

(いくぞー！)

魔力だけでなく、傷ついた身体に力を入れなおす。

そして、小指を伸ばそうとしたとき、弓子が笑った。

今までの和宏に一方的な攻撃をしていたときとは違う。

和宏がよく知っている、和宏が取り戻したいと願っている笑顔で。

「どうやら、乗り越えたみたいね」

そういいながら、弓子は肩の力を抜いて和宏の前に歩み寄ってくる。笑顔を見た瞬間、和宏はもう手から力を抜いていた。魔術の準備も止めていた。必要もない。それを直感したからだ。

弓子は無防備を象徴するように、両腕を身体からはなして広げると、和宏の前に歩み寄る。そして手が届く距離になった時、いきなり和宏の身体を抱きしめて胸にうずめさせた。柔らかいぬくもりが和宏を包む。最後にこんな風にされたのは一体いつだろう。

胸のぬくもりだけではない。抱きしめながら治癒を発動させて、姉が自分で与えたダメージを取り除いていく。その状態を三十秒ほど続けてから、ゆっくりと身体を離れた。

「ちよつと見ないうちに男の顔になったわね。うれしさ半分寂しさ半分ってあたりかしら」  
実際に、今の姉は、そんな感じの顔だった。

「正解よ。私も松永さんも、歴史の抑止力にある時点から呼び出された本物。ただしあなたの『個人的な動機で歴史を改変することに対する後ろめたさ』を触媒に呼ばれたから、それほどの強制力はなかったみたいね。定められた役割に逆らうこともできるみたい」

「逆らう」という言葉が禁則事項だったのだろうか、弓子とこのころの身体が光に包まれる。少しずつ光が強くなるのと反対に、身体の輪郭が失われていく。

「ご、ごめんさい。大丈夫ですか？ 痛かったですよね？」

自分が消滅しはじめているのに、心底すまなそうな顔で謝罪するところ。

「呼び出されたそばから抵抗して消えようとも思ったんだけどね、どうせだから乗らせてもらうことにしたわ。これもありえない未来じゃない。本当にそこまで覚悟してる？」

歴史を改変する力。すべてを本当になかったことにできる力。もし何かの間違いで記憶を持ち越してしまったら、こんなふうに露骨な排斥はされなくとも、いいような疎外感、孤独感はずっとぬぐいようもなくついて回るだろう。たとえ話を信じてもらえても。

「ああ、覚悟の上だ」

即座に答える。何故か記憶が残っていて死ぬほど後悔するかもしれない。

それでも、可能性の存在を知ってしまった以上、何もしないなど耐えられない。

「本物の歴史の抑止力はこれからよ。覚悟しておきなさい」

「わかった、気をつける。ありがとよ」

「どうせ無理するなっていうてもどうせすり切れるまで無理するでしょうからね、あてにしてるわ、和ちゃん。しっかり私を生き返らせてね」

すべてをお見通しの表情でさういうと、弓子はその場で軽く空を見上げた。

それによって、弓子の身体は急速に輪郭を失いただの光の塊となった。かと思ふところめがけて飛んでいき、身体に衝突してはじけた。

「ふにゅっ!?!」

これはこころにとつても予期しないことだったようだ。悲鳴をあげて身体をすくめるだけでよけるとか防ぐとかの動作はまったくしなかった。

「……あれ？」

痛みはなかったようだ。やや意外そうに自分の身体をへたぺたさわったりする。

だが、何のためにそれが行われたかはすぐに和宏も理解した。すでにもうかなりおぼろげだったころの姿が、ある程度まで輪郭を取り戻している。自分と同じくらいの会話時間を与えるためにこんなことをしたのだろう。

「あ、すいません。ちよつと待ってもらえますか？　すぐ終わりますから」

そういうと、軽くうつむく。

「づむむ！　ぐきゆる！！！！　どぼぼむ！！！！」

「……？？」

音が実際に聞こえたわけではない。しかし、そんな音が聞こえると思うほど急激にこころの身体が変化した。バストとヒップが三回りは大きくなり、逆にウエストは三回り細くなる。

もはや体型とはいえない。形状だ。人間というか生物の限界を逸脱している。和宏が変わり果てたところをみて連想したのは砂時計だった。

「お、おい、大丈夫か？　まさか歴史の抑止力にやられたのか？」

数秒間唖然としてから、あわてて声をかける。

「あ、なんでもないです。なんでもないですよ。ええー！！」

となんだか取り乱しつつ、もう一度うつむく、すると今度はゆっくりと変化する。バスト、ウエスト、ヒップとも静かに元に戻った。

「ほ、ほら、何でもないでしょう。どーせこの身体はイメージみたいなものなんだから、ぼんきゅつ　ぼぼーん　ってぐらまあになつてみたかったなあ、なんて思つてません！　ええ、絶対思つてませんともー！！　あまつさえ戸田さんが自然に時野さんを抱きしめてうらやましいなあ、とか思つたあと、今更私が『つづけて私が同じことやったら戦力の差が鮮明になるだけだああああああ』とか思つてがっかりなんてぜつたいしてませんからね！」

「……そうか」

「それ『戦力』って表現するようなものか？」とかは思つてもあえて言わない。

普通なら言わずにおくことをことさら口外することにより本心を冗談めかす。そういう狙いもあることはある。だが、この場に関して言えばそれはメインの狙いではない。

まくしたてるまえ、表情は落胆と驚きが大半を占めていた。まくし立てたあと、こころの表情は二大勢力の対立は終わっていた。驚きと落胆とそして悲しみの三すくみになっていた。何のための悲しみかは、すぐに理解することができた。

「確かに、姉さんのあとお前の胸に抱かれたら、物足りなく感じるかもな」

「……」



その間抜け面を見たら、思わず殴りつけくなるかもしれない。

「それでもいいさ」

かまわない。この弓子やところを取り戻したいという気持ちそのものがなくなるとしても。何も無い部屋の光景が少し歪む。次の瞬間にはあの雑木林に戻っていた。

相変わらず、数秒に一回の割合で上から下に線というか縞が走っている。

覚悟をきめて、再び境内の前まで戻る。あたりに子供たちのがいた場所までもどる。

戻った直後に、理解できた。これからが本番だ、と。弓子に警告されなくてもすぐ理解でき

たろう。帰ってきた雑木林には、時間を超えるアマテラスも超えた巨大な力があつた。

それは和宏の前方五メートルほどに、社と和宏の間にわってはいる形で実体化した。

まずは水のように無色透明な粘土がこねられて、人の五体を大まかに形作る。

そのあと、細部が確定してできあがったのは、時野和宏。顔や体型はもとより、服装や、さつきころ達に受けた衣服のダメージまで（おそらく）寸分違わずに作り出された、洗顔時などによく見る「鏡に映った時野和宏の顔」の持ち主が目の前に出現する。

「俺のセンスも結構反映されてるわけか」

この世界が本当にアマテラスのセンスだけで作られていたら、こんなものは出現しない。

髪型を無視しても、人間の顔は左右対称ではない。鏡に写る顔と身分証明書の写真を並べれば違いが分かる。何も考えず和宏の顔をコピーすれば、できるのは身分証明書の顔だ。

「つたく、無駄にあがきやがるな。あの場で大人しく死んでりゃあよかったものを」

「鏡に映った時野和宏の顔」の持ち主が笑いながら言う。「普段喋る和宏の声」で。

いよいよ確信する。この和宏は意図的に作られたものだ。ただのコピーなどではない。なぜ

なら今の声は、普段和宏が話をしているときに聞くものと寸分違わなかったから。

自分の声を何かに記録して再生すると、個人差はあるが、普段自分が話している声とは違う印象を受ける。喋りながら聞く自分の声は、頭の中で何度も反響したものだからだ。対して、何かに記録した声は、その反響がないので、違う印象を受ける。

声や顔からしてこの有様。周りの誰もが理解していることを、自分だけが理解していない。

『自分のことは自分が一番分かっている』なんて、大ウソもいいところ。

「鏡で見た顔と普段話す時の声をもつ時野和宏」の意味はそれである。

「俺のセンスじゃなくて歴史の抑止力自体がねじくれ曲がった性格なのか？」

さつき本物のところたちを偽物だと決めつけて殺させようとしたかと思えば、今度は自分が似て非なる和宏の姿で現れた。並大抵の性格の歪み方ではない。

「んなわけねえだろ。俺の、つまりお前の感性だ。俺はれっきとした時野和宏だ。この力は俺が一次的に歴史の抑止力から借りてるだけだ」

やはり「普段話している時の声」でいう。だからいよいよ違和感が大きくなる。

今和宏達が並べば、こころも弓子も高原も、皆自分を本物だといってくれるだろう。だが、

左右逆にならない特殊な鏡を常用しているわけでもなければ、録音された自分の声を常に聞く生活もしてない和宏にとって、本物認定されなかった方こそが自分の声であり顔だ。

誰もが「お前こそ」本物という中、時野和宏だけは対峙する顔と声こそ本物と思う。周囲の誰もが「本物が偽物に勝った」と見なすなか、時野和宏だけは自分を殺したようなやりきれない気分になる。皮肉極まる結末。時野和宏はこんな演出をするほど性格悪かったらうか。

「一つだけ言っておく。歴史の抑止力の力を借りてさっきの姉さんたちを無理矢理引つ張ってきたのは俺だ。でも、俺自身はこの瞬間を待ち望んでいた」

『歴史改変に成功したことを死ぬほど後悔している』とでもいいたげだな

「同じ時野和宏のよしみだ。消す前に好きなだけあがかせてやる。せいぜい悔いを残さないように全力を絞り尽くすんだな」

こちらの言葉は無視してそれだけを言う。実力の差を確信しているからだろう。姿形はほとんど同じだ。しかし指輪の力を組み入れても、互いの持つ力はあまりに違いすぎる。

だとすれば、取るべき道は一つ。

あくまでもさりげなく、しかし右手にあらん限りの力を入れる。

「動作さえさりげなくすれば気付かれないとでも思ってるのか？ バレバレだぞ」

皮肉というより面倒くさそうに指摘する。だが無視。さらに力をいれる。

（あとのことなんて考えるな、今ここですべての力を使い切れ！！）

むしろ恐怖に駆られて全力を集中する。半端に指輪の力を残したら、記憶を持ち越してしまいかも知れない。本当ならすべてなかったことになるはずなのに。

だから、すべてを絞り尽くす。指輪の力も、体力も、魔力も、すべて。

右手が熱い。煮えたぎる。一部か全部か、太陽の化身の力に直接接触れて。

限界まで集中を高める。それでも、まだ遠く及ばない。

ならばむこうに弱くなつてもらう。恒久的である必要はない。一瞬でいい。

（疑問を持つな！！）

本当にこんな方法でいいのかと疑問に感じる自分がいる。だがそれしか方法はない。

限界まで力をためたまま、少しだけ肩の力を抜く。それはすぐに向こうも察するところとなった。何を企んでいるのかと、興味深げにこちらを見る。

相手が見落ときかないように、ゆっくりと、口をひらく。

「なあ、お前さ」

息を溜める。

「このころのこと、好きだろ？」

「……は？」

（いけっ！！）

足ではなく、右手に力をいれる。

限界まで圧縮された力が一部後方に解放されて推進力となる。

それこそ転移したのではないかと思うくらい急激に歴史の抑止力との距離が詰まる。

「……！」

やられた、と表情をこわばらせている間に、右拳を自分そっくりな胸へと伸ばす。

はじける。腕の感覚はその瞬間に消えた。痛みも遅れること一秒で感じなくなった。あとは全てがゆっくり削られていくだけ。

「あああああああああああああああああああああああああああああつ……！」

この攻撃に、すべてを注ぎ込む。全身を弾丸とした突撃だ。拳は勢いを一点に集中させて突破力をあげるために突き出しただけ。

「く……そ……」

自分と全く同じ声が、苦しげにうめいている。

アマテラスもやったことだ。実力で劣る側は長期戦や消耗戦は絶対避けなければならない。

すべての力を一点に集中させて相手が実力を出し切る前に押し切る。それが唯一の活路。

(……これ、か?)

すでに身体の間は感覚はない。それでもわかる。核は近い。それを碎けばこちらの勝ちだ。

届く。

触る。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ……！」  
触ったことが契機となり、押し込められていたものが一気に吹き出る。

届いていた手が、一気に引き離される。

「……！ が……っ……うあ……」

吹き飛ばされた。激突した。背中を強烈に打ちつけた。

背中では何が爆裂してから、やっとそれらを理解した。普通の本など何本並べたところで絶対止められないはずの速度で吹き飛んだはずだ。それなのに無数立ち並ぶ木々のうち、特別たくも無い一本に激突しただけで、吹き飛ばすことを止めた。

「く、そ……」

もう痛みを感じる神経などとうに機能を失っている。それが悔しかった。失敗した。一度しかないチャンスをものにできなかった。それを痛みでごまかせないのが悔しかった。

「……まともにぶつかったら勝てないからってああいうこと……する、か、俺なら」

ほとんどぼやけている意識の上にかぶさる自分の声。認めたくなかったが、いよいよ決定的になってしまった。失敗した。一度きりのチャンスをものにできなかった。

「狙いは悪くなかった。それでも力の差がありすぎたな」

同意する。一瞬だが和宏は核に触った。それで理解した。

歴史を変えようと、精密に作られた機械のあるパーツだけ取り替えることではない。海の水



位を下げることなのだ。ある部分の水位だけ低くしようとして汲みあげても、あつというまに周囲の水が流れ込んできて一瞬できた空白を埋めてしまう。これが歴史の抑止力だ。

歴史を修正するとは、海全体を干上がらせたあと、別の場所から同じ量の海水をもってきて同じ水位までもどすこと。そのためには常識はずれのエネルギーが要る。そして和宏にそれだけの力はなかった。それだけだった。

「お前がそうであるように、俺にも半死人をいたぶる趣味はない。すぐに消してやるよ。歴史そのものからお前の、俺の存在が消える。それが歴史改変に敗れたものの受ける罰だ」

すでに視力は失われた。身体感覚も乏しい。今仰向けかうつぶせかさえわからない。

「自分を責めるな。お前はよくやった。身内びいきじゃない。本当だ。お前ほどの力があれば、俺はもっと簡単に歴史改変をなしとげていただろう」

声のあと何かが身体を撫でていく。本当は時野和宏という存在そのものを歴史から消し去る力が発動している最中なのだろう。だがすでに和宏の身体はそれも感じ取れない。

動け、逃げろ、抵抗しろ。そう考えることが精一杯だ。

“この声を聞いているのなら、もう指輪の持続時間はわずかです。急いでください！！ 弱気にならないで！！ 歴史の抑止力が何を言おうと、信じてはいけません。それらは全て罨です。あきらめないで、あなたならできます。あなたにしかできないのです！！”

頭の中に響いたアマテラスの声。

(……アマテラス……？ いる、のか……？)

声は出せない。頭の中だけで呼びかけてみる。だが、返事はない。「この声が聞いているのなら」というセンテンスから考えるに、今のは効力切れが近くなったら自動再生されるメッセージだろう。指輪の力はまだいくら残っているようだ。

(……なんで……だ……？)

歴史の改変に失敗し、自分が歴史そのものから消滅しようというときになぜこんなことを考えるのか、考えてどうなるのか。それでも、考えずにはいられない。

以前も、ソル相手に時間を稼ぐ前にも同じことを言われた。「あなたならできます。あなたにしかできないのです」。あの場にいた警察官は和宏だけだった。また、和宏の目には雑に見えたとはいえ、ソルの動きは普通の人間では反応さえできないレベルだった。ならばまともに戦えるのは和宏だけ。あの時はその程度にしか考えていなかった。

だが、今もなぜ「あなたならできます。あなたにしかできない」なのか。

消滅せずに存在している時点で、アマテラスのほうを持つ力は和宏なんかより数億段上だ。

アマテラスがこの世界へ来たほうがどう考えても確実だったろうに。

「じゃあな。もう一度言う、お前はよくやった。自分を責めるなよ」

その言葉で疑問が中断させられる。とうに身体感覚はない。それでもわかる。何かが少しずつ近づいている。それが和宏の意識と身体を飲み込み、溶かし、消し去るのだと。

(……いや、だ……)

何が？ わからない。でもいやだ。このまま消えるなんて絶対に嫌だ。

(お……れ……は……)

俺とは誰だ？ それさえかすみつつある。

何をしたかったのかもほとんどわからない。「取り戻したかったことだけはまだ覚えている。大切な人たちと、大切な人たちが生きる世界を取り戻したかった。すでに過去形。

それさえも、消されてしまう。あとかたもなく、完璧に。

(い、や……だ……)

死ぬのはまだ我慢できる。だが、その願いまでもそもそなかったことにされてしまうことだけは、どうしても、どうあっても我慢できない。

「な、なんだ、なんなんだ。どうして、どうやって抵抗してる!？」

なんだか自分の声があせっている。何か起こったのだろうか。

“ずいぶん身勝手なものだな。数十億人の未来をまるごとなかったことにしようとして、君自身は意識を消されるのは嫌だど?”

(!!)

頭に響く声。それと同時に、とりあえず意識だけはいくらか持ち直した。声だけなのに、そんな力を確かに持っていた。冷静というよりはどこか突き放したような感じがある男性の声。

この声だけは忘れられない。ひよつとしたら、弓子より、こころより。

なぜなら、この声の主こそが、弓子やこころとの出会いを作ったのだから。

(今度は、思わせぶりの素振りだけで消えたりしないだろうな、宗二おじさんよ!?)

鮮明になった意識で問う。幻聴やよく似た別人の声とは思わなかった。この声は戸田宗二のもの。それをすでに確定した前提として問いかけていた。

死者たる弓子が出現したのだ。同じように十七年前死んだ人間が問いかけてきたとしても、おかしいことはない。地上ならざる場所で会うのをはじめてではない。初めて転移魔力弾を使ったときも遭遇した。戸田宗二。弓子の父で和宏に人ならざる力を与えた男に。

“歴史改変に成功しても失敗しても、この君は同じように消滅する。それなのになぜ、歴史改変に失敗した結果の消滅だけここまでして拒む？ うまく騙されさえすれば、君は喜んで消滅するのか。君が求めているのはなんだ？ 親しい人たちの復活か、自分の満足か?”

(わざわざ皮肉を言うためにこんなところまで来たのかよ!! 娘が生き返れるかどうかの瀬戸際なんだぞ!! 協力する気がねえなら黙ってる!!)

無視された。しかし、以前転移魔力弾の世界で遭遇したときとは違う。あのときは最後の一瞬を除きある動作を再現するように設定されていた映像だった。だが、今はあえて和宏の言葉が無視している。姿は見えなくても、話しかける間の取り方などから確信できた。

” そうだな。娘の命の瀬戸際だ。君がうなずいてくれるなら、私も協力させてもらおう。”

やはり、はじめて会ったときと同じ淡々とした口調のまま、まず言った。

“私が十七年前君に意図せず与えた力は、君が人目を忍んで使ってきた程度のものではない。君が『過剰に消耗すると眠る』と思っていたのは、私がかけた防衛機制だ。死んだほうがまだましだと思う目に遭うかもしれない。だから私が強制的に眠らせてきた”

(おじさんが、眠らせてきた?)

“ああ、だがそのため君のプライベートが侵害していたわけではないから、そこは安心していい。弓子関連の情報は少々閲覧させてもらったが、それは私も娘の親ということだ。最終的に決めるのは本人だが、君はダメというのが率直な意見だ。あの子なら生活無能力者の一人や二人養っていけるだろうが、やはり親として娘には幸せになって欲しいからな”

(あんな)

いきなり話がものすごい身近になって、緊張感をそがれる。

だがすぐに気を取り直す。宗二は無視できないことをさらりと、あまりに多く言った。

過剰な消耗による拒めない眠り。和宏が別に望まずに持った力の副作用だと思っていた。だが、それさえも、より大きな力が発動することを防ぐための処置に過ぎなかった、と。

アマテラスは、このことに気がついていたのだろうか。だからこそ「あなたにしかできない」と「その力を借りる」といったのか。和宏には、アマテラスすら太刀打ちできない歴史の抑止力も排除する力があると知っていたから。

(その力を使えば歴史の改変はできる。けど俺もただじゃすまないってことか?)

“わからない。何も起こらない。改変された世界では、物心ついたころに持ったはずの力が失われている。死あるいは消滅。それ以外もすべてありえる。消滅する程度ではすまないほどの目に遭うことも覚悟して欲しい”

(……)

ひるむ。消滅しかけたときさえ、死を超えた恐怖を感じたのだ。それさえも「程度」と片付けるほどのことが、この身に降りかかるというのか。

“あまり時間はないようだ。急いでくれ。歴史の抑止力が先に決断してしまう”

(考えるまでもねえ。俺の中にそんなすごい力があるって言う遠慮なく使ってくれ)

即答した。時間を置けば恐怖が頭をもたげるから。

“わかった。では、その前にもう一度聞かせてほしい。『歴史の改変に成功しても失敗しても結局君は消滅だ。それなのになぜ失敗による消滅だけを激しく拒む? 君が求めているものはないんだ? 親しい人たちの復活や幸福か? それとも自分の満足か? 時間をさかのぼるほどの力でさえ、自分を変えることだけではできないなどと、本当に思っているのか?』”

なんのためにこの質問が必要なのかは正直なところわからない。

だが、歴史を改変までしうる力を力を持ったものは、一度はこの質問と向かいあわなければならぬ気がする。

(…:多分おじさんが正しいんだろう。俺が求めているものは、つまるところ俺の満足だけ。時間をさかのぼってまで求めるものは、気分よく騙されることだけだ)

結局人間は自分というフィルター越しにしか何も理解できない。時野和宏が理解する「時野和宏の声と顔」は、周囲が理解する顔や声と微妙に違う、なんてのはその典型だ。

自分でさえこの有様。まして他人を正しく理解しているなど思いついでしかない。和宏が取り戻したいと思っているのは、和宏が理解している姉でありころでしかない。

ならばなぜ、わざわざ過去改変なんて手間のかかることをするのだろう。自分の理解の仕方を、感じ方を変えてしまえばいい。そのほうがずっと簡単で確実だ。

死んだはずの人間が死んでおらず、起きたはずの事を誰も知らないことになる。

そこまでできる力でも、自分の記憶や感じ方だけはいじれない。

そうまでして、自分は特別だと、他とは違うと、言いたいのか。

すでに感覚は皆無に近い。それでも、意思では腕に力を入れ、拳を作る。

(わかってる。それだけだ。死ねばそれっきりの人間の思いに、歴史を変えるほどの価値なんてない。それでもよりリアルに騙されたくて、それだけのために俺は時間をさかのぼる。はた迷惑極まりない。それでも俺は止めない。俺は俺のために歴史を変えてやる!!)

“十分すぎる返事だ。たとえ強がりでも、今はそう言えるだけでいい”

(???)

何のために必要かもわからない質問は、回答へのコメントも意味不明だった。

“では、かつての私が君の中に残した防衛機制の力を使って、歴史の抑止力を排除する。消滅するのは私が君の力を制御するために残した力だ。君の中に残った力そのものはそのまま残る。そのあとにもどうなるかはわからない。覚悟しておいてほしい”

(ああ、わかった)

“では、お別れだ。時折垣間見た君の記憶は本当に楽しかった。私は死んでからはじめて本当の意味で人間としての生活を送れた気がする。不自由なことがあって、できないことがあって、そういうことにとらわれてはじめて人間なのだと、理解できた。ありがとう”

それは、戸田宗二が、生前は、全能の存在だった証の言葉。

そういうと同時に、身体が修復した。歴史から消滅させるに飲み込まれ、解かされ、消滅寸前だったはずの身体が一瞬にして再生する。

そして、身体から何かが引きずり出される。

(これは――)

はじめではない。これまでに二度経験した。一度は敵の魔力弾を吸収した直後。二度目は災厄を人間にするため今あるすべての力を根こそぎ吸い取られたと思った直後、それでも突然現れた請負テロリストと戦うため力を振り絞ったとき。

共通しているのは、消耗の限界だったということ。普段なら否応なく眠る一線も大きく超え

た先で、発動したのだ。時野和宏が十七年前、本当の意味で手に入れた力のほんのごく一部が。目が開く。周囲の景色が見える。身体が動く。

「な、なんでだ、どうしてだ!？」

まだ視界はぼやけている。人の輪郭はともかく、表情まではわからない。だが声ははっきり聞き取れた。どんな音楽よりも数多く聞いたその声は、心底驚きに染まっていた。

身体を起こした瞬間、身体から何かが抜けていく。

大きな大きな何か、波となって自分と同じ格好をした歴史の抑止力を飲み込む。

「あぶ……」

そんな間の抜けた声が、最後の声だった。色、音、匂い、肌触り、形、全てない。それなのになぜかあることだけははっきりわかる何かに飲み込まれて、歴史の抑止力は消えた。

“撃つ。それで歴史は改変される”

促されて、すぐに立ち上がり、右手を伸ばす。

まだ微かに残っている指輪の力と、自分のすべてを集中させる。

躊躇する理由はない。これこそ和宏が望んだことだ。

“時野さん、がんばって!!”

“当てにしているわよ、和宏”

突然聞こえる二人の声。幻聴でも本物でもどちらでもいい。

息を、魔力を、身体の力を、意思を、すべてを集約させる。

「歴史よ——」

右手が光る。放光体質と指輪の力と両方で。

「——変われ!!」

右手から力が打ち出される。それはまっすぐに境内へ突き進んでいき、直撃する。

そして音より先に、破壊の映像よりも先に、くる。修正が一気に始まる。

はじめからあの大破壊などなかったと、すべての書き換えが行われる。

それは和宏自身として例外ではない。意識と身体の両方が薄くなり始める。

“では、本当にさよならだ。ありがとう”

最後にそういうと、宗二の意識は和宏の中から完全に消えた。

「こっちこそ。ありがとうよ」

聞こえていなくても、そう返す。

もう指輪も失われ宗二も消えた。和宏をこの歴史の再構築から守ってくれるものは何もない。

あの破壊が起こらない以上、「大破壊によって死んだ弓子や傷ついたところを救いたい」と思う時野和宏は存在しない。だから消える。跡形もなく、存在さえ許されずに。

さつき歴史の抑止力が和宏に対してやろうとしていたことだ。散々抗った。それを今はただ、

「目的が達成できた」と思うだけで、いとも簡単に受け入れてしまっている。

思ったよりも抵抗する異物をより確実に葬り去るため、歴史の抑止力が喜んで飛びつく餌を用意した。可能性はゼロではないのに、頭がそれを信じたがらない。

溶かされる。消えていく。さつきと全く同じなのに。なぜかすがすがしくさえある。

達成感や満足感さえ消えていく。だが、悪い気はしない。

そんな感情さえも、すぐに溶かされて跡形もなく消えた。

八 姉が帰ってきた日

目覚めると、見慣れたいつもの天井があった。

（ああ、そうか。ここにー）

もどつてきたのか、と思つてから、すぐに身体を跳ね起こす。

「なっ!？」

すぐに記憶が繋がったことがおかしい。そう理解する。

歴史改変に成功すれば、歴史改変を望む和宏自体が存在しないはずだ。なのになぜか覚えて  
いる。歴史改変を望んだこと、アマテラスの存在、あの大破壊、すべて。

慌てて身体を跳ね起こす。見えるのは、見慣れた薄暗い自分の部屋。

モノが決定的に不足しているため、ごく短時間で簡単に掃除ができる。

便利だが同時に情けなさがこみ上げてくる、時野和宏が寝起きする部屋。

「そんな……」

どうして覚えている!? なぜ忘れなかった!?

誰を責めることも、誰に問い詰めることもできない。それでも恐怖が加速度的に膨れ上がる。  
軟禁の上謀殺される未来か。もう一人の和宏が過こした「歴史改変阻止を待ち望む」未来か。

そんな矢先、頭のなかに一筋の藁が浮かぶ。

「……まさか、失敗?」

ためらうことなく藁をつかむ。ここは奇跡的にあの大破壊で消滅しなかった自分の部屋?  
倒れていた和宏をアマテラスなりこころなりが、連れてきてくれただけなのか?

どちらが望ましいことなのかわからない。だがじっとしていたくなかった。不安だけが大き  
くなってしまふ。布団から離れて窓に駆け寄りカーテンをあける。

広がっていた。住宅やビルが無数立ち並ぶ、この窓からの見慣れた風景が。

あの大破壊のあとに続く未来ならば、絶対にありえない風景だ。

明かりがついている住宅は少ない。布団の中にいたことから考えても、今は深夜だろう。

状況を確認にかかる。まずは洋服ダンスの上におかれたデジタル置時計を見る。

現在「03・43」。この時計に日付の表示はないので、今が何日かはわからない。

「他に、なにか……」

粗大ゴミ置き場から拾ってきたテレビをつけてみる。番組はやっている。だが、深夜放送の  
映画とかばかりで、日付をはっきり言ってくれるものはない。

外に出る。やはりまだ夜明け前だ。かなり薄暗い。しかし隣の部屋の新聞受けにはもう朝刊  
がさしこんであった。和宏の部屋に入っていないのは、当然なので気にしない。

ちよつとそれを失礼して引っこ抜き、見る。そこにはしっかりと書いていた。

「平正四十一年三月二十八日」

歓迎会費とプレゼント代を稼ぐため、こころと第二東京競馬場に出陣したあの日。歴史改変に成功したかとはともかく、もどって来たことだけは確かとなった。

(なんでだ？　なんで俺は覚えてる？　全部なかったことになるんじゃないのか？)

その疑問が和宏を突き動かす。タンスの上に置いてあった携帯電話をとりあえて、番号を検索する。海外にいる姉の携帯電話番号を。

呼び出し音。

(まさか……)

広がる恐怖。記憶を引き継いでないはずなのに記憶を引き継いでいる。

呼び出し音。

ならばほかにも大破壊があった世界からの引継ぎがあってもおかしくない。

呼び出し音。

姉がすでに死んだことになっているとか。こころの右腕が失われているとか。

呼び出し音。

息がつまる。胸が締め付けられる。胃が痛い。

「はい、戸田ですけど。和宏、どうかしたの？　何かあったの？」

出た。姉が出た。和宏の前で物言わぬ亡骸となっていた姉の声が聞こえる。

「……姉……さん……」

生きている、姉は生きている。それで胸がつまり、続きをいえない。

すべてをつげたら軟禁謀殺されることが何だ。そんなの言わなければいいだけだ。あの和宏は言っていた。「それだけの力があれば俺はもっと簡単に歴史を変えていた」と。ならばきっとこの先にある未来は、あれらと違うものであるはず。違うものにできるはず。

「え、な、なに、どうしたの？　まさか何かあったの？　そうね、和宏がこんな二分二百円もする方法で連絡してくるなんて、誰かの訃報くらいしかないわね。わかったわ。すぐ帰国するから。それで誰なの、順当に教授？　通夜はどこでいつから？」

さりげなくなんかひどいことを言っている。姉は言葉の中で高原を殺した。

そんな勘違いさえ、すべてが懐かしかった。今はただうれしかった。

姉には「細かいことはメールで」とだけ言って、和宏は電話を切る。

確かに一分二百円を超える通話は、時野和宏にはかなり痛かったから。

それから一時間ほどした今、和宏は雑木林の中にいた。

あの過去の世界とほぼ同じ光景が、和宏の前に広がっている。

探すことにそれほどの苦勞はなかった。アマテラスに連れられてあの場所へ移動する前に、



空からいくつかの河川（の跡）を確認しておいたから。

そうしてたどり着いた雑木林は、何から何まで同じではなかった。

本来あるべき場所に社がない。しかし、それは今ないだけだ。社があるべき場所の地面は周囲に比べて草が明らかに少ない。かつてここに何かがあった証拠だ。

草が少なくなっている場所に、たたずむ。

目を閉じて精神を集中させると、感じる。

ここには強大な力を秘めていた何かがあった。

“これを聞いているということは、歴史改変に成功したのですね。おめでとうございます。私は歴史改変の消耗をいくつかの形で引きずっており、もう皆様のお力になれません。これから先、くれぐれもお気をつけて”

あの太陽の化身アマテラスの声が突然頭に響いた。その名も姿もしっかり覚えている。

「いる、のか？」

言葉のあと呼びかけても答えはない。さっきの言葉もこちらが聞き返すことを待つ素振りさえなかった。和宏が来たら自動的に再生されるようにセットされたものだろう。

『『これから先、くれぐれもお気をつけて』か』

アマテラスが最後に残してくれた言葉を、繰り返してみる。

その前にあった「もう私は皆様のお力になれません」と組み合わせれば、「時間をさかのぼれるのはこれきりです。二度目があると思わないでください」ともとれないことはない。

だが、今の和宏にはそれが違うことを確信していた。

「これからさらに苦しむことになるだろうが、負けるな」以外ではありえない。

「力よ、光弾となりこの手に宿れ」

魔力銃を介さず、自分の魔力で右手に光の弾丸を生成してみる。

できる。十七年前持った力は特に失われてなどいない。

この十七年間、和宏の中にいたという宗二の意識。過剰な消耗をうけて本能が秘められた力を発動させようとするつど、和宏の意識を強制的に眠らせてきたという。

目覚めたら危険だからと覚醒前に眠らせてきた力でさえ、歴史の抑止力さえ圧倒した。

ならば、眠らせてきた力本体は、枷が解かれたとき、どれほどの力を持つのか。

姉を取り戻した歓喜は去り、恐怖が外内両方から和宏をわしづかみにする。

「奴は、どうなんだ？」

今日から二週間ほどまえ、命が人間になったあの日、和宏の目の奥を覗き込んで、あの請負テロリストは何か言っていた。和宏さえ知らない何かを知っているような口ぶりだった。「改変される歴史に抵抗するのも面白そうだ」とさえ言っていた。

これまでのさまざまな人間離れた言動は、何かを知っているからなのか。

会いたい。聞きたい。

かつての三月二十八日は真夏日だった。朝も寝苦しかった。対してこの三月二十八日はそんなこともない。現在時刻午前五時三十二分。時間と季節に見合う肌寒さだ。なのに和宏の全身は冷たい汗まみれになっている。全然止まらない。

突然すべてを遠く感じる。この世界のすべてと切り離されてしまったかのように。

「何があるうと覚悟の上だっただろうが！！これは「何があるうと」の一部だ！！」

そう自分を叱咤しても、恐怖と孤独感が止まらない。

弓子たちに信じてもらえず、あげくに殺される恐怖などたいしたものではない。

「俺が欲しているのは俺の満足だけだ」

宗二の質問に答えた言葉が、頭にこびりついてはなれない。

あの時は半分勢いで言った。宗二がそういわせたがっているのもなんとなくわかった。

だが、どんなに強がろうと、人間は生きるために他者が必要だ。アマテラスとは違う。

今にしてそう思おうとしても、恐怖が消えない。自分のどこかが聞き返す。

「本当に必要なものは満足だけになりたくないのか？ もっとも確実に最短の手段からあえて目を背け、これからもずっと満足するために戦い傷つくことを続けるのか？」

その言葉に、いつまで逆らい続けることができるだろう。

「……時野さん、ですか？」

後ろから、声。聞きなれたはずの声。しかし、それはこの場にありえない。弓子が存在する今、声の主はこの世に存在している。しかしこの場にいることがありえない。和宏がこの場にいることなど、この声の主は知っているはずがないのだ。

これ以上ありえないことを受け入れたら何かがおわってしまう。根拠などなにもない。単なる妄想だ。そうわかっただけでも怖くて動けない。

「……人違いでした。ごめんなさい」

そういつて足音が遠ざかり始める。遠ざかっていく。離れていく。

「まってくれ！！」

振り返って叫ぶ。今叫ばなかったらこのままそれっきり。さらに湧き上がる恐怖が勝った。振り返った先には、

ばたばたばたばたばたばたばたばたばたばたばたばたばたばたばたばたばたばたばた

いつもと同じように動くしっぽ。見慣れた松永心が、その場に立っていた。

「こころ……どうしてここに？ まさか……」

その先を聞きたいと思う自分と、拒絶する自分がいる。

一方は言う。うやむやなまま我慢なんてできるか。

もう一方は言う。それでも我慢しろ。明確に否定されたらその先はない。聞かずにいけば、自分に都合よく信じていることができる。その余地を残しておけ。

「過去の改変、できたみたいですね。おめでとうございます」

簡単に、こころは言っただけだ。

「……え？　なんで、どうしてお前が知ってる？」

歴史は改変された。姉は死んでないことになった。なのに、どうして？

「多分、赤い風さんが何かしたんだと思います。伝言を頼まれました。『あなたには限界を極めてもらおう。妙な仲間意識なんてもたられたら迷惑だ』って」

「じゃあ、本当に……」

「ええ、キズモノにするっていうかしたっていうか、とにかく責任とってくださいね」

あの焦土の中で、片腕を失ったところがいった言葉。

「そうか、本当に知ってるんだな……」

強く、強く抱きしめる。両腕に感じる確かなぬくもり。

満足だけなどで足りるはずがない。いや、こうして確かな形を伴わずに、いきなり満足だけするなど、できるはずはないのだ。

「ええ、お久しぶりです」

こころもすぐ抱きしめ返してくる。あの雑木林と同じように、両腕で。

ややして、和宏は両腕を広げる。こころもそれを受けて身体を離す。

『限界を極めてもらう』って奴は言ったのか

いくらか表情を引き締めて聞いた。聞き逃すことはできない言葉だ。

「はい、『覚えていたら伝えてほしい』っていわれました」

やはり赤い風は何かを知っている。だから、『限界を極める』とか言えるのだ。

「あの時野さん、今日って、競馬に行っただ日ですよ」

和宏が恐怖に囚われたことも察したのか、抱きしめられたままこころが聞いてくる。

しっぽは無数ののはてなマークをつくって揺れている。それもなんとなく懐かしい。

「行った日」。言い間違いではない。和宏とこころにだけは。

「そうだな。とりあえず全レースはいたただきた」

とりあえず、和宏も恐怖を押さえ込む。いまならそれができる。

「そうですか？　もう暑さとか別物ですし、同じ結果にはならなそうですよ。もし同じになるとしても、結果がわかりきった勝負なんてつまらなくないですか？」

「お前、実は俺より勝負師だろ？」

「いえ、そういうことじゃないですよ。犯人がわかっている推理小説を読み直す気にはあんまりなれないでしょう？　それと同じ、じゃないんですよね。私にとっては遊びだけど、時野さんは生活がかつてるんだから、そんな甘いこと言ってもらえませんか」

うんうんそーかそーか、と何度もうなずく。頭と、しっぽで。

「生活をかけてやるならそれはプロです。負けばかりでたまに勝つと『何かの間違い』とか『雪

が降るからタイヤチェーンの用意だ』とかいわれても、他に仕事があつてお給料は国民の税金からでてるとしてもプロっぽい何かです。プロ？ ならできることは全部やつて当然です。軽はずみなこといってすいませんでした」

深々とさげた頭の先で、フラダンスみたいになんども腰をくねらせるしっぽがいる。

いえーい やふうー ひゅーひゅーひゅー とノリノリで踊っている。

「馬鹿にするのか謝るのか、どっちか一本にしばれ」

「いやだなあ。これは謝るフリして馬鹿にするところに意味があるんじゃないですか」

「……お前、性格も過去改変の影響うけてないか？」

「そうかもしれないね。拙者は存在しなくなった未来の記憶を持ってござるゆえ」

『拙者』？ あまつさえ『ぎん』？？ お前いつの時代の人間だ？？？」

「あ、今のなし。なしです。何かの間違いです。再起動中 再起動中 ういーん がちよん う

いーん がちよん がこがこがこ きゅうん きゅうん きゅうん きゅうん ふしゅー」

一度目を閉じて、あけた。

「C:\Documents and Settings\Administrator\Format C:」

「お前な……」

人間をパソコンみたいに再起動する。すべてをやり直す。普通の人間ならただのふざけた冗談さえ、和宏にとってはありえる恐怖だった。さっきまでは。

しかし今はもう違う。目の前のこころは、確かに自分と同じ世界を知っている存在だから。

もうこの場所に用はない。和宏たちは、示し合わせる出もなく自然にこの場を離れた。

あとがき

まずは、ここまで読んでくれた人に、ありがとうございます。お久しぶりです。仁木健です。四巻です。七年ぶりだというのに、以前の展開に対する描写は絶無です。気になった人は、是非三巻までを買い直してください。本屋は無理でも、ネット通販で普通に手に入ります。3冊買えば送料はまず無料です。最近コンビニ決済とかあって学生でも気軽に使えます。

宣伝はその程度にして、本筋について。

誰も覚えてないと思いますが、高原が2巻で「どんな神話上の奇跡も複数の現象を組み合わせれば魔術で説明できる」と言っています。

それと同じで、今神話で語られている様々な神の奇跡も、現在は理論段階のものも含めて「複合すれば」、科学で再現できないものはない。と個人的には思っています。

ならば、むしろ科学者こそ神の存在を率先して信じられるはず。にもかかわらず、神が多々非科学的な妄想とか言われるのはなぜか。それは科学とは別の側面にあるのでしょうか。

つまり、この世界と人間が、神の手による作品だとしたら、どちらもあまりにも出来が悪すぎる。そんなものしか作れない神が本当に全能か？ 意図的にこんな出来が悪いものを作ったなら、それは本当に神と呼ぶに値する善性を備えているものか？

科学以前の、そうした論理的な矛盾が、気になって仕方ないのでしよう。様々な科学を複合させて全ての奇跡を説明できる知識と頭の良さがあればなおさら、ここを「神の御心は人にはわからない」なんていい加減な理屈で逃げることは我慢ならないと思います。

そういう考えを踏まえて、僕なりの神を描いてみました。

先に書いたとおり、人間と世界が神の作品だとすると、途端に神そのものの格が落ち、説得力も失われる。つまり人間と世界に対して何らかの意図を神が持つほど嘘くさくなる。

だから、アマテラスは、人間に何も求めません。意図して人間も世界も作っていません。世界も人間も、アマテラスの影響で勝手に「発生した」だけです。

太陽は人など一切必要としない。しかし人に太陽は絶対欠かせない。

だから、アマテラス自身が繰り返し否定するのに、人はアマテラスを神と呼ぶ。

結果として、結構いい感じに、人間と世界の出来が悪くても威厳と格を落とさず、かつ論理的な矛盾も起こさない「神」として描写できたと思うのですが、どうでしょう。

ただ、この神にも、一つ決定的な問題があります。

こんな人間を一切必要としない神は、信じ、する意味や価値が絶無という点です。

この問題を突破できたら、その人は新しい世界宗教の教祖になれると思います。

興味がある人、挑戦してみてもどうでしょうか。

あと、ここがラストに言っていたコマンドを実行すると大変なことになります。

結果どうなっても、僕は一切責任持ちません。